岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第189集

丸木橋遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

丸木橋遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ケ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところでもあります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する処置をとってまいりました。

本報告書の丸木橋遺跡は、九戸村北方の折爪岳山麓に立地し、平成2年度・3年度の2ケ年間にわたる発掘調査により、縄文時代の狩り場跡や古代の集落跡が検出され、県北部における古代の集落の構造や土師器の編年を研究するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査および報告書作成に御援助、御協力を賜りました九戸村教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　工　藤　　巌

例　言

1．本報告書は、岩手県九戸郡九戸村大字江刺家第17地割字丸木橋33ほかに所在する丸木橋（まるきばし）遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、国道340号道路改良工事に伴って、遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県土木部と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．岩手県遺跡番号および調査略号は次のとおりである。

遺跡番号　ＩＦ92―2121　調査略号　ＭＫ－90・91

4．発掘調査期間および調査面積は次のとおりである。

発掘調査期間　平成２年９月10日～10月26日　平成３年８月１日～11月12日

発掘調査面積　550m²（平成２年度）、1,950m²（平成３年度）

5．発掘担当者は次のとおりである。

平成２年度　藤村敏男・金子昭彦

平成３年度　藤村敏男・斎藤　實

6．室内整理は平成２年11月１日～平成３年３月31日・平成３年11月１日～平成４年３月31日まで実施し、整理担当及び本報告書の執筆・編集は藤村敏男があたった。

7．分析鑑定は下記の方々に依頼した（敬省略）。

石質鑑定　佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）

樹種鑑定　早坂松次郎（岩手県木炭協会）

^{14}Ｃ測定　木越邦彦（学習院大学）

鉄器鑑定　赤沼英男（岩手県立博物館）

8．発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々に指導・助言をいただいた（敬省略）。

岡田康博（青森県埋蔵文化財センター）、昆野靖（岩手県立総合教育センター）、高橋信雄（岩手県立博物館）

9．土層観察及び出土遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1967）を参考にした。

10．野外調査にあたっては九戸村教育委員会及び地元の方々の御協力をいただいた。

11．調査の記録や遺物等の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

＜本文目次＞

序

例言

Ⅰ．調査に至る経過…… 5

Ⅱ．遺跡の位置と立地…… 5

1．位置…… 5

2．地形…… 5

3．基本層序…… 6

4．周辺の遺跡…… 6

Ⅲ．調査と室内整理の方法…… 9

1．野外調査…… 9

2．室内整理…… 9

Ⅳ．検出された遺構と遺物……12

1．古代竪穴式住居跡……12

2．土坑……44

3．陥し穴状遺構……45

4．建物跡……46

Ⅴ．遺構外の遺物……46

Ⅵ．まとめ……51

1．遺構について……51

(1) 土坑……51

(2) 陥し穴状遺構……51

(3) 竪穴式住居跡……51

(4) 建物跡……53

2．出土遺物について……54

(1) 坏……54

(2) 甕……56

(3) 所属時期(まとめにかえて)……59

付篇

1．学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書……66

2．丸木橋遺跡出土刀子の金属学的解析……67

＜図版目次＞

第1図　岩手県全図…… 1

第2図　遺跡位置図…… 2

第3図　地形区分図…… 3

第4図　周辺の地形図…… 4

第5図　遺跡分布図…… 8

第6図　調査範囲と遺構配置図……11

第7図　第1号住居跡・出土遺物……12

第8図　第2号住居跡・出土遺物(1)……14

第9図　第2号住居跡……15

第10図　第2号住居跡出土遺物(2)……16

第11図　第2号住居跡出土遺物(3)……17

第12図　第3号住居跡……19

第13図　第3号住居跡・出土遺物……20

第14図　第4号住居跡・出土遺物……22

第15図　第5号住居跡・出土遺物……24

第16図　第6号住居跡……26

第17図　第6号住居跡・出土遺物……27

第18図　第7号住居跡……28

第19図　第7号住居跡出土遺物……29

第20図　第8号住居跡……31

第21図　第8号住居跡出土遺物(1)……32

第22図　第8号住居跡出土遺物(2)……33

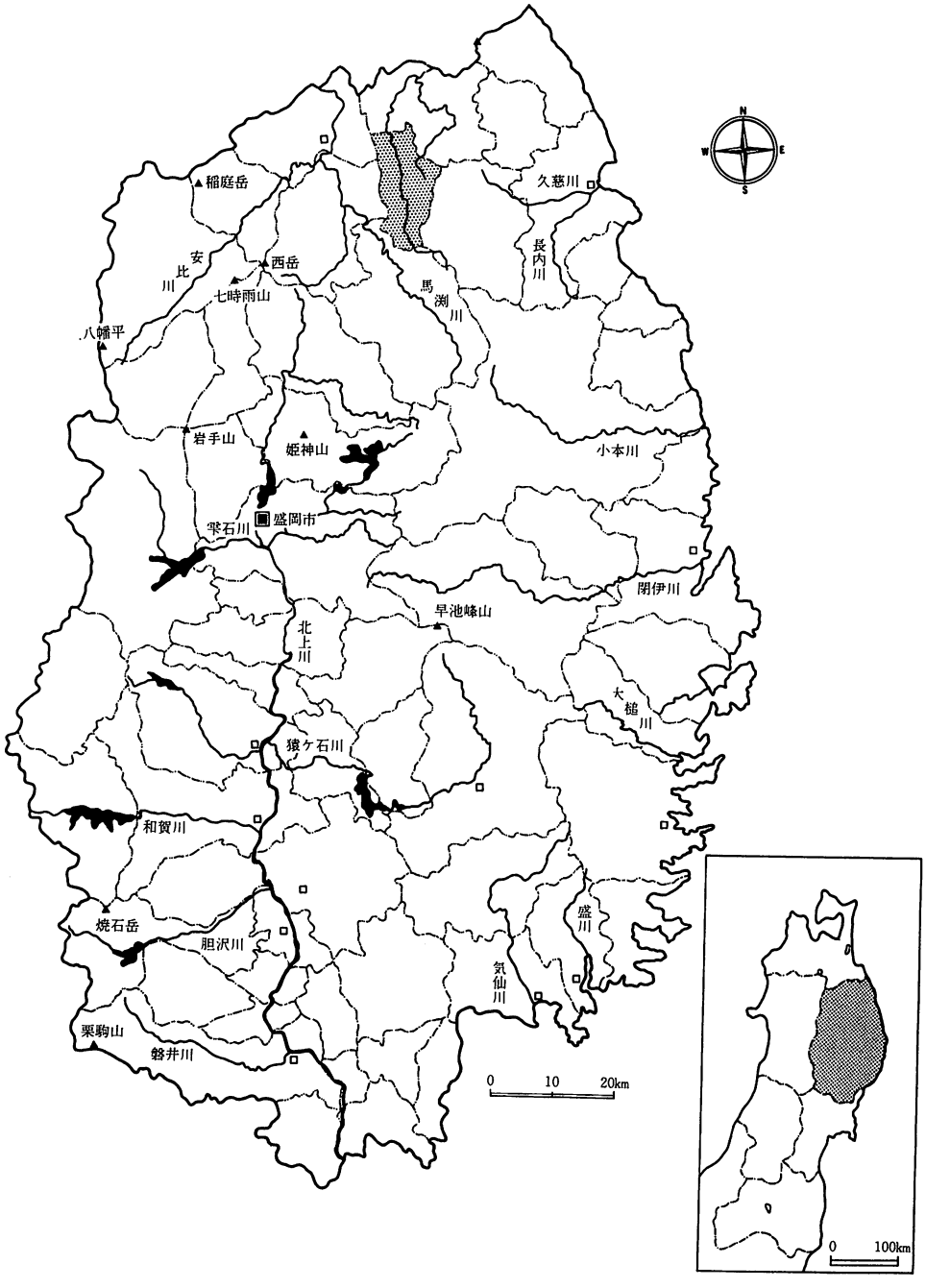
第23図　第9号住居跡……35

第24図　第9号住居跡出土遺物……36

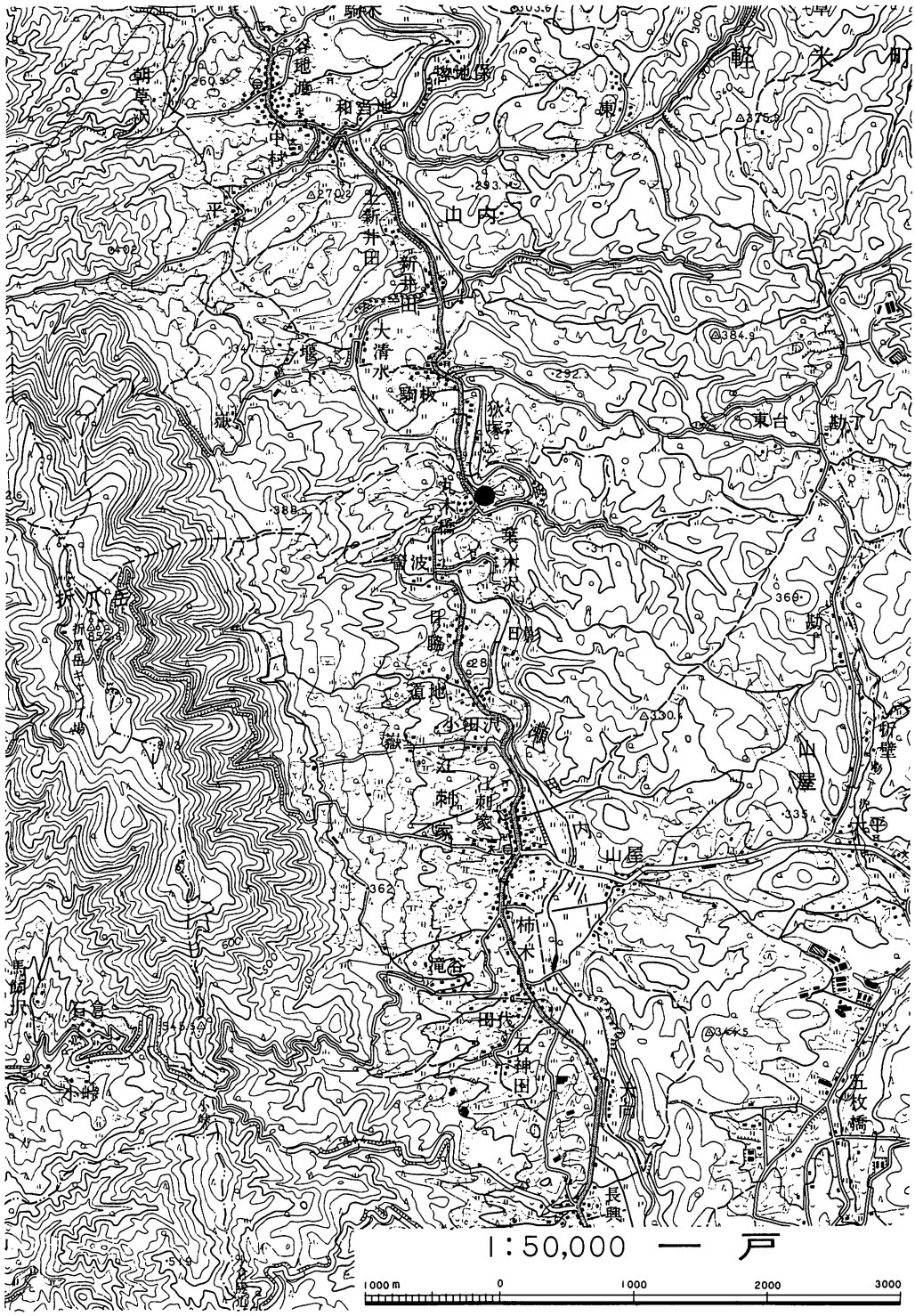
第25図　第10号住居跡……37
第26図　第10号住居跡カマド……38
第27図　第10号住居跡出土遺物(1)……39
第28図　第10号住居跡出土遺物(2)……40
第29図　第10号住居跡出土遺物(3)……41
第30図　第11号住居跡……43
第31図　第11号住居跡・出土遺物……44
第32図　陥し穴状遺構・土坑……45
第33図　建物跡……47
第34図　遺構外の出土遺物(1)……48
第35図　遺構外の出土遺物(2)……49
第36図　古代住居跡規模図……53
第37図　坏の口径・器高・底径……55
第38図　出土土師器・坏集成図……61
第39図　出土土師器・甕集成図(1)……62
第40図　出土土師器・甕集成図(2)……63

〈写真図版目次〉

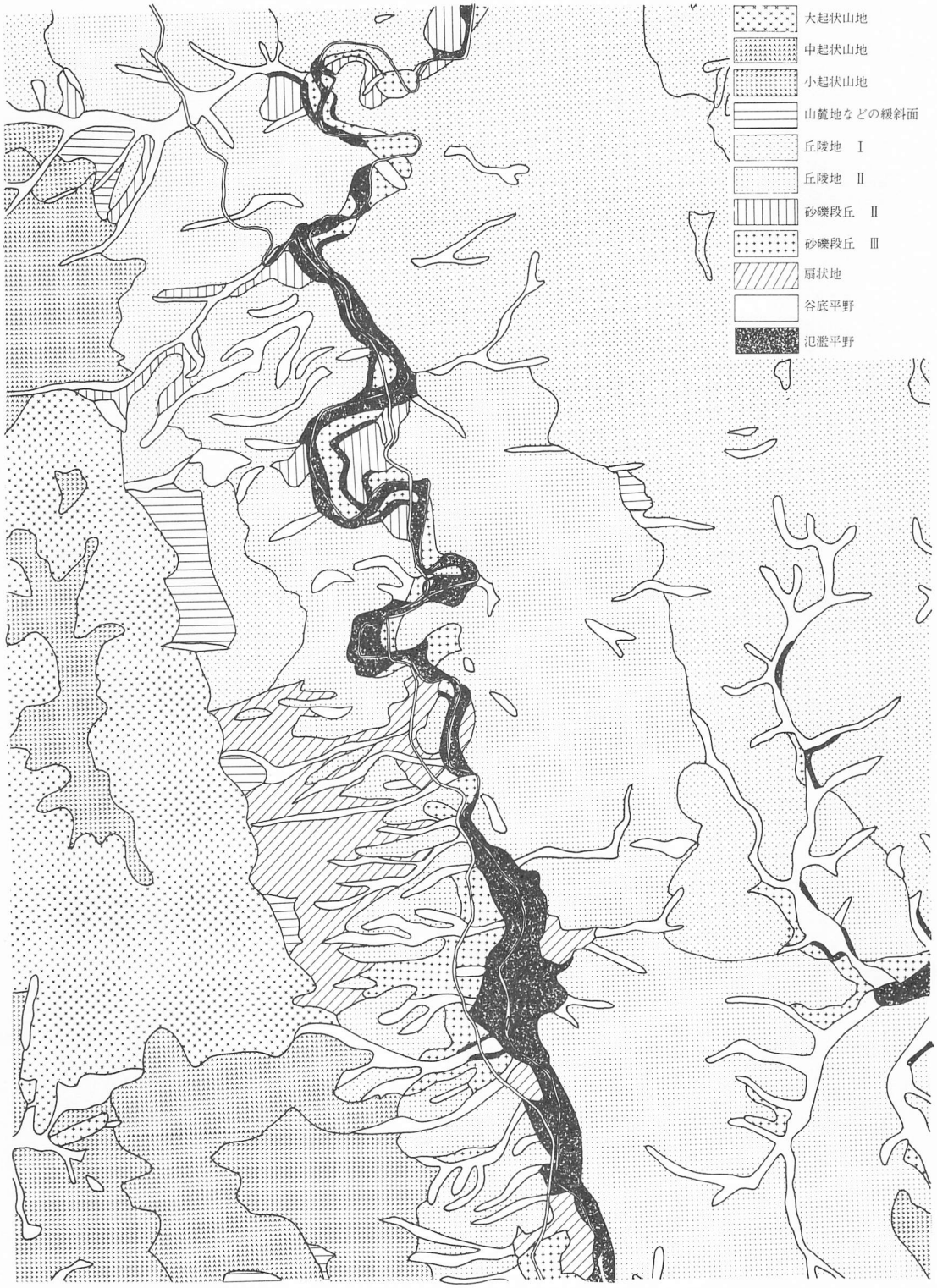
写真図版１　遺跡全景・第１号住居跡……71
写真図版２　第２号住居跡……72
写真図版３　第２号住居跡……73
写真図版４　第３号住居跡……74
写真図版５　第３号住居跡……75
写真図版６　第４号住居跡……76
写真図版７　第５号住居跡……77
写真図版８　第６号住居跡……78
写真図版９　第７号住居跡……79
写真図版10　第８号住居跡……80
写真図版11　第９号住居跡……81
写真図版12　第10号住居跡……82
写真図版13　第10号住居跡……83
写真図版14　第11号住居跡ほか……84
写真図版15　土坑・陥し穴状遺構……85
写真図版16　第１～５号住居跡出土遺物…86
写真図版17　第２号住居跡出土遺物……87
写真図版18　第５～７号住居跡出土遺物…88
写真図版19　第８号住居跡出土遺物……89
写真図版20　第８・９号住居跡出土遺物…90
写真図版21　第10号住居跡出土遺物……91
写真図版22　第８・10号住居跡出土遺物…92
写真図版23　第11号住居跡・遺構外出土遺物……93
写真図版24　第８号住居跡・遺構外出土遺物……94


稲庭岳
安比川
西岳
七時雨山
八幡平
久慈川
長内川
馬渕川
岩手山
姫神山
小本川
雫石川
盛岡市
閉伊川
早池峰山
北上川
大槌川
猿ケ石川
和賀川
盛川
焼石岳
胆沢川
気仙川
栗駒山
磐井川
0 10 20km
0 100km

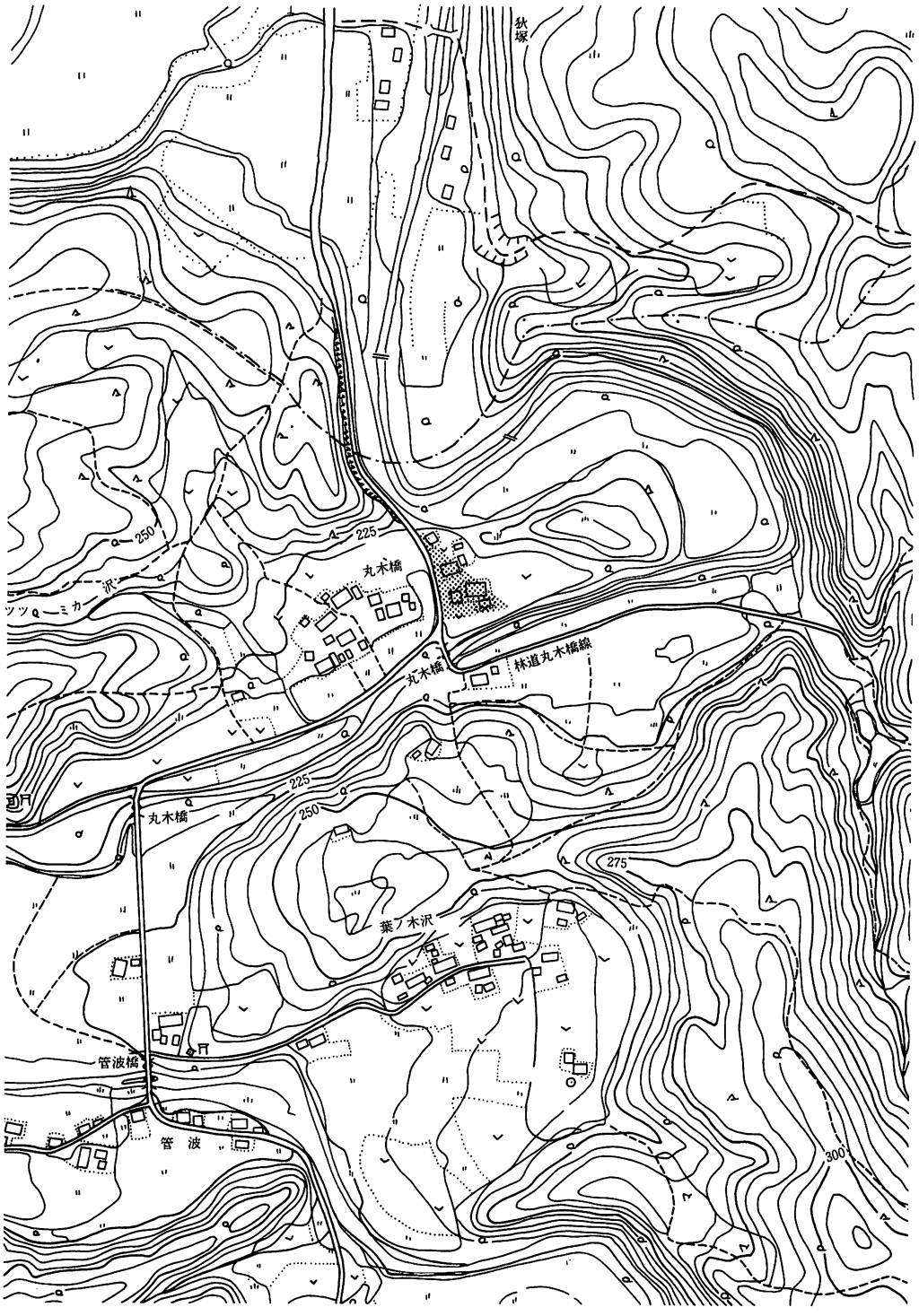
第1図　岩手県全図


1:50,000
1000m
0
1000
2000
3000
新井田
大清水
駒板
狐塚
東台
勘十
波
伊勝
田朝
道地
小田代
江
柿
家
内
山屋
柿木
滝谷
田代
神田
長興
五枚橋
山内
東
平
中林
神宮地
谷地
朝草
駒木
氷
町
軽

第2図　遺跡位置図


大起状山地
中起状山地
小起状山地
山麓地などの緩斜面
丘陵地　Ⅰ
丘陵地　Ⅱ
砂礫段丘　Ⅱ
砂礫段丘　Ⅲ
扇状地
谷底平野
氾濫平野

第3図　地形区分図



第4図　周辺の地形図

Ⅰ．調査に至る経過

一般国道340号は、陸前高田市から北上山地を縦断して八戸市に至る総延長212.97kmの主要幹線道であり、軽米町・九戸村においては基幹となる最重要路線である。九戸村管波地区においては幅員狭少、線形不良であることから、同村大字江刺家第15地割字道地87から同第17地割字丸木橋54―11までの延長1.12km、幅員11m の改良工事が昭和62年に着手され、平成３年に完成の予定である。

これにかかわる埋蔵文化財の取扱いについては、岩手県土木部、二戸土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議がなされ、改良工事に関連する遺跡の分布調査は昭和60年12月３日付け「二土第1334号」による依頼を受けて県教育委員会文化課が昭和60年12月23･24日に実施した。さらに協議を重ね、同61年11月７・８日に現地確認を行い、管波遺跡、葉ノ木沢遺跡、丸木橋遺跡の３遺跡について事前の発掘調査を実施することにした。

これにより丸木橋遺跡については、平成２年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に組み入れられ、平成２年９月１日付け委託契約により調査に着手することとなった。また、買収未了の地区を含む部分については継続調査することとし、平成３年８月１日付け委託契約により調査を実施したものである。

Ⅱ．遺跡の位置と立地

１．位置

丸木橋遺跡は北緯40°16′、東経141°24′45″付近に位置し、九戸村役場の北方約７kmのところにある。九戸村は、岩手県のほぼ北端部にあり、東方が軽米町・山形村、南方が葛巻町、西方が二戸市・一戸町と隣接する人口約8000人の村である。

２．地形

九戸村は北上山地北端部に位置しており、西方に比較的起伏の大きい山岳が南北に連なっている。地域の大半は標高250m 前後の丘陵地である。

北上山地の北半部において北流し、遺跡を取り囲む形で流下する瀬月内川は、軽米町で雪谷川と合流して新井田川となり、青森県八戸市で太平洋に注ぐ。

地形区分図に見られるように、西部は南北方向に伸びる高低差400～200m の大・中起伏山地によって占められている。主な高地は折爪岳（852m）、小倉岳（652m）、傾城峠（736m）である。前述の河川はこれらの山地の狭間に砂礫段丘や扇状地・谷底平野・氾濫平野等を形成している。平地は村の北東部に多く見られる。

遺跡は瀬月内川左岸の観音林丘陵が東方向に舌状に張り出した部分に立地しており、丘陵を囲むように川が南西方向から北東そして北から西方向へ蛇行し、再び北方向に流れの向きを変える付近に位置している。遺跡の標高は220m前後、河岸低地との比高は10m前後である。調査区の現況は、宅地及び畑地であり、住宅の建設に当って遺構がかなり破壊されていた。

3．基本層序

遺跡の土層

Ⅰ層　黒褐色土（耕作土）層厚は20～50cm。

Ⅱ層　黒色土　（旧表土）層厚は20～30cm。

十和田ａ降下火山灰の分布によって、古代の遺構が検出できる。

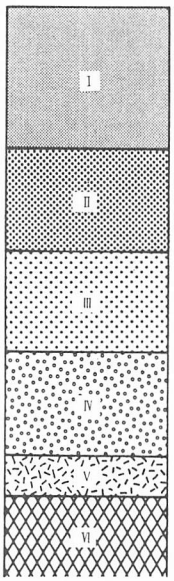
Ⅲ層　黒褐色土　中掫浮石層。層厚は20～30cm。砂を含む。

上面が遺構検出面である。部分的に明黄褐色土を含む。

Ⅳ層　黒褐色土　　層厚は20～30cm。

Ⅴ層　暗黒褐色土　　層厚は10～15cm。北半部は

この下に南部浮石が、南半部では川床砂礫が続く。



基本土層模式図

4．周辺の遺跡

岩手県教育委員会文化課が集約した分布調査の成果を、九戸村および軽米町の遺跡について丸木橋遺跡を中心に一覧表に示した。

遺跡の分布状況として、観音林丘陵上に集中している傾向があるといえる。また高位の立地面上には縄文時代後期・晩期の遺跡、低位の立地面上にはそのほかの時期の遺跡が分布する傾向にある。

近年この地域は開発行為に伴う発掘調査がなされているが、古くは昭和30年の田代遺跡・昭和35年の妻の神遺跡・昭和47年山根遺跡といずれも草間俊一が調査報告している。

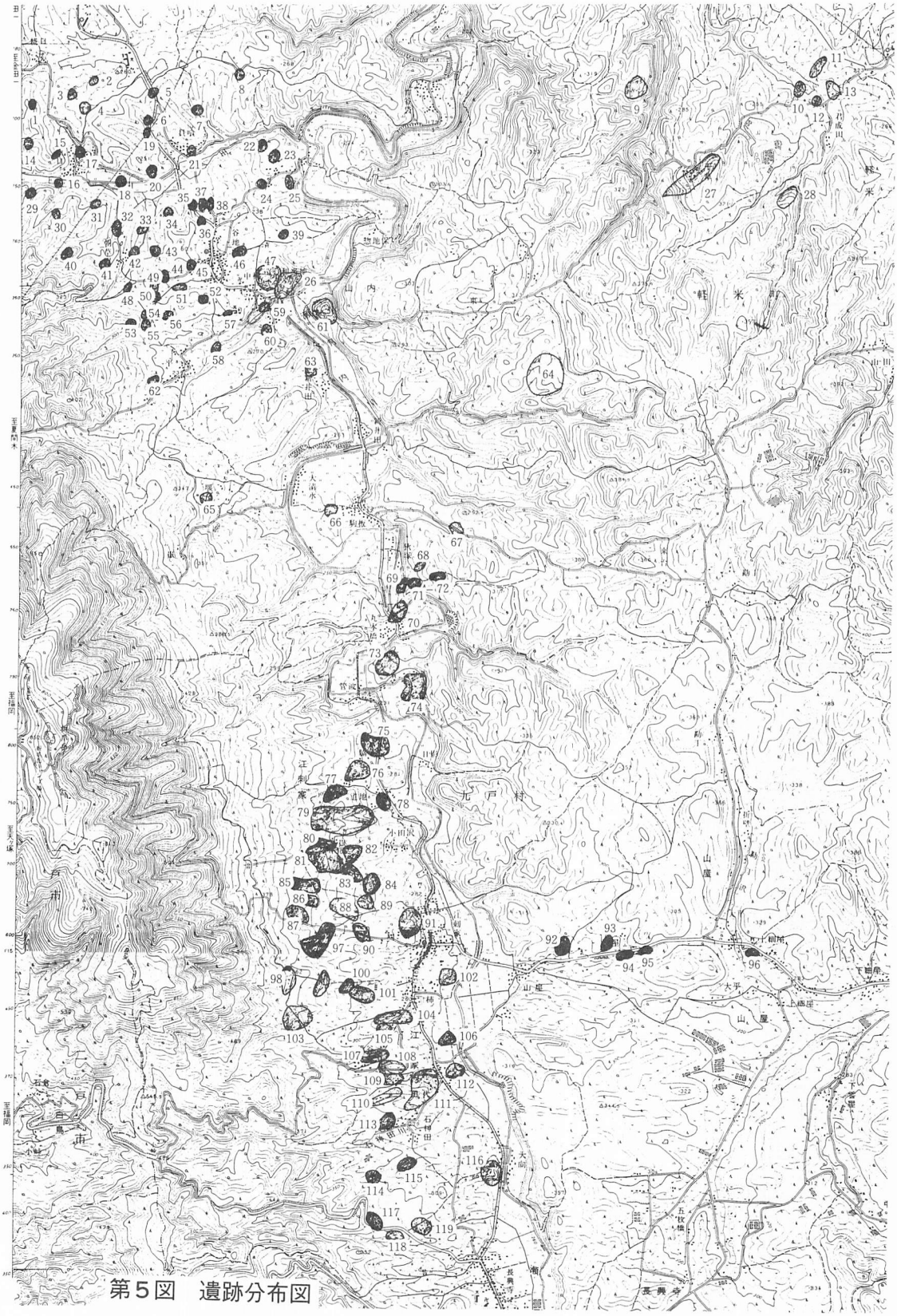
田代、道地Ⅰ・Ⅱ、嶽Ⅰ・Ⅱ、江刺家、江刺家Ⅳ・Ⅴ、滝谷Ⅲ、駒板のそれぞれの遺跡は八戸自動車道建設に伴い昭和55年以降調査報告されている。川向Ⅲ、伊保内Ⅰａ・Ⅰｂ遺跡は総合土地改良事業に伴い調査報告されている。昭和63年以降、管波Ⅰ、葉ノ木沢、丸木橋、糀口Ⅰの各遺跡は国道340号改良工事に伴い発掘調査報告がなされている。

遺跡の南方約250mのところに葉ノ木沢遺跡、南西約300mのところに管波Ⅰ遺跡があり、南約4kmには田代Ⅳ遺跡、北東2kmには駒板遺跡がある。

分布図内の遺跡の概要および時代別の傾向については周辺の遺跡一覧表と各遺跡の報告書を参照いただきたい。

No.	遺跡名	所在地	遺構・遺物
1	山口 I	大字山内字山口	縄文、土師器
2	新田 I	大字山内字新田	縄文
3	新田 II	〃 〃	縄文、土師器
4	新田 III	〃 〃	縄文、土師器、陶器
5	貝喰 IV	大字山内字貝喰	縄文、土師器、陶器
6	太田向 II	大字山内字太田向	縄文
7	貝喰 V	大字山内字貝喰	縄文
8	貝喰 III	〃 〃	縄文、土師器
9	館森	大字軽米字京仏	
10	君成田 V	大字軽米字君成田	縄文（晩期）
11	君成田	〃 〃	縄文（後期）、注口土器
12	君成田 VI	〃 〃	縄文（晩期）
13	君成田 VIII	〃 〃	縄文
14	山口 IV	大字山内字山口	縄文、フレーク
15	山口 V	〃 〃	縄文
16	山口 VII	〃 〃	縄文
17	山口 VI	〃 〃	縄文
18	山口 VIII	〃 〃	縄文、土師器、陶器
19	太田向 III	大字山内字太田向	土師器、弥生土器
20	太田向 IV	〃 〃	縄文土器、弥生土器
21	貝喰 V	大字山内字貝喰	土師器
22	山内駒木 I	大字山内字山内駒木	縄文
23	山内駒木 II	〃 〃	縄文
24	山内駒木 III	〃 〃	縄文
25	山内駒木 IV	〃 〃	縄文
26	和当地 II	大字山内字和当地	縄文
27	千草	大字軽米字千草	縄文（後・晩期）
28	館ケ森	大字軽米字君成田	縄文
29	山口 IX	大字山内字山口	縄文（晩期）、土師器、フレーク
30	荒田沢 V	大字山内字荒田沢	縄文
31	荒田沢 I	〃 〃	縄文
32	荒田沢 III	〃 〃	縄文
33	大久保頭 II	大字山内字大久保頭	縄文、土師器
34	大久保頭 I	〃 〃	縄文、土師器
35	太田向 I	大字山内字太田向	縄文、注口土器
36	山内下平 V	大字山内字山内下平	縄文
37	山内下平 III	大字山内字下平	縄文
38	柳	大字山内字柳	縄文
39	和当地 I	大字山内字和当地	縄文
40	荒田沢 V	大字山内字荒田沢	縄文、土師器
41	朝草沢 II	大字山内字朝草沢	縄文
42	朝草沢 I	〃 〃	縄文
43	大久保頭	大字山内字大久保頭	縄文
44	谷地渡 II	大字山内字谷地渡	縄文
45	谷地渡 I	〃 〃	縄文
46	大久保尻	大字山内字大久保尻	縄文
47	古山	大字山内字和当地	
48	上平 I	大字山内字上平	縄文、土師器
49	谷地渡 III	大字山内字谷地渡	縄文
50	上平 III	大字山内字上平	縄文
51	谷地渡 IV	大字山内字谷地渡	縄文
52	谷地渡 V	〃 〃	縄文
53	上平 II	大字山内字上平	縄文、土師器
54	上平 IV	〃 〃	縄文
55	上平 VI	〃 〃	縄文
56	上平 V	〃 〃	縄文
57	中村 I	大字山内字中村	縄文
58	中村 II	〃 〃	縄文
59	和当地 III	大字山内字和当地	縄文
60	和当地 IV	〃 〃	縄文

No.	遺跡名	所在地	遺構・遺物
61	円館	大字山内字権現林	堀
62	小屋の沢	大字山内字小屋の沢	縄文（晩期）、注口土器
63	和井田館	大字山内字上新井田	縄文、土師器、陶器
64	駒板	大字山内字駒板	土師器
65	高屋敷	大字山内字大清水	縄文（晩期）、壺形土器
66	まつっこ	大字山内字駒板	縄文（晩期）、石棒
67	山内	〃 〃	縄文（晩期）
68	狄塚 I	大字狄塚字川向	縄文（晩期）
69	狄塚 III	〃 〃	縄文（晩期）
70	丸木橋	大字江刺家第17地割	縄文
71	狄塚 II	大字狄塚字川向	縄文（晩期）
72	狄塚 IV	〃 〃	縄文（晩期）、弥生土器
73	高見館	大字江刺家第18地割	
74	葉ノ木沢	大字江刺家字葉木沢	縄文
75	管波 I	大字江刺家第16地割	縄文（早・前・後期）
76	管波 II	〃 〃	縄文（晩期）、土師器
77	道地 II	大字江刺家第14地割	縄文（晩期）
78	道地 I	〃 〃	石棒、石斧、石匙
79	道地 III	〃 〃	縄文（晩期）
80	嶽 I	大字江刺家第9地割	縄文（晩期）
81	嶽 II	大字江刺家第13地割	縄文
82	嶽 III	大字江刺家第12地割	縄文（晩期）
83	嶽 IV	大字江刺家第13地割	縄文（晩期）
84	嶽 V	大字江刺家第12地割	縄文（後・晩期）
85	江刺家 II	大字江刺家第13地割	縄文（後・晩期）
86	江刺家 III	〃 〃	縄文（中・晩期）
87	江刺家 V	〃 〃	縄文（晩期）
88	江刺家 IV	〃 〃	縄文（中・後・晩期）
89	江刺家 I	大字江刺家第12地割	縄文（晩期）
90	若宮 II	大字江刺家第8地割	縄文（晩期）
91	江刺家館	大字江刺家第10地割	垣、土塁、平場
92	山屋 I	大字山屋第3地割	土師器
93	山屋 II	〃 〃	土師器
94	山屋 III	〃 〃	土師器
95	山屋 IV	〃 〃	土師器
96	大平	大字山屋第5地割	縄文
97	若宮 I	大字江刺家第8地割	縄文（晩期）
98	滝谷 I	大字江刺家第9地割	縄文（晩期）
99	滝谷 II	大字江刺家第6地割	縄文（晩期）
100	滝谷 III	〃 〃	縄文（晩期）
101	滝谷 IV	〃 〃	縄文（晩期）、土師器
102	古館堀（上宿堀）	大字江刺家第7地割	堀
103	滝谷 V	大字江刺家第5地割、6地割	縄文（中・晩期）、土師器
104	柿の木 I	大字江刺家第6地割	縄文
105	柿の木 II	〃 〃	縄文、土師器
106	田代 I	大字江刺家第4地割	縄文
107	柿の木 III	大字江刺家第5地割	縄文
108	田代 II	〃 〃	縄文
109	田代 III	大字江刺家第3地割	縄文
110	田代 VI	〃 〃	縄文
111	田代 V	〃 〃	縄文
112	田代	大字江刺家第2地割	縄文（前・中期）、石鏃、石槍、石斧
113	田代 IV	大字江刺家第3地割	縄文
114	石神田 II	大字江刺家第1地割	縄文
115	石神田 I	〃 〃	縄文
116	大向館	大字長興寺第11地割	堀、平場
117	長興寺 I	大字長興寺第13地割	縄文
118	長興寺 III	大字長興寺第12地割	縄文
119	長興寺 II	大字長興寺第13地割	縄文



第5図　遺跡分布図

III．調査と室内整理の方法

1．野外調査

(1) 調査区の設定

調査グリットの設定は改良工事用の道路中心杭の２点を基点として行った。

基点１から基点２方向を10m ごとに区画しＡ～Ｌを付し、これと直角の東方向10m ごとに１～６を付した。従ってグリット名は４Ｇ、４Ｈのように呼称し、必要に応じて２ｍ×２ｍの小区画名を付した。また区域内の位置を原点（Ｎ０・Ｅ０）からの１ｍ×１ｍの小区画に基づいて呼称する形も併用した。北方向の座標軸線は真北に対して30°西に偏して設定されている。

(2) 粗掘りと検出遺構

調査対象区は、ほぼ全面にわたり重機を利用して表土除去を行った。

検出された遺構は、各区域名ごとに住居跡・住居状遺構は１から、土坑等は51から一連の番号を与え、この分類番号に区域名を合わせ、遺構名とした。焼土、炉跡、溝跡等は区域名を前に付すのみで呼称したが、同一区域での同種の遺構が複数検出された場合は№１・№２と付番した。ただし、整理の過程においては遺構の種類毎に第１号何々のように通し番号を付して掲載している。

(3) 精査と実測

精査は、住居跡・住居状遺構は４分法、土坑・陥し穴・ピット・焼土遺構は２分法を用いた。溝については５ｍまたは10m 間隔でセクションベルトを残して精査した。

遺構の実測図作成にあたってはグリット軸に合わせて１ｍメッシュを基本とする簡易遣り方を設定し、住居跡・土坑・陥し穴状遺構など平面図は20分の１縮尺、溝跡の平面図は40分の１、断面図は20分の１で作成した。基本層序はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

2．室内整理

ａ．資料の整理は通常の手順によって行い、報告書の作成にあたった。

ｂ．報告書の内容のうち、遺構および遺物に関しては本文と図版を混在させ、それぞれの写真図版は文末に掲載した。

ｃ．遺構については付番した順序で記載し、調査時のグリットに応じた名称も付記してある。

ｄ．遺物には遺構内外や種類を幾分考慮して番号を付したが、一部不統一な部分もある。図版および写真図版に掲載した遺物の番号もそれぞれに対応させた。

ｅ．遺構縮尺は40分の１と60分の１を原則として用い表示した。

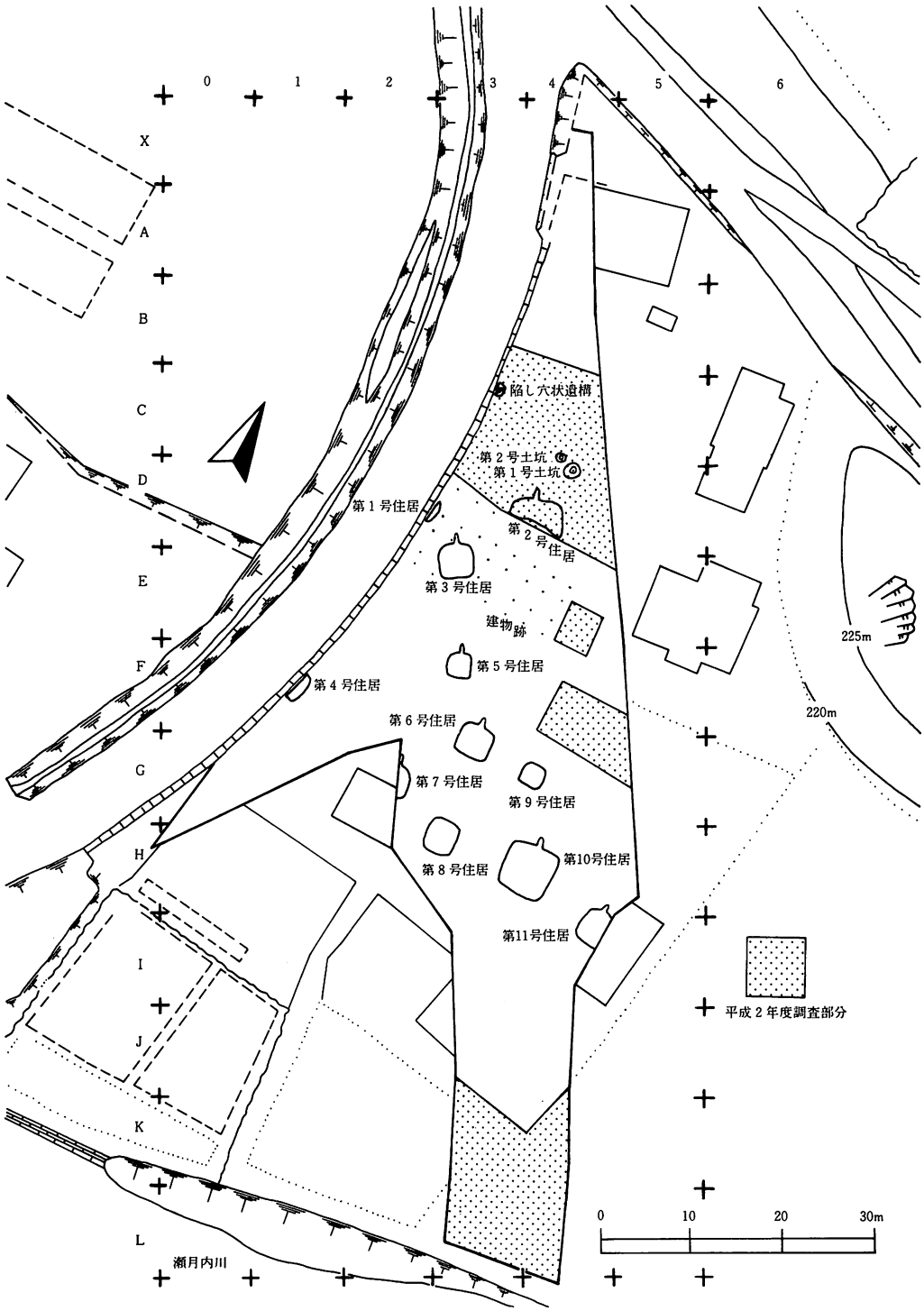
f．遺物図版・写真図版は種類によって縮尺率をそれぞれ統一し、任意の縮尺を用いたものも合わせ出来る限り縮尺率を表示した。

g．石器の一覧表において長さ・幅・厚さの単位はmmであり、重さの単位はgである。

h．遺物において、明らかに遺構の時期と掛け離れた遺物、例えば中世の遺構から出土した縄文土器の様に時期関係が明白な場合には遺構外の部分で取り扱った。

i．住居跡の場合床面や壁が硬堅な地山に構築されていない場合が多いと精査が難しく、ましてや掘り方埋土と（狭義の）貼り床の判別も困難な場合が多く、結果として断面形や平面形が掲載写真と若干異なる場合がある。

j．遺物では土師器の出土量が圧倒的に多い。本文中に調整技法を出来得る限り記載するよう意を用いたが至らない点もあるかと思われる。それらについての補いは図に付した表で行った。なお土師器甕の体部においてヘラナデの調整についてはナデと記載している。器面調整が不明瞭な土師器の多い本遺跡の場合においては代表的な調整のみを表現し記載してある。



第6図　調査範囲と遺構配置図

Ⅳ．検出された遺構と遺物

１．古代竪穴式住居跡

第１号住居跡（２Ｄ１住）

調査区西縁の道路際で検出された。Ｕ字溝・簡易水道工事および住宅の基礎工事により上部が削平され、残存状況はあまりよくない。また検出できたのは、全体の一部分である。

＜遺構＞（第７図、写真図版１）

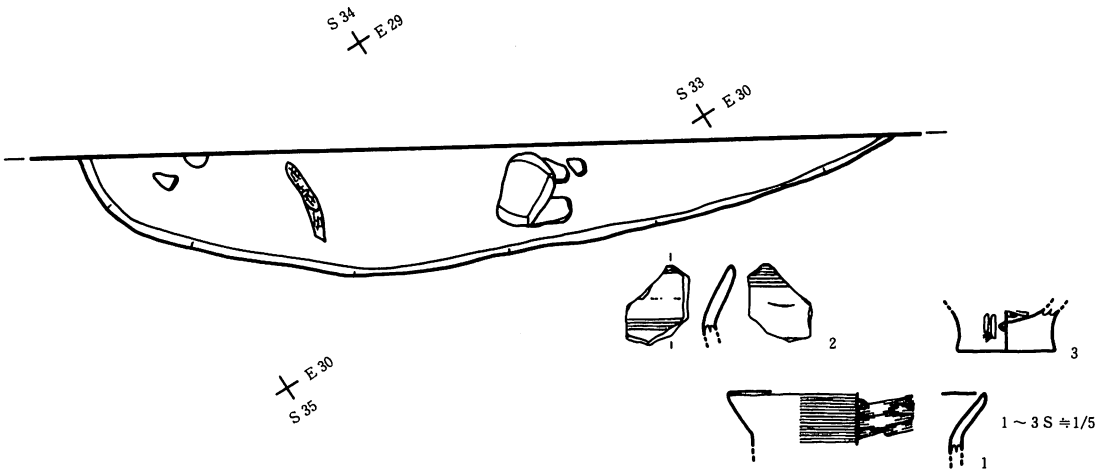
平面形　隅丸方形と推定される。西側の４分の３が国道の下になっている。

規模　　東辺の長さは約3.0mである。

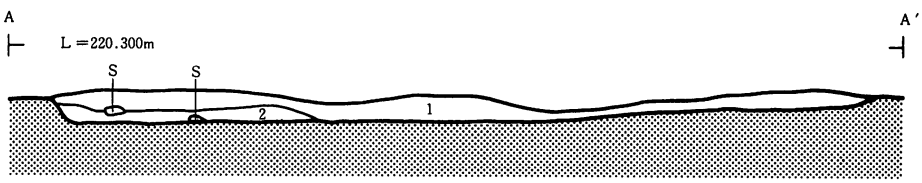
埋土　　２層に細分され、下部埋土の出土遺物としては土師器の砕片が数点認められる程度である。

壁　　中掫浮石層を掘り込んでいるが、壁として明確に識別できるのはその下層からである。残存壁高は10cm内外である。

床面　　貼り床・周溝は認められなかった。



No	地点層位	器種	外部		内部		口径cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	底部	口縁部	底部					
1	Ｑ４床面	甕	ナデ	―	ヘラナデ	―	(15.6)	―	7	16	7.5YR4/4褐色　頸部を細い工具で区画
2	Ｑ４床面	甕	摩耗	―	ナデ	―	(15.0)	―	7	16	10YR6/4鈍黄橙色　輪積み痕あり
3	Ｑ１床面	甕	―	―	―	―	―	6.0	7	16	7.5YR6/4鈍橙色　外面に葉状圧痕、輪積み痕あり



１層　10Y R 2/3 黒褐色土　やわらかい粘性幾分あり
２層　10Y R 3/4 暗褐色土　粘性幾分あり、ややかたい

第７図　第１号住居跡・出土遺物

柱穴　調査範囲内に認められない。

カマド　詳細は不明であるが、位置は北壁中央部と考えられる。

その他　床面に炭化材や焼土が散在しており焼失住居である。炭化材は柱と思われるものが大半で、その樹種としてクリが多く確認された。

＜遺物＞（第７図、写真図版16）

出土遺物は土師器甕の口縁部２片と底部１片である。

１は甕の口縁部破片である。頸部に細い沈線様のものが認められる。２は摩耗した甕の口縁部破片である。内部調整は粗雑である。３は外面に藁状圧痕のある甕の底部破片である。

遺構の時期

出土遺物からは他の住居跡とほぼ同時期と考えられる。

第２号住居跡（３Ｄ１住）

調査区の北部で検出された。住宅の基礎工事によって遺構の南半は破壊されており、全容は不明である。平面形は耕作土を除去した段階でも明確に把らえる事はできなかったが、火山灰の広がりを手掛かりにその輪郭を捕らえることができた。また壁の立ち上がり位置は火山灰の広がりよりさらに外側であった。これは住居跡が埋没してからある程度時間が経過した後に火山灰の降下があったからと考えられる。

＜遺構＞（第８・９図、写真図版２・３）

平面形　隅丸方形と推定される。南側の３分の２が住宅建設の際に削られている。

規模　北辺の長さは5.4mである。

埋土　５層に細分され、十和田ａ火山灰がレンズ状に認められる。埋土上部の出土遺物としては土師器の砕片が数点認められる程度である。

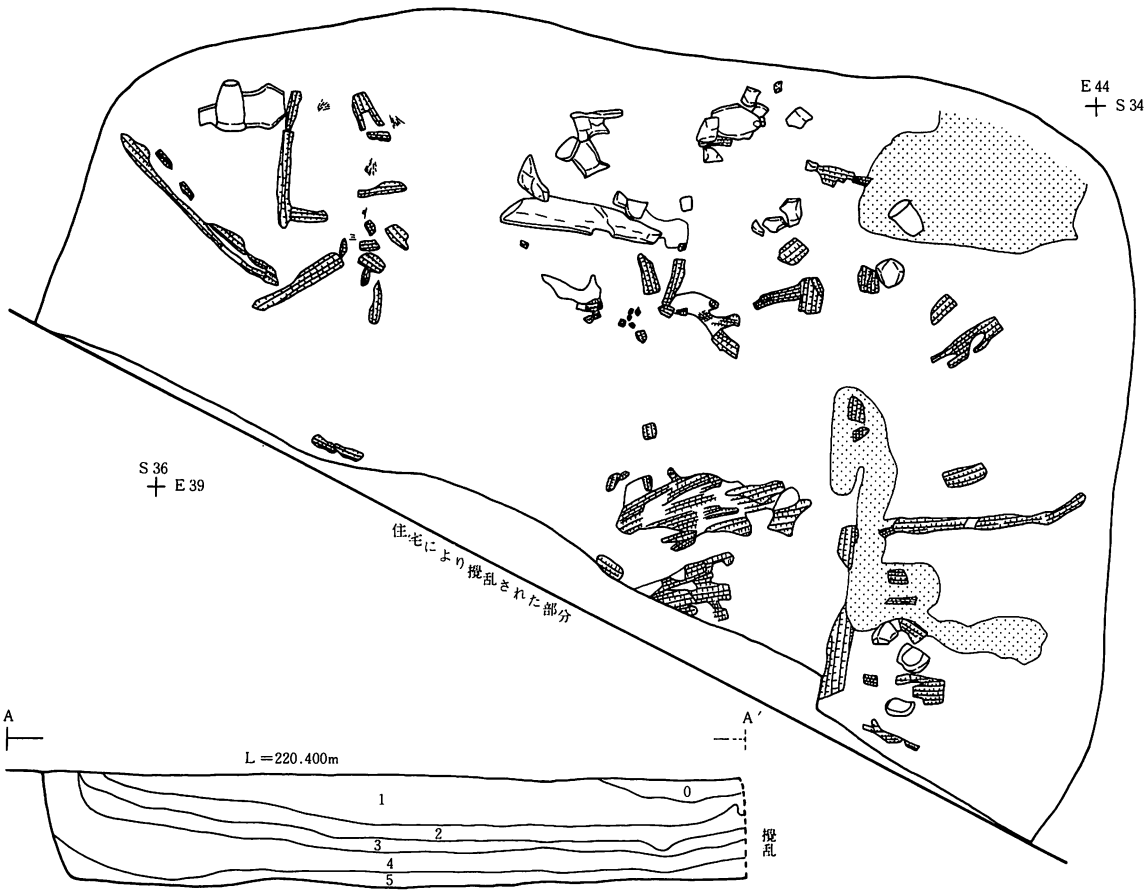
壁　中掫浮石層を掘り込んでいるが、壁として明確に識別できるのはその下層からである。壁高は40cm内外である。

床面　貼り床は認められなかった。北西隅から南東にかけて緩やかな傾斜で下がっている。また多少凹凸がある。東辺に浅い周溝様の掘り込みがある。

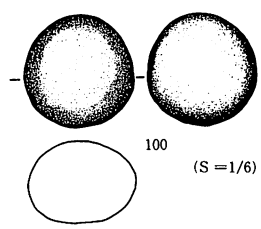
柱穴　二隅から１ｍ前後内側によった位置に存在する。掘り方を有する。東側の１個は柱材部分が空洞であった。

カマド　位置は北壁中央部、長軸方向はＮ－30°－Ｗである。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡していたと考えられる。袖の根元部分は造り出しで、他は礫等を芯にして構築されている。煙道部は掘り込み式で、緩い上り勾配である。

その他　床面に多量の炭化材や焼土が散在した焼失住居である。材は柱と思われるものが大半で、樹種はクリが多く、一部ケヤキが確認された。部分的にススキなどの草本類も認められる。焼土は北東側の床面に多く散在していた。

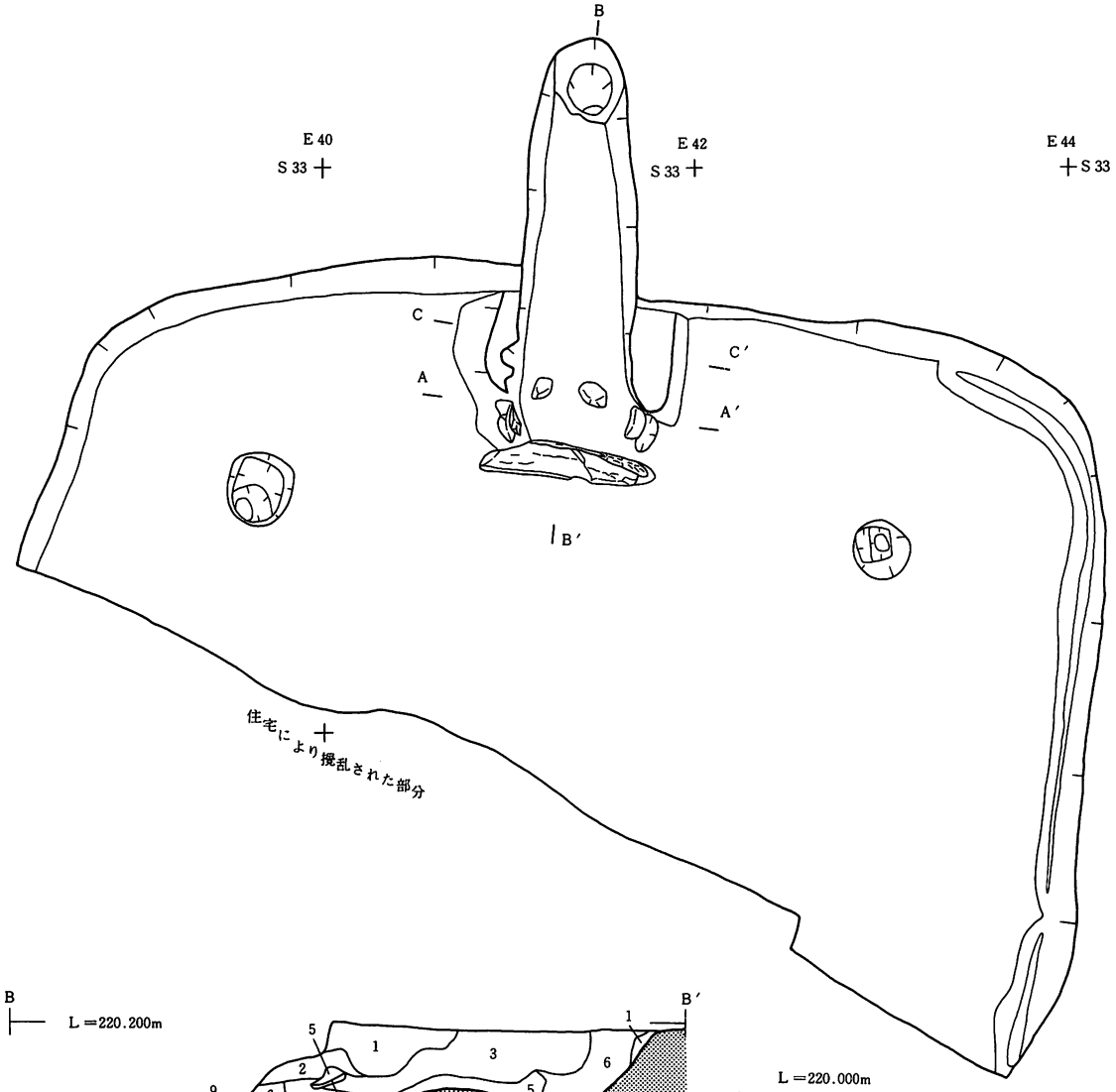


第２号住居跡・埋土断面
0層　10Y R 2/2黒褐色土　(耕作土)
1層　10Y R 2/3黒褐色土　粘性・しまり幾分あり
2層　10Y R 4/3鈍褐色砂質土　粘性・しまりなし(十和田ａ)
3層　10Y R 2/3黒褐色土　粘性・しまり幾分あり
4層　10Y R 2/1黒色土　粘性・しまりあり(微量の炭、焼土、土師片を含む)
5層　10Y R 2/1黒色土　粘性・しまりあり(多量の炭、焼土含む)



No.	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	産地	図版	写真図版	備考
100	Q 2	磨石	88	85	66	722	鄰石砂岩	北上山地古生界	8	16	

第８図　第２号住居跡・出土遺物（１）



3D1住カマド

1層	10YR 2/3黒褐色土	粘性・しまり幾分あり(微量の十和田a を含む)
2層	5YR 2/2黒褐色土	粘性・しまり幾分あり(微量の焼土、地山質土を含む)
3層	5YR 2/2黒褐色土	粘性・しまり幾分あり(微量の地山質土を含む)
4層	10YR 3/4暗褐色土	粘性・しまり幾分あり(上部ほど黒褐色土を多く混在する)
5層	10YR 3/4暗褐色土	粘性・しまり幾分あり。霜降り状である。
6層	10YR 5/6黄褐色土	粘性・しまり幾分あり。小礫を少量含む。(境界部は10R 6/8赤澄色焼土質土)
7層	10YR 4/6褐色土	粘性・しまり幾分あり(地山質土崩落)
8層	10YR 3/3暗褐色土	粘性・しまりあり。
9層	10YR 3/3暗褐色土	粘性・しまりあり。焼土を含む。
10層	10YR 4/6褐色土	粘性・しまりあり。(地山質土)
11層	10YR 2/3黒褐色土	粘性・しまり幾分あり。(石支え埋土)

第9図　第2号住居跡

＜遺物＞（第８・10・11図、写真図版16・17）

出土遺物は土師器と１個の礫石器である。

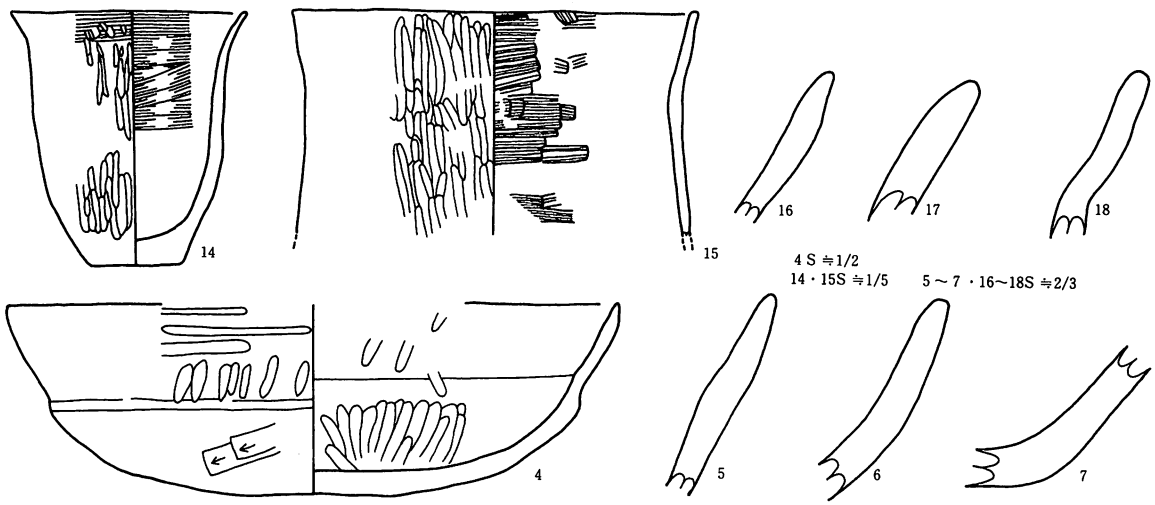
土師器

坏は１個体と器形の判別の困難な３破片である。

４は内黒有段の坏で外面に煤が付着している。内面のヘラミガキ幅は広い。５～７は小破片である。

ほぼ完形の甕は２個体、３分の２近くが残存している甕が４個体、口縁部から体部にかけての破片２個体である。その他破片が数点出土している。

８は完形出土の甕である。外面はヘラミガキが施されている。口縁部から底部にかけて煤が付着している。９の外面はヘラミガキ調整が施されている。内外に煤が付着している。10は９と同様のヘラミガキ調整が施されている。内外に煤が付着している。11は薄手で輪積み痕が認められる甕である。幾分頸部の括れが大きい。調整技法は９と同じである。12は口縁部から胴部にかけての甕の破片である。ヘラミガキ調整が施されている。13は口縁部を欠く小型の甕である。ハケメ調整が施されている。内部の底に煤が付着している。14は口縁部を一部欠くだけ

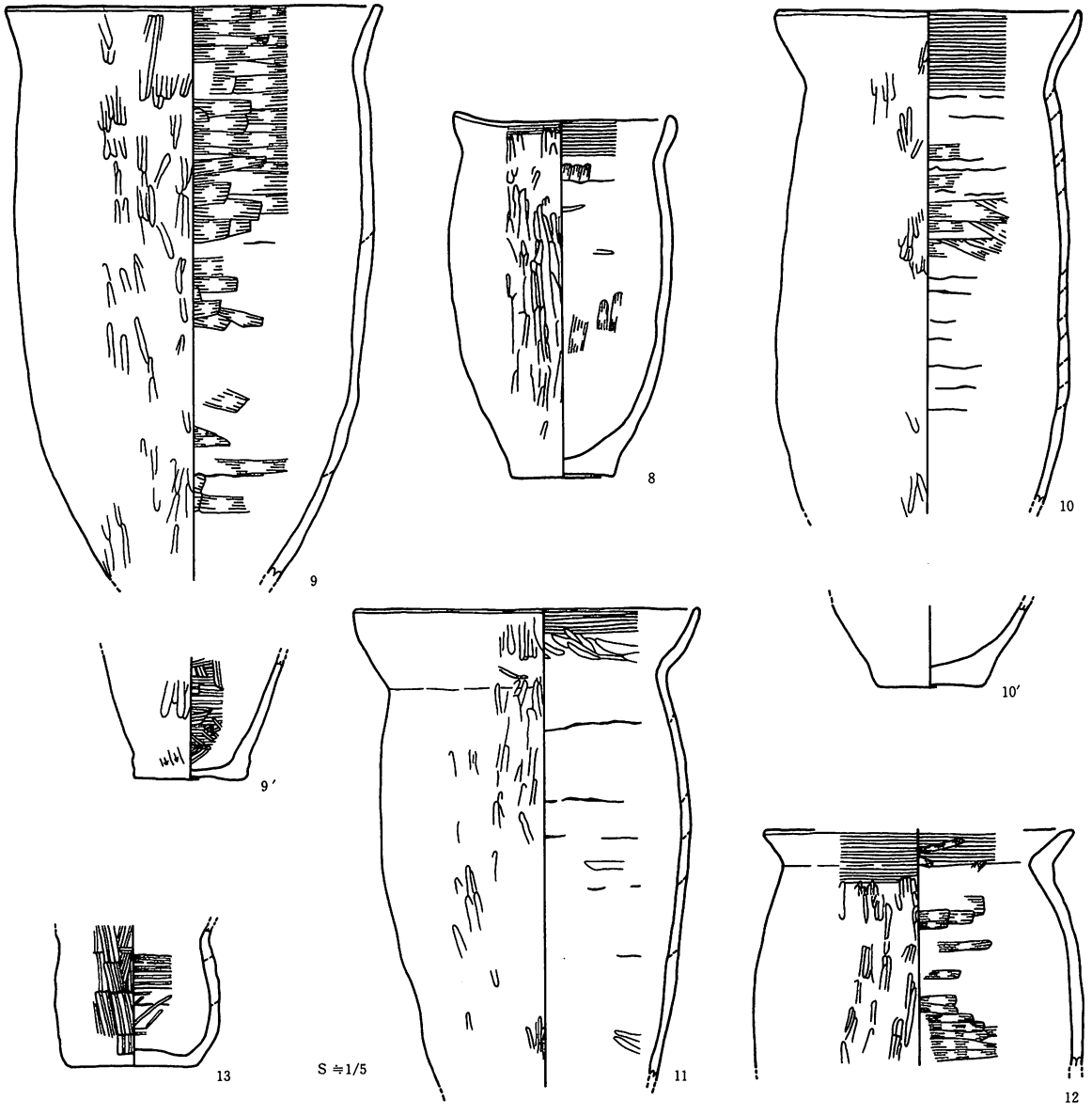


No	地点層位	種類	口縁部	胴部	底部	口一底	黒色処理	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
4	Q４床面	坏	ミガキ	ケズリ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	18.2	5.7	7.0	10	17	外面煤付着、内面ミガキ幅広い
5	Q１中位	坏	ミガキ	—	—	ナデ	—	—	—	—	10	16	緻密硬堅（類似体部片あり。）２次焼成を受ける10YR8/3浅黄橙色
6	Q１中位	坏	ミガキ	—	—	ナデ	あり	—	—	—	10	16	緻密硬堅5YR2/1黒色（類似体部片あり。）10YR7/3鈍黄橙色
7	Q１中位	坏	—	ミガキ	摩耗	ミガキ	—	—	—	—	10	16	緻密硬堅２次焼成 5YR6/2灰褐色　体底部の境不明瞭

No	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
14	Q１床面	甕	ナデ	ミガキ	摩耗	ナデ	ハケメ	撫付け	14.2	15.4	5.4	10	17	5YR6/6橙色　厚手、化粧粘土使用
15	Q１床面	甕	ミガキ	ミガキ	—	ハケメ	ハケメ	—	(24.4)	(13.4)	—	10	17	10YR7/6明黄褐色　厚手、硬堅。口縁部幅広で立つ

No	地点層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	図版	写真図版	備考
16	Q１中位	甕	口縁部	口唇部ナデ、ミガキ	ハケメ	均一ながら軟質	10	16	5YR6/6橙色
17	Q１中位	甕	口縁部	ナデ	摩耗	雲母片含む、粗	10	16	5YR7/6橙色
18	Q１中位	甕	口縁部	ナデ	ナデ	緻密硬堅	10	16	10YR8/2灰白色　外反の後内湾気味に立ち上がる。

第10図　第２号住居跡出土遺物（２）



No.	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
8	Q2床面	甕	ミガキ	ミガキ	摩耗	ナデ	ハケメ	撫付け	14.2	23.4	6.6	11	17	10YR6/3鈍黄橙色　3層検出、口一底煤付着
9	Q2床面	甕	ミガキ	ミガキ	(剝離)	ハケメ	ハケメ	撫付け	24.1	(39.0)	(7.4)	11	17	5YR5/8明赤褐色　内外煤付着、下部に輪積み痕多い
10	カマド	甕	ミガキ	ミガキ	撫で	撫で	ハケメ	摩耗	19.6	(37.0)	6.8	11	16	10YR7/3鈍黄橙色　内外煤付着、輪積み痕
11	カマド	甕	ミガキ	ミガキ	—	ミガキ	ナデ	—	22.0	(31.4)	—	11	16	5YR5/8明赤褐色　薄手、輪積み、内外煤付着
12	Q1床面	甕	ナデ	ミガキ	—	ナデ・ハケメ	ハケメ	—	(19.8)	(15.0)	—	11	17	10YR7/6明黄褐色　黒斑・二次焼成
13	Q1床面	甕	—	ハケメ	摩耗	—	ハケメ	ハケメ	—	(9.0)	(8.0)	11	17	10YR3/5鈍黄褐色　底内部に煤付着、輪積み痕あり

第11図　第2号住居跡出土遺物（3）

の甕である。ヘラミガキ調整を施している。厚手で化粧粘土を塗り重ねている。15は厚手で硬堅な幅広口縁部である。外面にヘラミガキを施している。

完形の甕はカマドを挟んで1個ずつ出土している。また、完形に近い形に復元出来た2個体の甕がカマドの埋土より出土したが、これらはカマドで使われていたものと考えられる。

残存状態の悪い2個体は、他のものと比較して胎土が硬堅で器形も異なっていることや出土状態から、別時期のものと考えられるがあまり時間差はないものであろう。

石器

出土した石器は100の1点のみである。100はあまり使い込んでいない磨石である。煤滲みが付いている。

遺構の時期

出土遺物や住居形式・埋土などから、古墳時代の中葉と考えられる。

第3号住居跡（3D2住）

調査区北半中央部で検出された。黒色系の土層中に火山灰の落ち込みが確認された。住宅の基礎部の下に北辺部がかかり、遺構の上部が浅く溝状に破壊されている。

＜遺構＞（第12・13図、写真図版4・5）

平面形　隅丸のほぼ正方形である。

規模　4.1m×4.1mで、本遺跡では大きい方の部類に入る。

埋土　十和田a火山灰がレンズ状に認められる。数個所において近世の柱跡により撹乱を受けている。

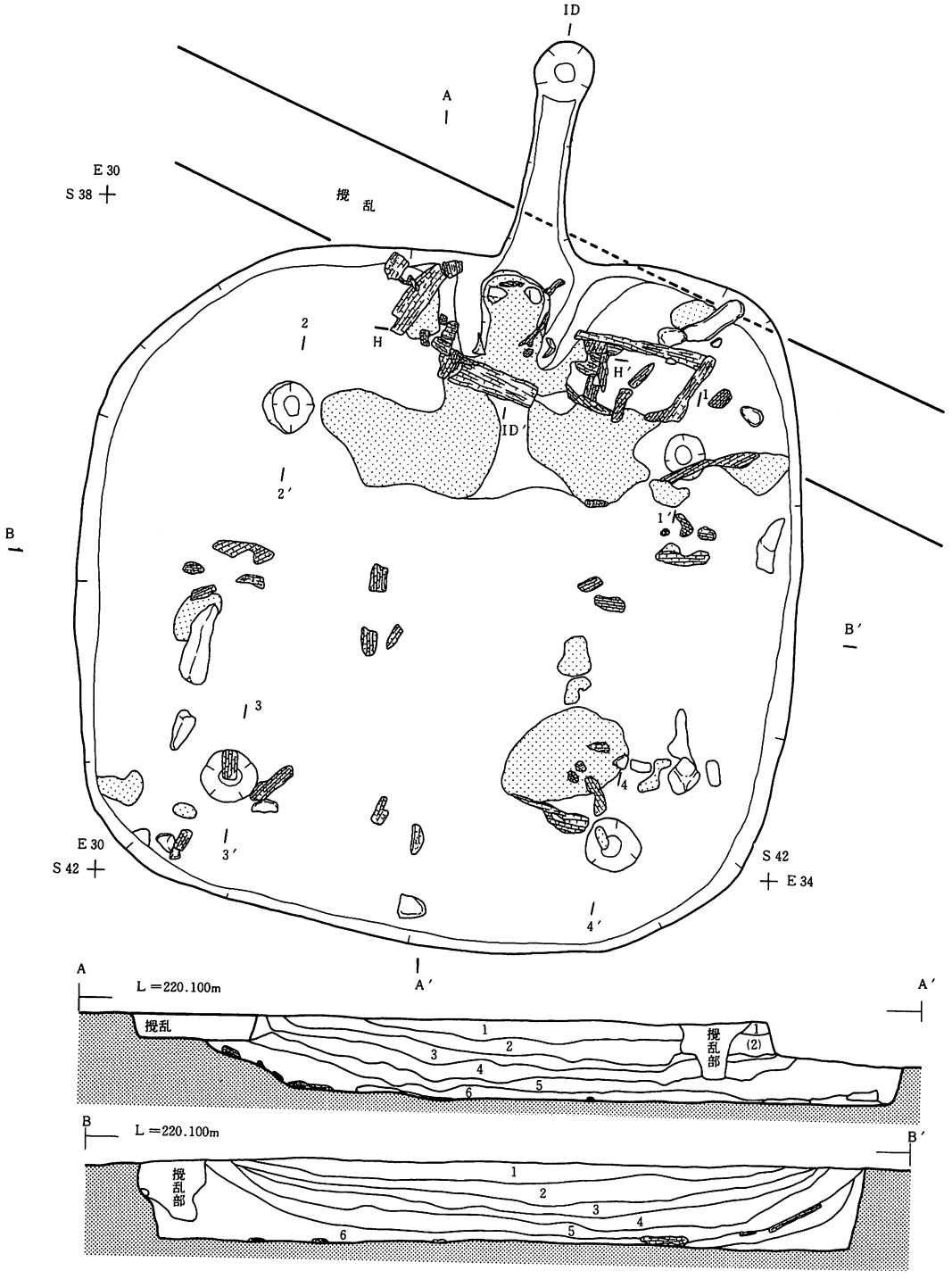
壁　第2号住居跡と同様に地層が南に傾斜する部分に構築されているので、壁は南側程脆く、細粒発泡性の浮石が含まれている。壁高は約45cmである。

床面　明確な貼り床は認められなかった。北西部から南東部にかけて多少の凹凸をもちながらゆるやかに傾斜し、南側ほど柔らかい。

柱穴　四隅で4個検出された。深さは約40cmである。

カマド　位置は北壁中央部、長軸方向はN－30°－Wである。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。袖の根元部分は造りだし、他は礫等を芯にして構築されている。煙道部は掘り込み式で、緩い上り勾配である。

その他　第2号住居跡と同様に床面に多量の炭化材や焼土が散在した焼失住居である。材は柱と思われるものが大半で、樹種としてはクリが多い。部分的に草本類も認められる。



1層．10Y R 3/2黒褐色土　柔かい、粘性あり、部分的に火山灰が散在する。炭化物を含む
2層．10Y R 5/3鈍黄褐色火山灰土　幾分かたい、粘性少い、炭含む
3層．10Y R 2/2黒褐色土　柔かい、粘性あり、火山灰が全体的にうすく混在
4層．10Y R 2/3黒褐色土　柔かい、粘性あり、浮石を含む、炭化物を含む
5層．10Y R 2/1黒色土　柔かい、粘性あり、炭化物、焼土を極少量含む
6層．10Y R 2/2黒褐色土　柔かい、粘性あり（西側断面ほど厚い）

第12図　第３号住居跡

＜遺物＞（第13図、写真図版16）

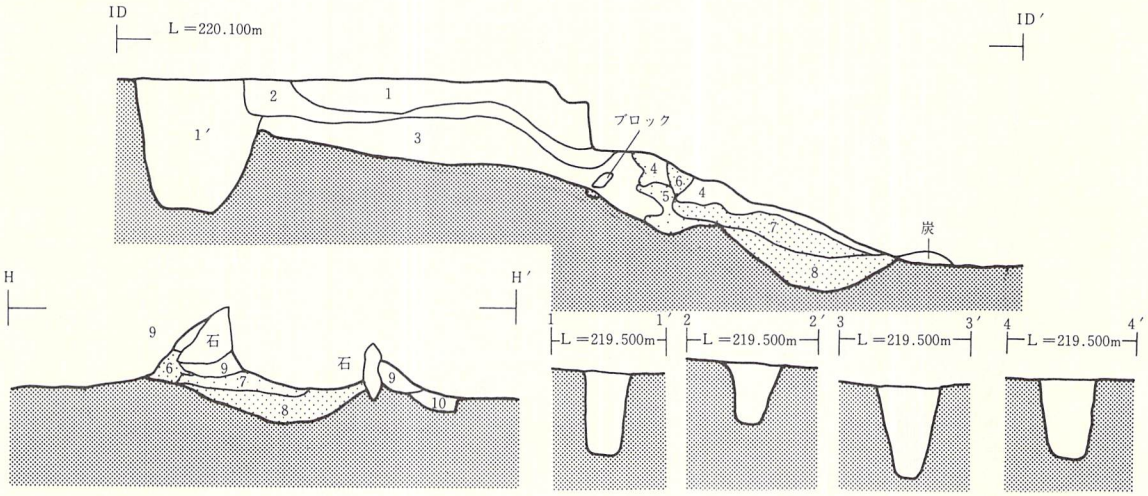
出土遺物は少なく土師器甕の十数片が出土している。

土師器

口縁部を含めた甕の十数片のうち接合して形を成したものは２点である。19は口縁部から胴部にかけての比較的小型のものである。口唇部に不明瞭な稜を持つが頸部には段を持たない。20は薄手の甕の体部片であるが、胴部の膨らみが大きい器形と思われる。

遺構の時期

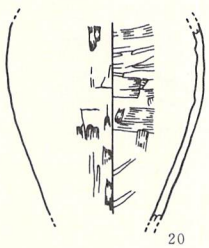
他の住居跡と同時期と考えられる。



1層　10Y R 2/3黒褐色土　ややかたい、幾分粘性あり
1′層　10Y R 2/3黒褐色土　やわらかい、粘性あり、地山質細粒ブロック焼土含む
2層　10Y R 2/2黒褐色土　やわらかい、粘性あり、焼土粒を含む
3層　10Y R 2/2黒褐色土　やわらかい、粘性あり
4層　10Y R 5/6黄褐色土　かたい、幾分粘性あり（天井部の貼付土？）
5層　10Y R 2/3黒褐色土　ややかたい、幾分粘性あり、焼土粒を多く含む
6層　5Y R 5/8明赤褐色（焼）土　ややかたい、幾分粘性あり
7層　5Y R 5/6明赤褐色（焼）土　ややかたい、幾分粘性あり
8層　5Y R 6/8橙色焼土　かたい、粘性なし、バリバリに焼けている
9層　10Y R 3/2黒褐色土　ややかたい、幾分粘性あり、焼土粒が混在している
10層　10Y R 2/2黒褐色土　ややかたい、幾分粘性あり

S ≒1/5

19



20

No	地点層位	器種	外部		内部		口径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	口縁部	胴部				
19	Q１床面	甕	ミガキ	ミガキ	ナデ	ヘラナデ	(13.8)	13	16	10YR5/3鈍黄褐色　粗砂含む、口縁部と体部の区画なし
20	Q１床面	甕	―	ヘラナデ	―	ヘラナデ	―	13	16	10YR5/6黄褐色　輪積み痕あり、壺型的器形

第13図　第３号住居跡・出土遺物

第4号住居跡（1 F住）

調査区中央部の西側国道際で検出され、遺構の西半は国道の下に延びている。第1号住居跡と同様にU字溝及び水道管工事によって上部を撹乱されている。また宅地の生垣であり、植樹と抜根による撹乱も受けている。焼失住居である。

＜**遺構**＞（第14図、写真図版6）

平面形　半欠けの状態で確認されたが、隅丸のほぼ正方形であると考えられる。

規模　3.3m四方と推定される。

埋土　上部が撹乱されており十和田a火山灰が上位に見られる。

壁　第1号住居跡と同様にIII層上面で検出されたので、残存壁高は約15cmである。

床面　貼り床は認められなかった。床面には緩い凹凸があり、皿状に窪む部分がある。

柱穴　住居跡の東半部分に2個検出された。北半部の1基は中央寄りに位置している。深さは約50cmである。

カマド　遺構の未調査の部分である国道直下の北壁中央部に構築されているものと思われる。

その他　焼失住居であり、炭化物・焼土が多量に散在していた。特に炭化物は柱材や床材等の部材と思われるものが認められた。

＜**遺物**＞（第14図、写真図版16）

出土遺物は土師器と砥石および縄文土器2片である。

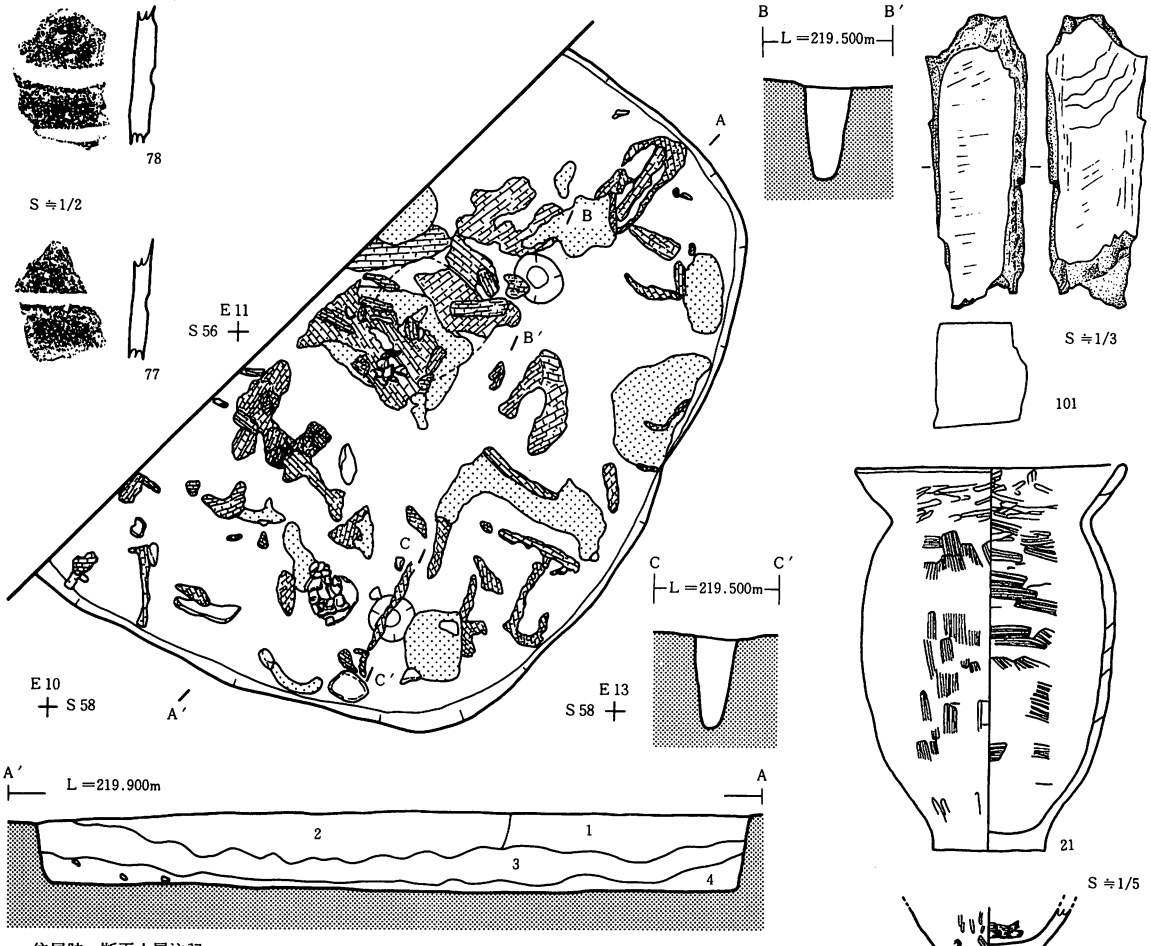
土師器

口縁部を含めた甕の数十片のうち接合により形を成したものは2点である。21は口唇部に不明瞭ではあるが稜を持ち、頸部は大きく括れているが段を持たない。口縁部外面はナデのうえを幅の狭い工具でヘラミガキを施している。22は底部から胴部下端にかけての破片である。21よりは下膨れの器形となる。底面には藁編状の敷物痕が付いている。

砥石　101の1点で、両面を使用した磨砥である。

遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



住居跡、断面土層注記
1層　10Y R 2/3黒褐色土　撹乱層、十和田 a は見られず、炭化物、土器を少量含む
2層　10Y R 2/3黒褐色土　やわらかい、粘性幾分あり、上部に十和田 a 火山灰を含む、炭化物、土器を少量含む
3層　10Y R 2/2黒褐色土　やわらかい、粘性幾分あり、炭化物、土器を少量含む
4層　10Y R 2/2黒褐色土　やわらかい、粘性幾分あり、炭化物、土器を少量含む(部分的には土器を多量に含む)

No	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
21	床面(No 1)	甕	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ	ハケメ	ナデ	18.1	25.9	7.5	14	16	10YR6/4鈍黄橙色　幅広のハケを用いている
22	床面(No 2)	甕	―	―	ナデ	―	―	撫付け	―	―	4	14	16	7.5YR6/6橙色　外底面敷物痕、下膨れの器形

No	地点層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	図版	写真図版
77	Q 1中位	鉢	体部	沈線区画、磨き、薄手	ナデ	浮石含む	14	23
78	Q 1中位	鉢	体部	沈線区画、磨き	ナデ	雲母含む	14	23

No	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	産地	図版	写真図版
101	第4号住居床面	砥石	116	39	37	310	珪質凝灰岩	北上山地古生界	14	16

第14図　第4号住居跡・出土遺物

第5号住居跡（3Ｆ1住）

調査区中央の南半部に、十和田ａ火山灰の分布によって検出された。畑地に位置していたため、遺存状況は比較的良好である。

＜**遺構**＞（第15図、写真図版７）

平面形　隅丸の正方形である。

規模　　2.9m×2.9mで本遺跡では小型の部類に入る。

埋土　　十和田ａ火山灰がレンズ状に堆積している。床面及び壁との境界が不明瞭である。

壁　　Ⅲ層の窪んだ部分に構築されているので、壁は脆弱である。深さは約40cmである。

床面　　壁同様軟弱な地盤を用いている。掘り込み土と混在させた貼り床が部分的に認められる。周溝は認められなかった。

柱穴　　床面の性状によるのか柱穴は検出できなかった。このくらいの規模の場合、外部に設置される場合もあるので住居の周囲も検出作業を行ったが、検出はできなかった。

カマド　北壁中央部に位置している。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。袖部の下半部は造りだしで上半部は礫等を芯にして構築されている。煙道部は掘り込み式で、緩い上り勾配である。支脚として石が２個並んで設置されている。

その他　第２号住居跡と同様に床面に炭化材や焼土が散在した住居である。材は柱と思われるものが残存している。

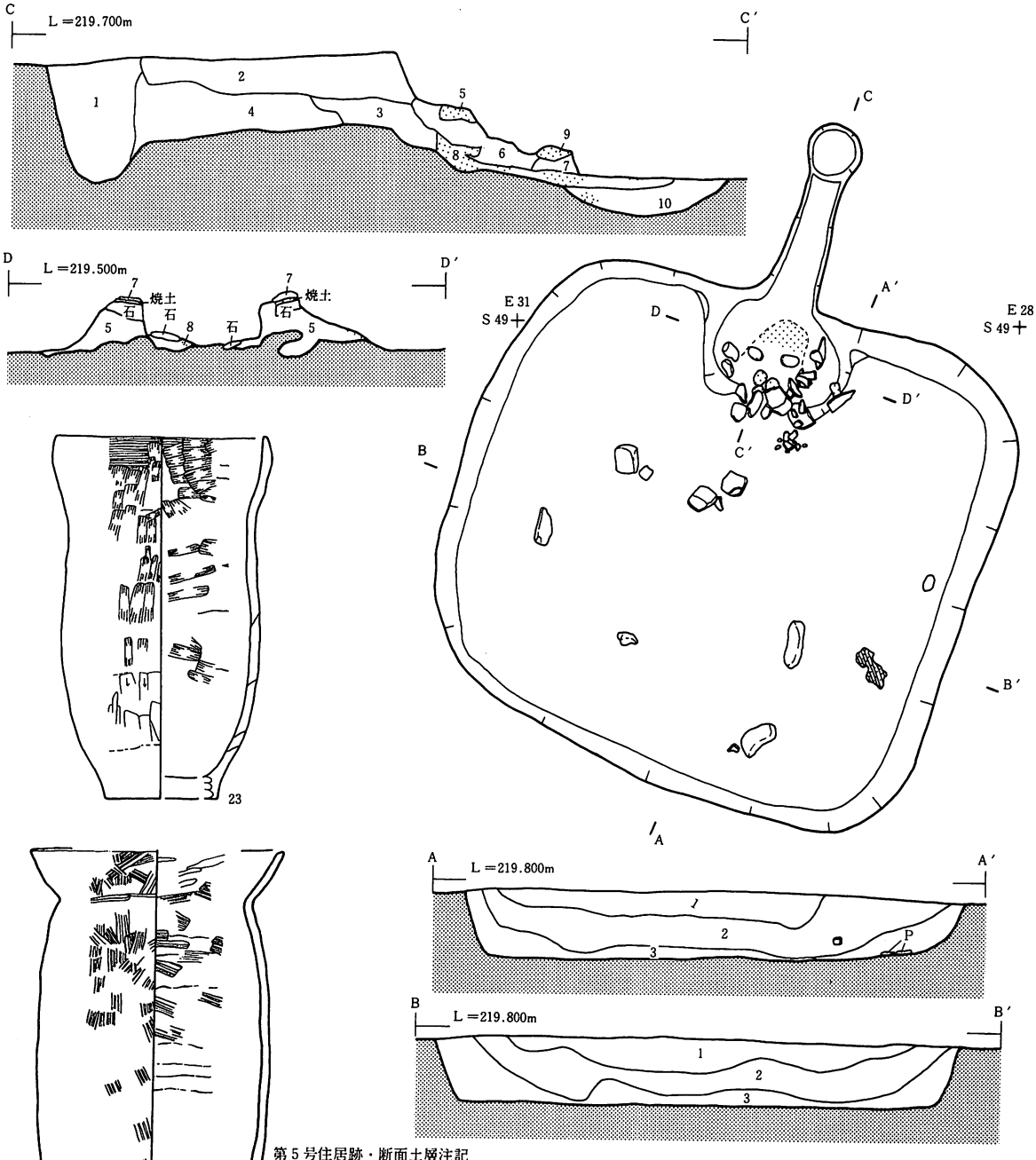
＜**遺物**＞（第15図、写真図版16～18）

出土遺物は土師器の甕３点である。

23は頸部の括れが小さい土師器の甕である。調整は口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、下部はヘラケズリである。底は小部分が残存している。輪積痕がある。24は土師器の甕で全面的にハケメ調整されている。比較的大きな器形である。頸部に段はないが、大きく括れている。底部はないが、次の25と接合すると思われる。25は土師器の甕底部の破片である。外面に煤が付着し、砂底様に器面がざらついている。

遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



第５号住居跡・断面土層注記

１層	10Y R 3/1黒褐色土	指頭痕つく、粘性幾分あり、火山灰を多く含む
２層	10Y R 2/1黒色土	やわらかい、粘性幾分あり、炭化物、土器片を含む
３層	10Y R 2/2黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり、炭化物、土器片を含む

第５号住カマド断面注記

１層	10Y R 2/2黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり、焼土粒が混在
２層	10Y R 2/3黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり、焼土粒が混在
３層	10Y R 3/2黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり、焼土粒が混在(地山質)
４層	10Y R 2/2黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり、焼土粒が混在(ほぼ１層と同質)
５層	10Y R 2/2黒褐色土	ややかたい、粘性幾分あり焼土粒と多量の貼付土粒が混在
６層	10Y R 2/2黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり
７層	10Y R 5/4黄褐色土	ややかたい、粘性幾分あり(貼付土)
８層	10Y R 2/2黒褐色土	ややかたい、粘性幾分あり、焼土粒が多量に混在する部分や焼土になっている部分あり
９層	５Y R 4/8赤褐色焼土	かたい、粘性幾分あり、
10層	10Y R 2/2黒褐色土	ややかたい、粘性幾分あり、地山質土が混在

第15図　第５号住居跡・出土遺物

No	地点層位	器種	外部			内部		
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部
23	床面(No 2)	甕	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ナデ	ナデ	—
24	床面(No 1)	甕	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	—
25	埋土上位	甕	—	ミガキ	ナデ	—	—	ナデ

No	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
23	15.8	27.6	(8.2)	15	16	10YR7/3鈍黄橙色　頸部の括無し、輪積み痕あり
24	18.9	—	—	15	18	2.5Y8/3淡黄色　口縁部内湾、ハケメで文様？
25	—	—	5.7	15	18	7.5YR6/3鈍褐色　外面に煤付着

第6号住居跡（3 F 2住）

調査区中央の南半部に火山灰の隅丸方形状の分布により検出された。果樹根によって部分的に撹乱されている。

＜遺構＞（第16・17図、写真図版8）

平面形　隅丸の正方形である。

規模　3.7m×2.9mで、本遺跡では中型の部類に入る。

埋土　第6号住居跡と同様に十和田a火山灰がレンズ状に堆積している。部分的に火山灰が窪んで分布するところがある。

壁　北東方向に地山が傾斜しており、この方向の壁は脆弱である。深さは約50cmである。

床面　第6号住居跡ほど地盤は軟弱でないが、地山と埋土との境界は明確でない。

柱穴　壁際から約1m離れて4個設けられている。北壁からの距離は他の壁より大きい。深さは約45cmである。

カマド　前号住居跡と同様に北壁中央部に位置している。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。構築に用いられたと思われる石材が床面中央寄りに散乱していた。袖の根元部分は造りだしで、他は礫等を芯にして構築されている。煙道部は掘り込み式で、緩い上り勾配である。

その他　他の住居跡と同様に焼失住居で、床面に焼土や炭化材が散乱していた。特に住居跡の南半部に多い。

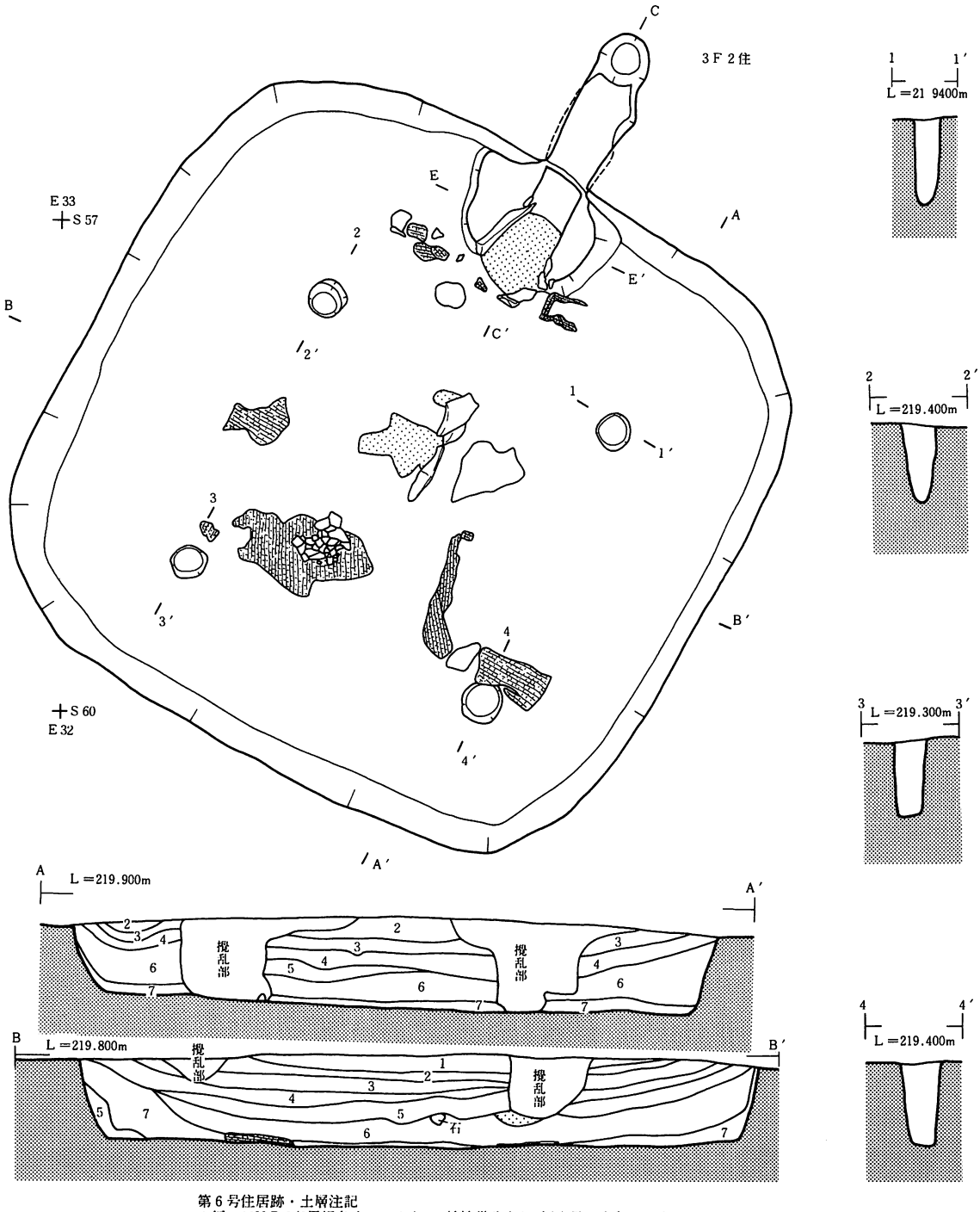
＜遺物＞（第17図、写真図版18）

出土遺物は土師器の甕4点と破片十数点である。

26は甕で内湾ぎみの口縁部と段のない頸部をもつ個体である。外面上半部はナデ及びヘラミガキ調整が施され、下半部はヘラケズリ調整されている。内面はハケメ調整されている。27は甕の内湾ぎみ口縁部で、ヨコナデの後頸部に懸けてヘラミガキ調整をもつ。内面はハケメ調整である。雲母を多く含む。28は甕の胴部で外面はハケメ、内面はナデ調整である。煤が付着している。粗雑な作りで、胎土に雲母を含む。29も甕の胴部で、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。頸部に沈線様調整痕がある。

遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



第6号住居跡・土層注記

1層	10Y R 2/2黒褐色土	かたい、粘性幾分あり、極少量の十和田a含む
2層	10Y R 2/3黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり
3層	10Y R 5/3鈍黄褐色土	幾分かたい、粘性幾分あり、十和田a火山灰土
4層	10Y R 3/2黒褐色土	やわらかい、粘性あり、極少量の十和田aが混在する
5層	10Y R 3/4暗褐色土	指頭痕つく、粘性幾分あり、北側断面はこの層が明瞭でない
6層	10Y R 2/1黒色土	やわらかい、粘性あり
7層	10Y R 2/2黒褐色土	やわらかい、粘性あり、炭化物を含む

第16図　第6号住居跡

第７号住居跡（２Ｇ１住）

調査区南西部に所在した土蔵の基礎部で検出された。住居跡の西側約３分の２は調査区域外となる。

＜**遺構**＞（第18図、写真図版９）

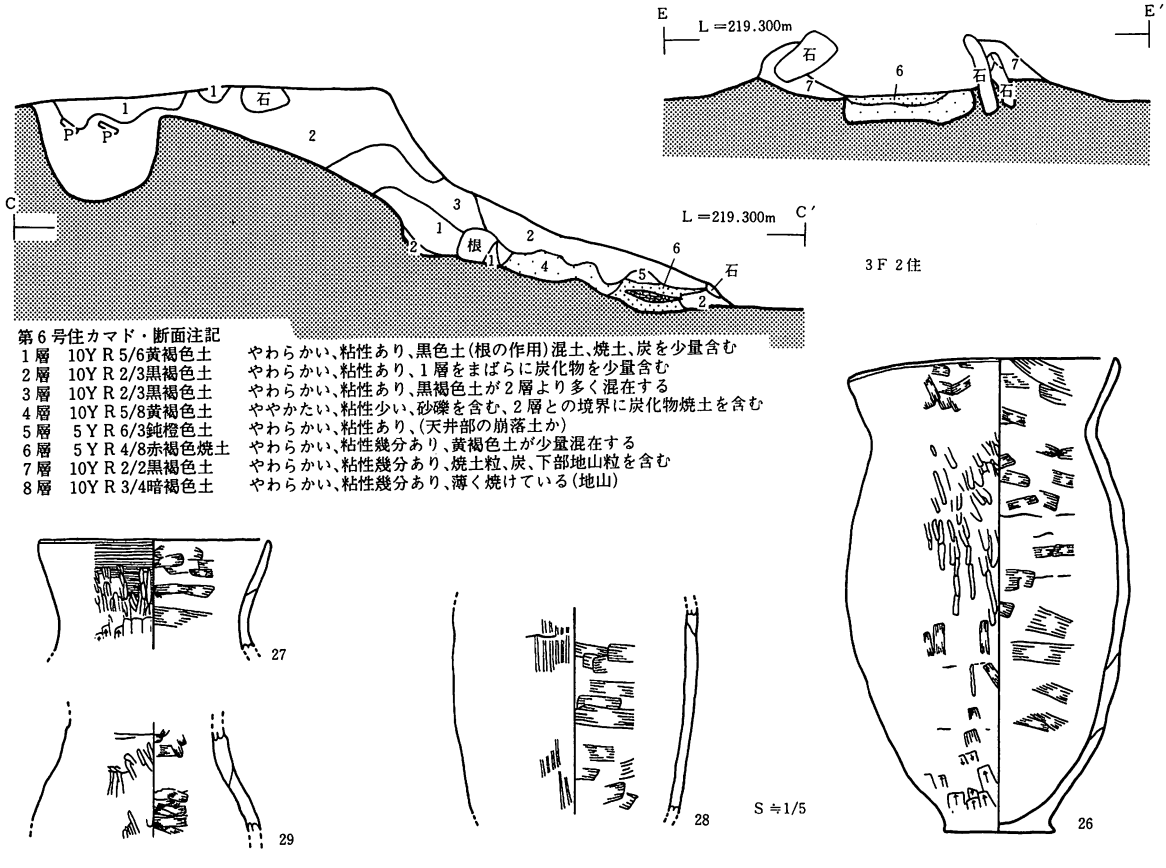
平面形　隅丸の正方形と考えられる。

規模　　3.7m×（3.7m）と考えられ、本遺跡では中型の部類に入る。

埋土　　十和田ａ火山灰は認められなかった。撹乱も受けている。

壁　　他の住居跡同様に中掘浮石層を掘り込んでいるので比較的明確な立ち上がりをもつ。深さは約30cmである。

床面　　貼り床は検出されなかった。



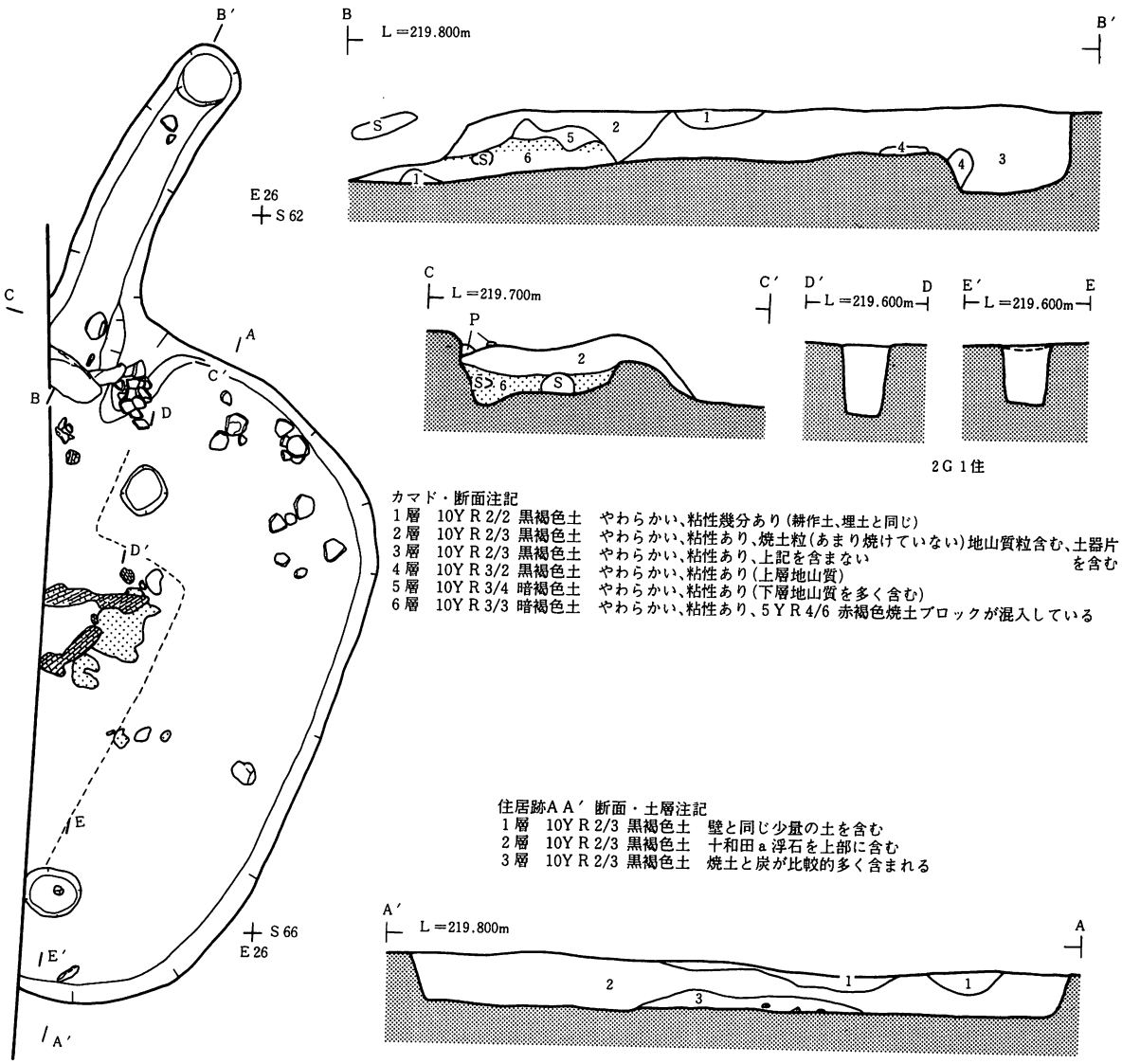
No	地点層位	器種	外部 口縁部	外部 胴部	外部 底部	内部 口縁部	内部 胴部	内部 底部	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
26	Ｑ３上位	甕	ナデ	ミガキ	ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	18.1	31.6	7.1	17	18	10YR6/4鈍黄橙色　胴外部に磨き様処理、内湾ぎみ
27	Ｑ４	甕	ナデ	ミガキ・ケズリ	—	ナデ	—	—	15.5	—	—	17	18	10YR6/4鈍黄橙色　内湾ぎみ、雲母を多く含む
28	埋土	甕	—	ハケメ	—	—	ナデ	—	—	—	—	17	18	7.5YR6/4鈍黄橙色　煤付着、粗雑な作り、雲母を含む
29	Ｑ３上部	甕	—	ミガキ	—	—	ナデ	—	—	—	—	17	18	10YR6/6明黄褐色　頸部に沈線様調整痕

第17図　第６号住居跡・出土遺物

柱穴　住居の東側に２個検出された。深さは約40cmである。

カマド　北壁に位置しているが、一部分が調査区域外に続くので全容は不明である。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。袖の根元部分は造りだしで、他は礫等を芯にして構築されている。支脚として石が２個並んで設置されている。煙道部は本遺跡では比較的長い掘り込み式で緩い上り勾配である。

その他　この住居跡も焼失住居で床面に炭化材や焼土が散在している。



第18図　第７号住居跡

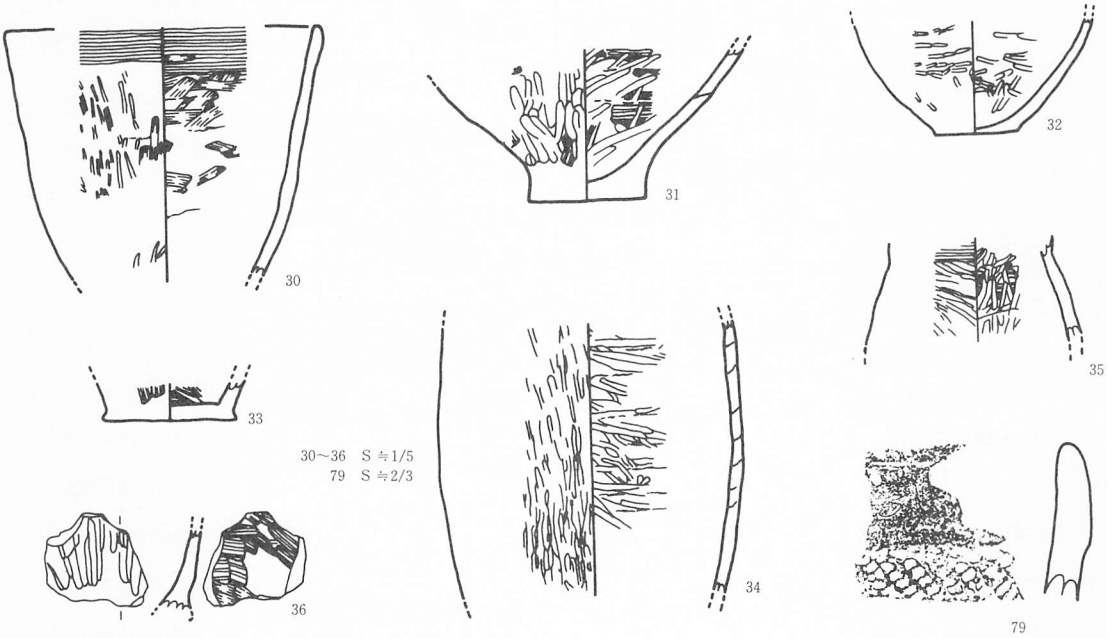
＜遺物＞（第19図、写真図版18）

出土遺物は土師器の甕７点と破片数十点である。その他として縄文土器１片が出土している。

30は頸部の括れがない鉢様の器形である。内面の調整は幾分粗雑である。31は甕の底・胴部で、調整は外面はヘラミガキ、内面はハケメと部分的なヘラミガキが施されている。下膨れの器形である。32は壺的器形の底・胴部で内外面ヘラミガキの薄手なものである。33は焼成良好な甕の底部である。34・35は同一個体の可能性をもつ破片で、内外面ヘラミガキを施され、口縁部は幅が狭く、胎土・焼成とも良好である。36は甕で、外面はヘラミガキ調整で内面はハケメである。幾分摩耗している。

遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



No.	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
30	Q１床面	甕	ナデ	ミガキ等	—	ナデ	—	—	(9.0)	—	—	19	18	7.5YR6/3鈍褐色　浅鉢様、輪積み痕、砂礫含む
31	Q４床面	甕	—	—	ミガキ	—	—	ハケメ	—	—	7.0	19	18	10YR6/4鈍黄橙色　輪積み痕あり、胴膨れ
32	Q１床面	甕	—	ミガキ	ミガキ	—	ミガキ	ミガキ	—	—	4.9	19	18	10YR7/3鈍黄橙色　薄手、小壺的、雲母・角閃石を含む
33	煙出し	甕	—	—	ハケメ	—	—	ハケメ	—	—	4.0	19	18	7.5YR6/5鈍橙色　粗砂含む、焼成良好
34	Q１床面	甕	—	ミガキ	—	—	ハケメ	—	—	—	—	19	18	10YR7/4鈍黄橙色　刷毛目を潰すために磨き、焼成良好
35	Q１床面	甕	—	ミガキ	—	—	ミガキ	—	—	—	—	19	18	5YR6/6橙色　No34と類似
36	Q１床面	甕	—	ミガキ	—	—	ハケメ	—	—	—	—	19	18	10YR6/4鈍黄橙色　摩耗片、胎土中に繊維をふくむ

No.	地点層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	図版	写真図版	備考
79	Q４床面	深鉢	口縁部	折返し部直下から縄文(LR)	ナデ	細礫含む	19	23	

第19図　第７号住居跡出土遺物

第8号住居跡（2Ｇ2住）

調査区南半部に所在した宅地の庭部分で検出された。

＜**遺構**＞（第20図、写真図版10）

平面形　隅丸の方形である。

規模　　3.9m×3.8mの大きさで、本遺跡では中型の部類に入る。

埋土　　十和田ａ火山灰は認められなかった。撹乱も受けている。

壁　　上部及び東壁は撹乱を受けている。撹乱部分を除けば壁土と埋土との区別は容易である。深さは約15cmである。

床面　　壁際から約１ｍの範囲は柔らかく、その内側はいくぶん堅い。周溝などは認められない。

柱穴　　四隅に４個認められた。比較的細く、深さは平均約50cmである。

カマド　北壁中央部に位置している。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。袖の根元部分は造りだしで、他は礫等を芯にして構築されている。右袖の外側に土器が押し潰された形で多く出土している。カマド内部にも数個体の土器が出土している。

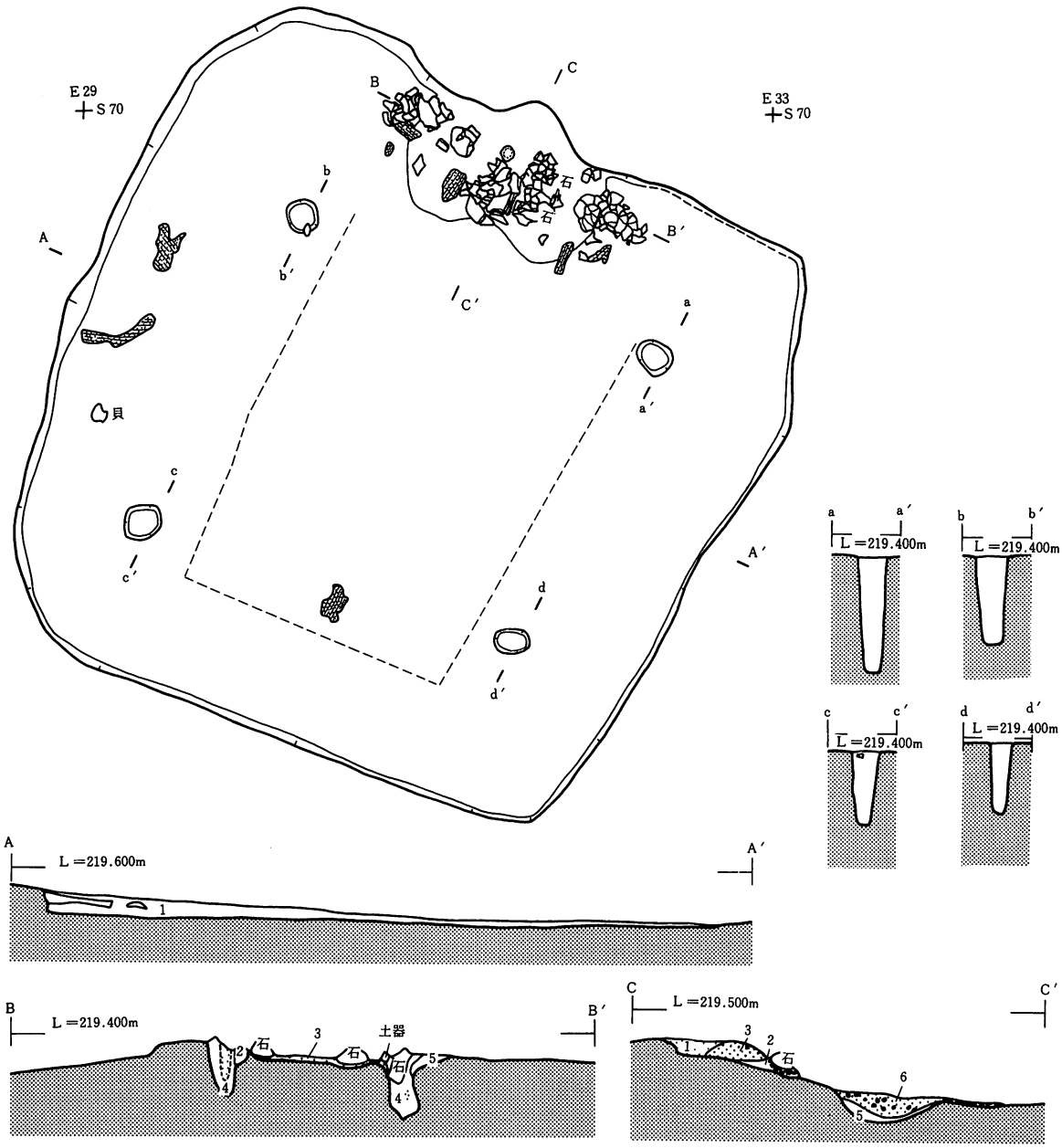
その他　カマドの煙道・煙出し部は削平されて確認できなかった。

＜**遺物**＞（第21・22図、写真図版19・20・22・24）

出土遺物は土師器の坏７点・甕６点と破片数十点、刀子・砥石それぞれ１点である。

土師器

37は厚手の坏で体部外面から底部にかけてヘラケズリ痕が残存しているが、内外面ともヘラミガキ調整の内黒処理のものである。38は内湾気味の丸底坏で内外ヘラミガキの内黒処理が施してある。39は直口気味の丸底坏で内外ヘラミガキ調整で内黒処理がしてある。40は深皿様の丸底坏で外部に沈線が半周し、粗雑な内黒処理がしてある。41は平底坏で内外上部から中部にかけて横位のヘラミガキが施されている。部分的にハケメが残存している。底・体部境界は不明瞭である。42は直口気味の平底坏で、調整が粗雑で内外中位のみにヘラミガキ調整を施してある。43は平底坏で口縁が多少外傾気味である。比較的薄手のもので、内面調整は粗雑である。44はほぼ完形に復元できた甕で、頸部に段がなく、胴部外面にヘラミガキ調整を施している。底部は外方に挽き出されている。木葉底である。45は造りが粗雑な甕で、頸部に段はなく調整はナデとハケメである。底部は外方に挽き出されている。46は小型で焼成良好な甕である。頸部の括れは少なく、胴部外面にヘラミガキ調整が施してある。口縁内部は調整が雑である。底部に敷物痕がある。47は小型で底部を欠く甕である。頸部に微小な段を持つ。調整は粗雑である。48は口縁部から胴部にかけての甕である。口縁部の幅の割りには細長い器形である。ヘラ

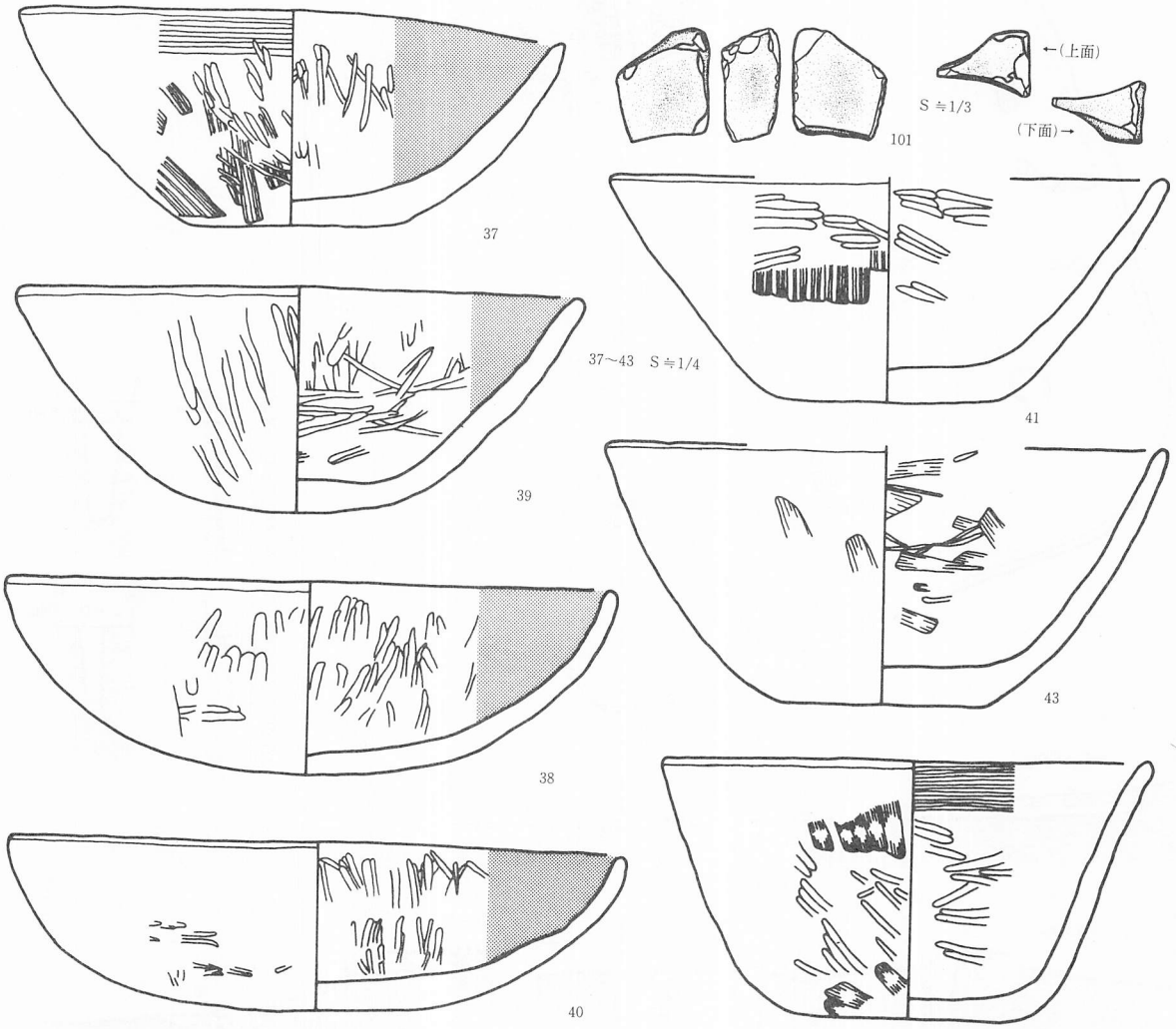


第８号住居跡・土層断面（A-A′）
１層　10Y R 2/2 黒褐色土　かたい、粘性幾分あり、焼土粒、炭、土器片を含む

第８号住居跡・カマド断面注記
１層　10Y R 4/4 褐色土　かたい、粘性幾分あり、焼土粒、小石、炭を含む
２層　10Y R 2/2 黒褐色土　ややかたい、粘性幾分あり、部分的に焼けている
３層　5Y R 4/6 赤褐色焼土　かたい、粘性幾分あり
４層　10Y R 4/3 鈍黄褐色土　かたい、粘性幾分あり、部分的に焼けている
５層　10Y R 5/3 鈍黄褐色土　ややかたい、粘性幾分あり（撹乱土）
６層　5Y R 4/8 赤褐色焼土　かたい、粘性幾分あり、炭を多く含む

第20図　第８号住居跡

ミガキ調整は頸部に僅か認められる程度である。49は甕の口縁部片で、滑らかな括れを持つ。胴部に最大径を持つと考えられる。



No	地点層位	種類	口縁部	胴　部	底　部	口 一 底	黒色処理	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備　　考
37	Q 1カマド	坏	ナデ	ミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	16.2	6.4	6.3	21	19	厚手、刷毛目残存、内面中位に微小な段
38	Q 1カマド	坏	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラミガキ	あり	18.1	5.7	丸底	21	19	直口気味
39	Q 1カマド	坏	ミガキ	ミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	17.0	6.7	丸底	21	19	削り的磨き
40	Q 1カマド	坏	ナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラミガキ	あり	18.3	5.1	丸底	21	19	外部に沈線が半周、調整粗雑
41	Q1・2埋土	坏	ミガキ	ハケメ	ケズリ	ヘラミガキ	なし	16.6	6.7	6	21	19	底体部境界不明瞭
42	Q 1カマド	坏	ナデ	ミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	なし	14.5	7.8	6.6	21	19	直口気味、調整粗雑、厚手
43	Q1・2埋土	坏	ナデ	ナデ	ケズリ	ナデ	なし	(16.6)	7.6	6	21	19	口縁外傾、薄手、内面調整粗雑

No	出 上 地 点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石　質	産　地	図版	写真図版	備　　考
102	第８号住居床面	砥石	66	54	33	88	砂質泥岩	北上山地中生界	21	22	

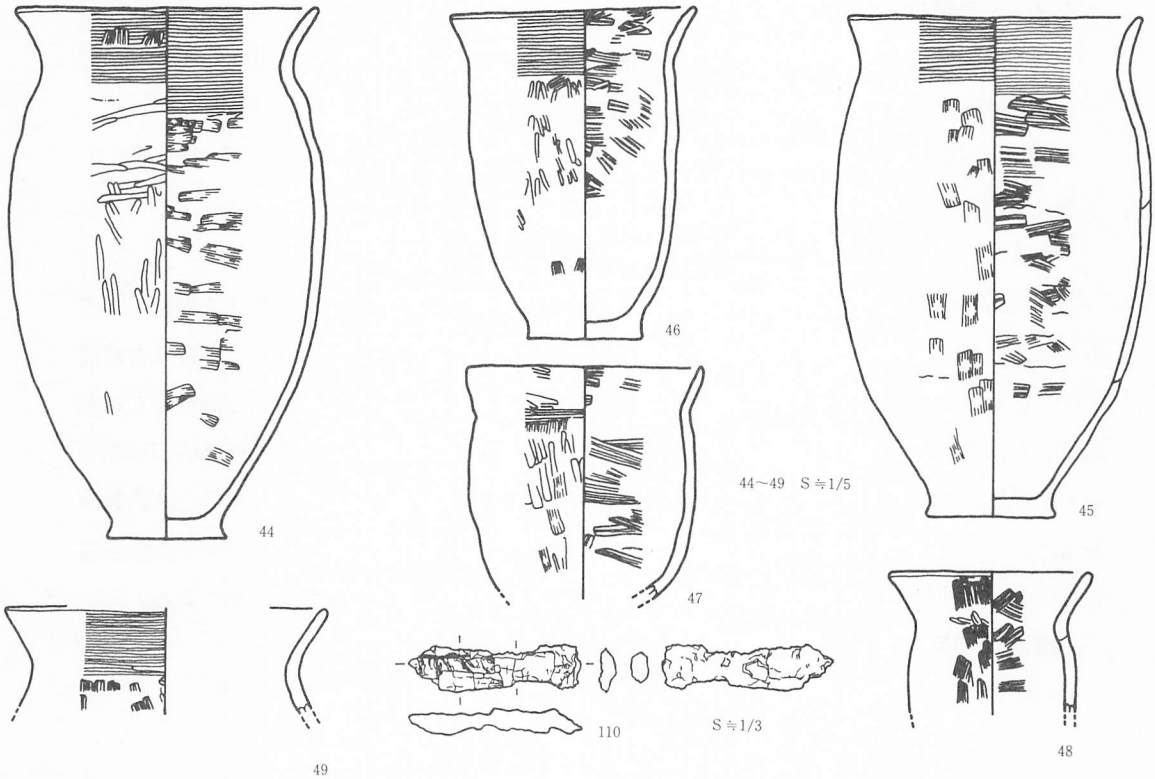
第21図　第８号住居跡出土遺物（１）

その他の遺物

110は刀子の柄と刀身の一部である。中茎に糸を巻き付け柄に差し込んでいる。柄が炭化して残存している。102は全面を使用した砥石である。よく使い込んでいる。109は現世種のホタテ貝である。この住居跡は撹乱を受けているので現代のごみが紛れ込んだ可能性もあるが、他の遺跡での出土例もあるのでこの部分で触れておく。

遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



No	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
44	カマド	甕	ナデ	ミガキ	木葉底	ナデ	ナデ	ナデ	18.0	31.3	7.1	22	19	10YR6/4鈍黄橙色　調整は粗雑、胴下部括れ
45	カマド	甕	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケメ	ナデ	17.4	29.7	7.5	22	20	10YR7/4鈍黄橙色　調整・成形粗雑、内面に煤付着
46	カマド	甕	ナデ	ミガキ	ナデ	ハケメ	ハケメ	ナデ	14.5	19.5	6.6	22	20	10YR7/3鈍黄橙色　調整粗雑、底部に敷物痕（植物）
47	Q１・２埋土	甕	ナデ	ハケメ	—	ハケメ	ハケメ	—	14.0	—	—	22	20	10YR6/3鈍昔橙色　輪積痕、調整粗雑
48	Q４埋土下部	甕	ナデ	ハケメ	—	ハケメ	ハケメ	—	(12.0)	—	—	22	20	10YR7/3鈍黄橙色　調整粗雑、輪積痕あり
49	Q１・２埋土	甕	ナデ	ハケメ	—	摩耗	摩耗	—	(19.1)	—	—	22	20	7.5YR5/4鈍褐色　胴部に最大径あり

No	出土地点	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	図版	写真図版	備考
110	第８号住居床面	刀子	66	18	8	13.9	鉄及び炭化物	22	19	錆び縮付き法量

第22図　第８号住居跡出土遺物（２）

第9号住居跡（3G住）

調査区南半部の畑に十和田a火山灰の広がりで検出された。

＜遺構＞（第23図、写真図版11）

平面形　隅丸の方形である。

規模　3.0m×3.0mの小規模な住居である。

埋土　十和田a火山灰がレンズ状に堆積している。

壁　比較的上面で検出されたので、上部は軟弱である。深さは約40cmである。

床面　軟質な土を掘り込んで床面としている。

柱穴　住居跡内には検出されなかった。

カマド　住居跡内には検出されなかった。

その他　住居跡中心部に小規模な現地性焼土が認められた。遺物は北壁寄りの中央部に坏の破片がまとまって出土している。

＜遺物＞（第24図、写真図版20）

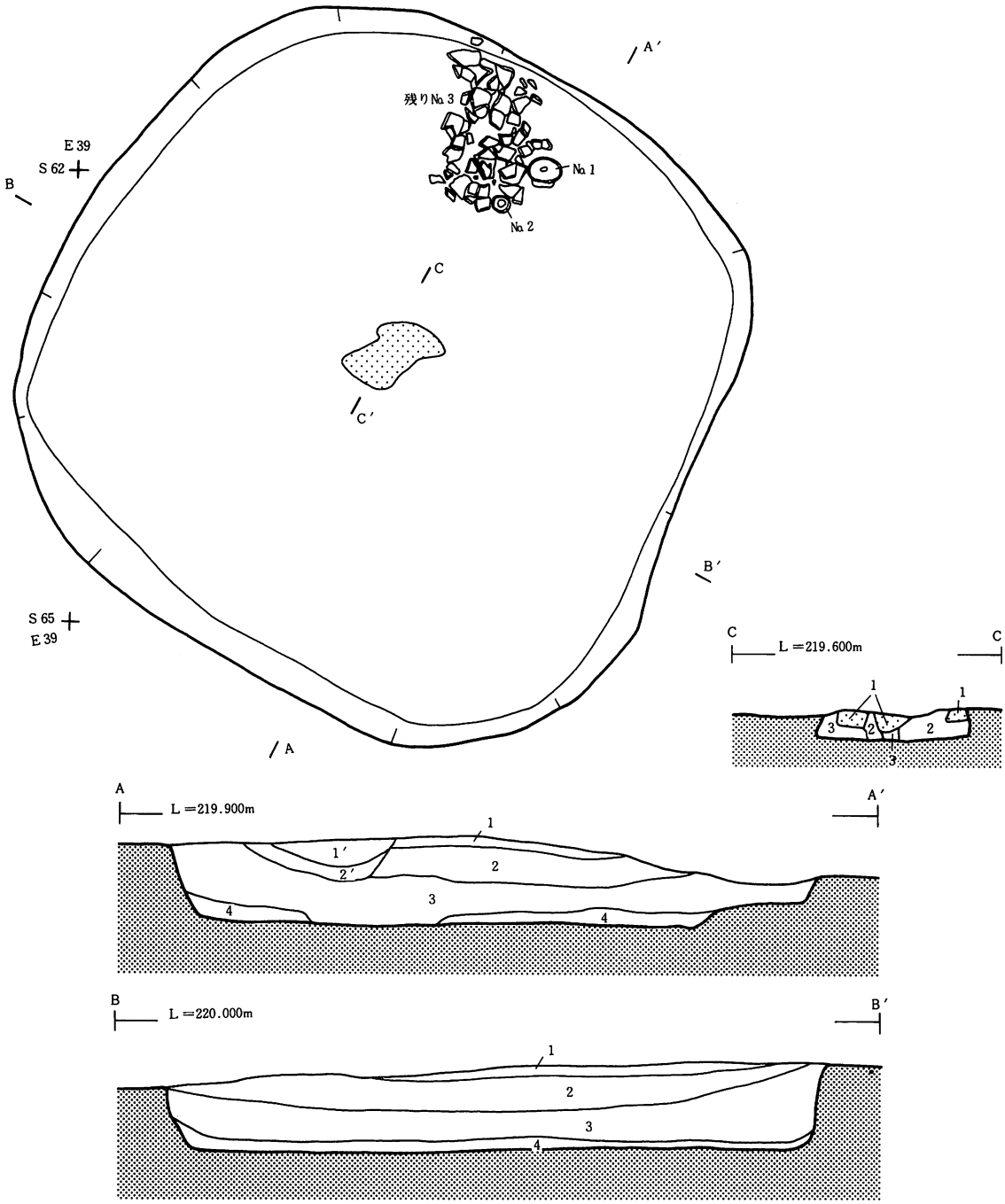
出土遺物は土師器の坏4点・甕3点と破片数十点である。

土師器

50は丸底の坏で微小な段をもち体部に立ち上がっている。外面はナデとハケメで調整し、滑らかにしている。内面に微小な段が認められる。底部は粗雑な調整である。51は小振りな器形で坏に区分しておく。ヘラミガキ様のナデで外面調整し内黒処理してある。52は接点のない各部位より法量を推定した坏である。内黒処理してある。53は厚手で内湾気味の浅鉢的口縁部である。内外ともナデとヘラミガキである。54は細長な器形の甕である。内外ともハケメ調整が多用されている。55は厚手で鉢的な器形のものである。ハケメと口縁部にヘラミガキ調整を施している。煤が付着している。56は厚手の甕の胴部破片である。外部調整は粗雑である。

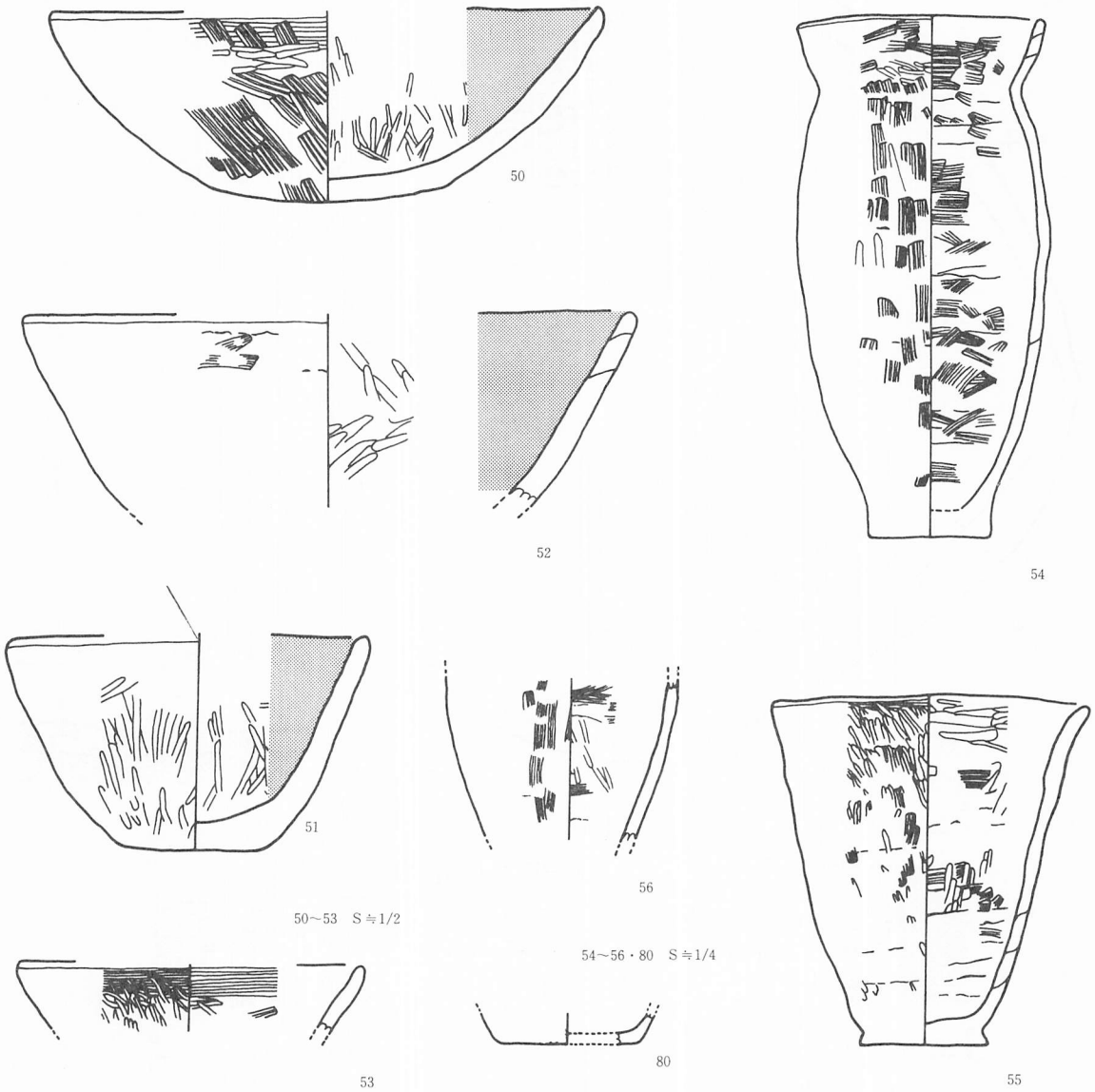
遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



第９号住居跡・焼土断面
１層　５Ｙ Ｒ 4/8 赤褐色焼土　やわらかい、粘性幾分あり
２層　10Y Ｒ 3/2 黒褐色土　やわらかい、粘性幾分あり
３層　10Y Ｒ 3/3 暗褐色土　やわらかい、粘性幾分あり
第９号住居跡・土層断面注記
１層　10Y Ｒ 5/3 鈍黄褐色土　ややかたい、粘性幾分あり（十和田ａ）「１′層は１層の撹乱層」
２層　10Y Ｒ 3/2 黒褐色土　やわらかい、粘性あり、極少量の十和田ａ含む「２′層は２層の撹乱層」
３層　10Y Ｒ 3/4 暗褐色土　指頭痕つく、粘性幾分あり
４層　10Y Ｒ 2/1 黒色土　やわらかい、粘性あり

第23図　第９号住居跡



No	地点層位	種類	口縁部	胴　部	底　部	口一底	黒色処理	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備　　考
50	Q２床面	坏	ナデ	ナデ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	17.2	5.9	7.6	24	20	内面に微小な稜、底部粗雑な削
51	Q２床面	坏	ナデ	ミガキ	ナデ	ヘラミガキ	あり	11.3	6.7	4.2	24	20	小振り、外面調整粗雑
52	焼土内	坏	ヘラナデ	ナデ	—	ヘラミガキ	あり	(19.0)	(7.1)	(8.0)	24	20	輪積み痕、小破片
53	埋土上部	坏	ナデ	ミガキ	—	ヘラミガキ	なし	(20.0)	—	—	24	20	厚手内湾、浅鉢的、小破片

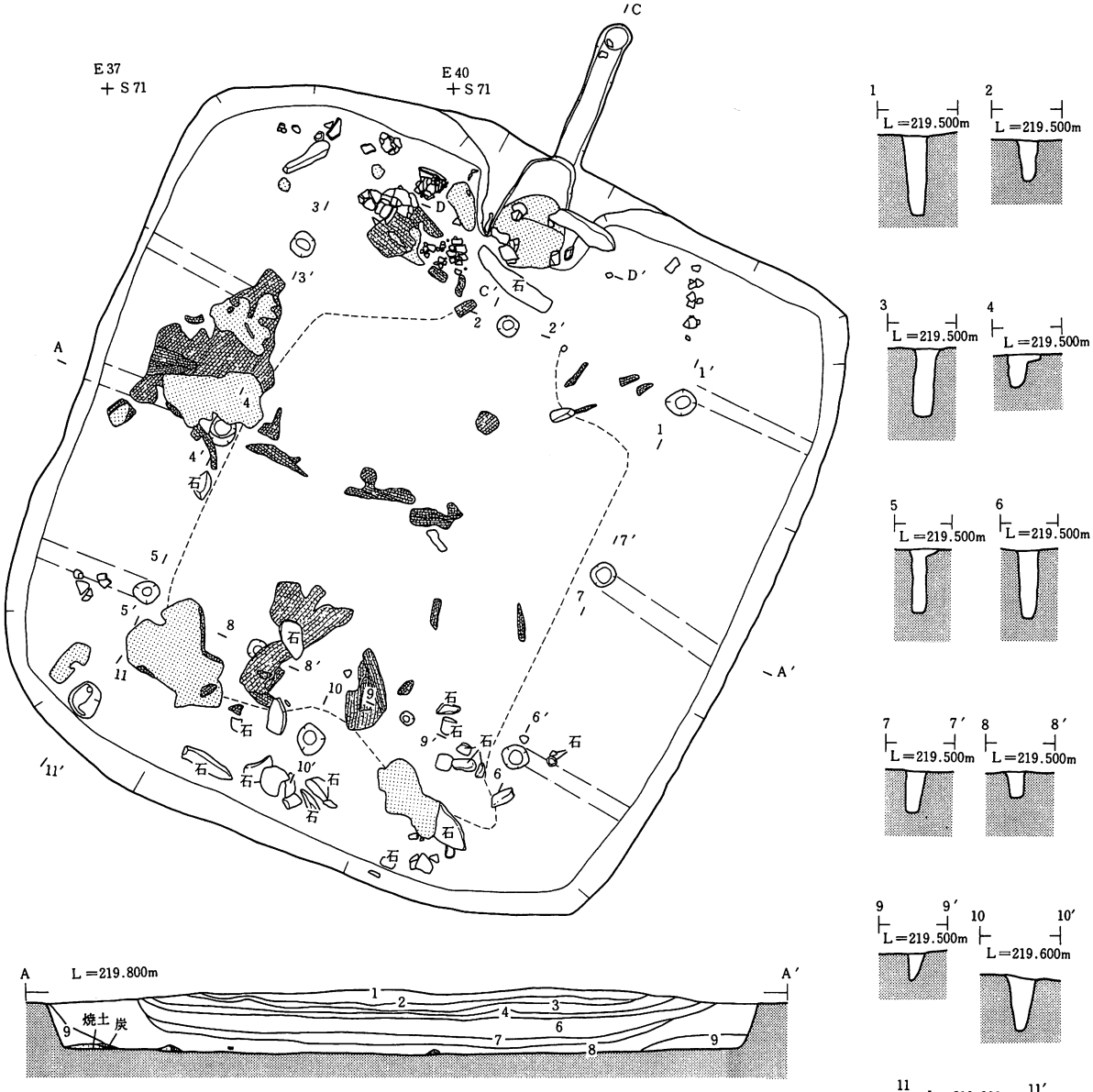
No	地点層位	器種	外　部			内　部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備　　考
			口縁部	胴　部	底　部	口縁部	胴　部	底部						
54	Q２床面	甕	ナデ	ハケメ	摩耗	ハケメ	ハケメ	ナデ	15.6	32.8	7.6	24	20	10YR8/3浅黄橙色　輪積痕、細長な器形、均質な胎土
55	埋土上部	甕	ミガキ	ハケメ	ケズリ	ミガキ	ハケメ	ナデ	20.0	20.0	8.0	24	20	10YR7/2純黄橙色　輪積痕、厚手、焼成良好、煤付着
56	埋土上部	甕	—	ハケメ	—	—	ハケメ	—	—	—	—	24	20	10YR7/3純黄橙色　厚手、焼成良好、外部調整粗雑

No	地点層位	器種	部位	器　形　／　外　面	内面	胎　土	図版	写真図版	備　　考
80	埋土上部	鉢	底部	無文、推定底径9.0cm	ナデ	粗砂含む	24	23	薄手、摩耗、縄文時代後期

第24図　第９号住居跡出土遺物

第10号住居跡（3Ｈ住）

調査区南半に所在した住宅の真下に十和田ａ火山灰の方形の広がりによって確認できた。遺存状況は比較的良好で、住居跡はあまり撹乱されていない。



第10号住居跡・土層断面注記

1層	10Y R 2/2	黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり（黒色土、川砂が混在）
2層	10Y R 2/2	黒褐色土	かたい、粘性幾分あり、極少量の十和田ａ含む
3層	10Y R 2/3	黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり
4層	10Y R 5/3	鈍黄褐色土	幾分かたい、粘性幾分あり、十和田ａ火山灰
5層	10Y R 3/2	黒褐色土	やわらかい、粘性あり、極少量の十和田ａが混在する
6層	10Y R 3/4	暗褐色土	指頭痕つく、粘性幾分あり、北側断面はこの層が明瞭でない
7層	10Y R 2/1	黒色土	やわらかい、粘性あり
8層	10Y R 2/2	黒褐色土	やわらかい、粘性あり、炭化物を含む
9層	5Y R 2/1	黒褐色土	やわらかい、粘性あり

第25図　第10号住居跡

＜遺構＞（第25・26図、写真図版12・13）

平面形　隅丸の方形である。

規模　6.4m×6.3m で、本遺跡では大型の部類に入り、当遺跡では最大規模である。

埋土　十和田ａ火山灰がレンズ状に堆積している。南壁際から中央部にかけて角礫が混入していた。

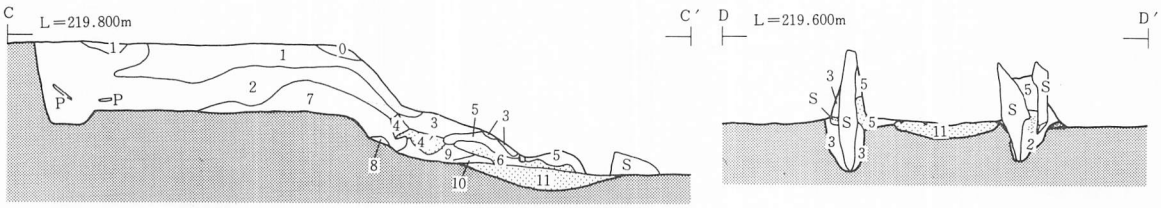
壁　壁際の埋土と壁土は識別が困難であった。深さは約50cmである。

床面　壁際から1.5m の範囲は比較的柔らかく、それ以外の所は土間状に堅い。それぞれの部分は表面や断面の色調も異なっている。

柱穴　住居跡のそれぞれの辺を４分割する位置に計８個の主柱穴が検出できた。前述の土間状部分はこれらに囲まれている。副柱穴は南辺に沿い１主柱穴を挟む形で２個検出されている。最大の深さは約40cmである。

カマド　北壁中央部に位置している。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。袖の根元部分は造りだしで、他は礫等を芯にして構築されている。煙道部は刳り貫き式である。左右の袖の外側に土器が押し潰された形で多く出土している。カマド内部にも数個体の土器が出土している。

その他　この住居跡も焼失住居で、床面に炭化材や焼土が散在している。



第10号住居跡・カマド断面注記

０層	10Y R 2/2	黒褐色土	かたい、粘性幾分あり（撹乱部、住宅の）
１層	10Y R 2/1	黒色土	かたい、粘性幾分あり（地山部）最下部出付着
２層	10Y R 2/2	黒褐色土	幾分やわらかい、粘性なし、砂礫焼土粒混入（ただし煙道口付近は少ない）
３層	10Y R 2/3	黒褐色土	やわらかい（指頭痕つく）粘性幾分あり、少量の焼土粒と５層の崩壊土を含む 炊き口程５層多くなる
４層	10Y R 2/3	黒褐色土	やわらかい（指頭痕つく）粘性幾分あり、焼土粒を含む
4′層	５Y R 4/6	赤褐色土	焼土。がりがりとかたい、５層の焼けて崩落したもの
５層	10Y R 4/4	褐色土	幾分やわらかい、粘性幾分あり、焼土炭を少量含む
６層	５Y R 3/2	暗赤褐色土	幾分やわらかい、粘性幾分あり、５層の（天井部の）焼けたもの
７層	10Y R 2/2	黒褐色土	２層の焼土粒地山（下層）粒の認められないもの、底部に煤染みあり
7′層	10Y R 3/2	黒褐色土	やわらかい、粘性幾分あり、（地山、崩落）
８層	４層と同じ		
９層	５Y R 3/2	暗赤褐色土	６層に炭や５層の焼けたものが混入している層
10層	５Y R 3/2	暗赤褐色土	９層に炭が多量に混入した層
11層	５Y R 4/8	赤褐色土	かたい、粘性なし（地山の焼けた部分）

第26図　第10号住居跡カマド

＜遺物＞（第27～29図、写真図版21・22）

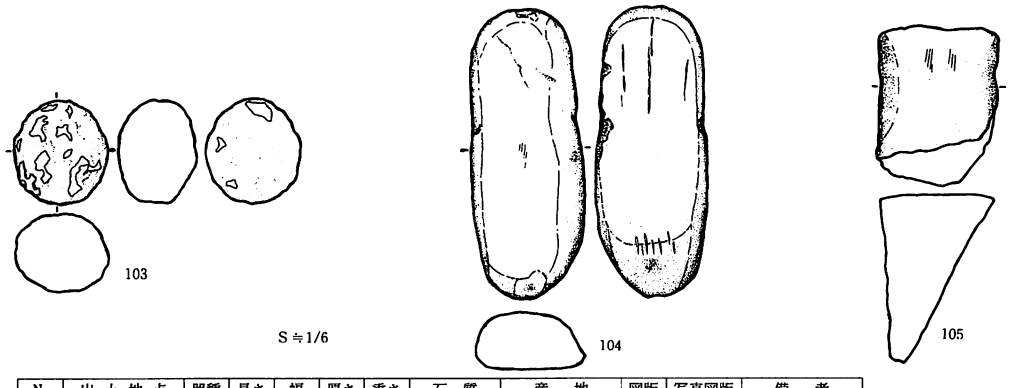
出土遺物は土師器の坏２点･鉢２点･甕13点と破片百数十点、砥石２点、磨き石１点である。

土師器

57は内黒の坏で内外とも上部ほどヘラミガキが顕著である。内湾気味で内側に稜があり、外側に括れが認められる。58は57に類似の技法で調整されている。59は輪積み痕を残すなど整形が粗雑な平底の鉢形土器である。底部から口縁部まで直に立ち上がる。外面は幅広のヘラミガキ・ナデ調整が施されている。60は59に類似の器形で丸底の鉢型土器である。口唇部は59に比して薄手である。61は頸部が鋭角に近い形で括れている甕である。大型の器形で外面にヘラミガキ様の調整が口縁部から胴部下位まで施されている。口縁部は内湾気味である。62は甕としては薄手である。内外に煤が付着している。胴部内面はハケメ調整が施されている。頸部の括れは小さい63は最大径を胴部にもつ壺型の甕である。外面には細い工具でヘラミガキ様のナデ調整が施されている。内湾気味の口縁部をもつ。64は焼成良好な甕の口・胴部破片で内外に煤が付着している。頸部にヘラミガキ調整も見られるが、全体的にはハケメ調整が卓越している。65はヘラミガキ調整が施されている甕の口頸部で、内面に煤が付着している。66は焼成良好で厚手の甕の口頸部で、幅広のヘラミガキ調整が施されている。67は幅広のヘラミガキ調整が施されている甕の胴・底部である。内面に煤が付着している。68は焼成良好で、ヘラミガキ調整の施されている甕の胴・底部である。内外に輪積み痕が認められる。69は甕の摩耗した底部破片である。70は成形および調整が粗雑な甕である。底部は外に挽き出されている。71・72は70をさらに粗雑に成型した感じのものである。特に71の胴部の側面形は、緩いキャリパー状を呈する。73は木葉底を有する胴径60cmの球胴甕である。薄手で焼成は良好なものである。

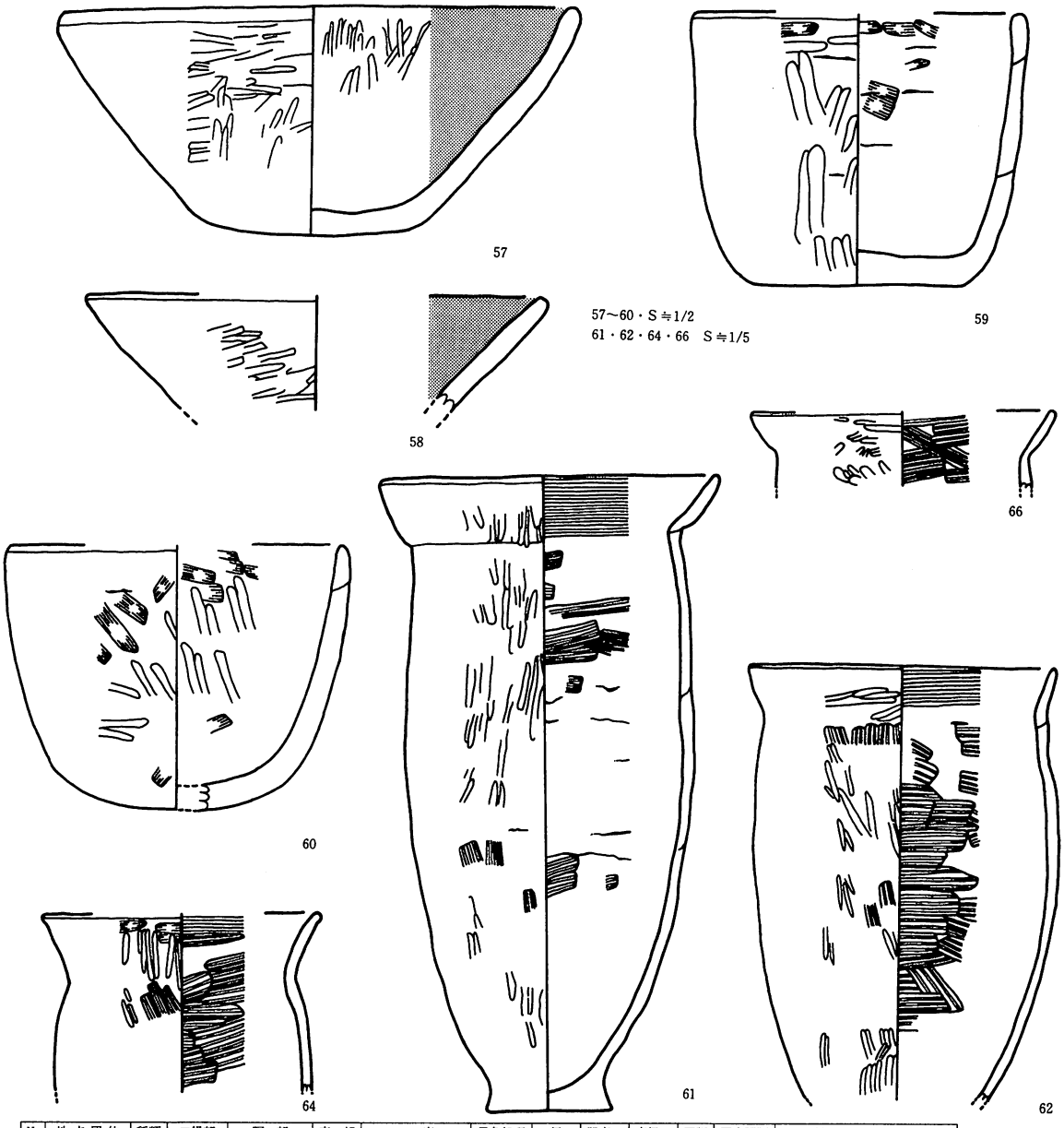
遺構の時期

他の住居跡と同時期と考えられる。



№	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	産地	図版	写真図版	備考
103	第10号住居床面	磨石	84	76	63	560	花崗閃緑岩	北上山地中生界	27	22	
104	第10号住居床面	砥石	230	89	47	1740	硬砂岩	北上山地古生界	27	22	
105	第10号住居床面	砥石	127	96	92	1800	硬砂岩	北上山地古生界	27	22	

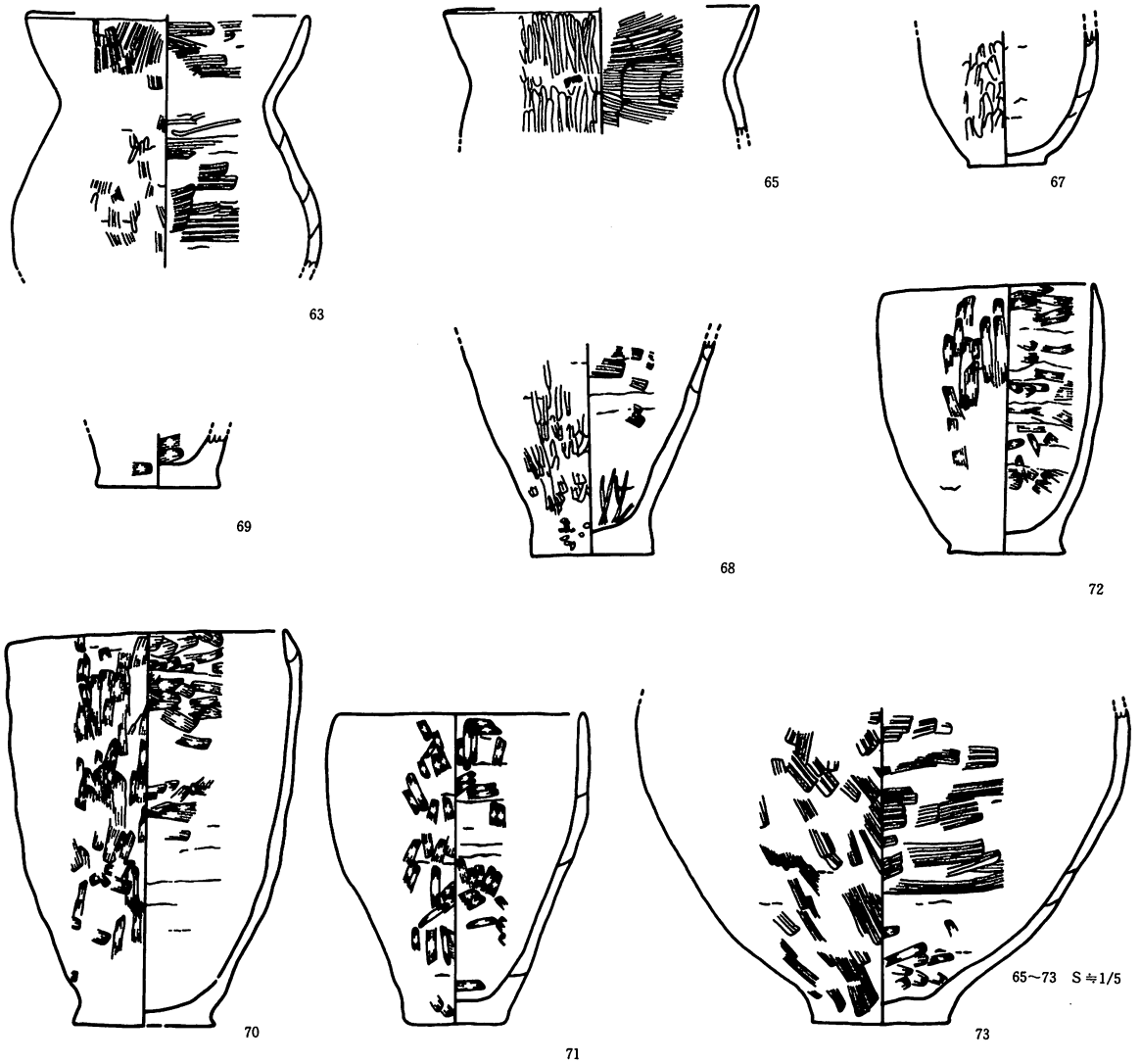
第27図　第10号住居跡出土遺物（１）



No.	地点層位	種類	口縁部	胴部	底部	口一底	黒色処理	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
57	Q 3床面	坏	ミガキ	ミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	16.8	7.4	丸底	28	21	内湾気味、内側に稜、外側に括
58	Q 3床面	坏	―	ミガキ	―	ヘラミガキ	あり	―	―	―	28	21	No.57類似
59	Q 1床面	坏	ミガキ	ナデ	摩耗	ナデ	なし	(10.8)	8.7	(6.6)	28	21	整形粗雑、輪積み痕
60	Q 3・4下位	坏	ヘラナデ	ナデ・ミガキ	ケズリ	ヘラナデ・ミガキ	なし	(11.0)	8.5	丸底	28	21	調整粗雑

No.	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
61	Q 2床面	甕	ミガキ	ミガキ	摩耗	ナデ	ハケメ	ナデ	22.0	41.4	8.1	28	21	10YR7/3鈍黄橙色　煤付着、輪積痕、内湾気味
62	カマド	甕	ミガキ	ミガキ	―	ナデ	ハケメ	―	20.0	―	―	28	21	10YR4/4褐色　薄手、内外煤付着
63	Q 4床面	甕	ハケメ	ハケメ	―	ハケメ	ハケメ	―	(17.4)	―	―	28	21	10YR7/3鈍黄橙色　内湾気味の口縁片、細い工具
64	カマド	甕	ミガキ	ハケメ	―	ナデ	ハケメ	―	(18.0)	―	―	29	21	7.5YR6/6橙色　口体破片、内外煤付着、焼成良好

第28図　第10号住居跡出土遺物（2）



No	地点層位	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
65	煙出し部	甕	ミガキ	ミガキ	—	ハケメ	ハケメ	—	(19.2)	—	—	29	21	5YR4/4鈍赤褐色　磨き様ナデ調整、内面煤付着
66	Q 2 下部	甕	ミガキ	ミガキ	—	ハケメ	ハケメ	—	(20.0)	—	—	29	21	10YR7/3鈍黄橙色　厚手、焼成良好、内湾
67	Q 4 下部	甕	—	ミガキ	摩耗	—	ナデ	ナデ	—	—	4.7	29	21	10YR7/3鈍黄橙色　内面煤付着、内面調整単位不明
68	Q 4 下部	甕	—	ミガキ	ナデ	—	ハケメ	ナデ	—	(13.0)	7.5	29	22	5Y R6/6橙色　焼成良好、内外に輪積み痕あり
69	Q 2 床面	甕	—	摩耗	摩耗	—	ハケメ	ナデ	—	—	7.6	29	22	10YR鈍黄橙色　摩耗底部片
70	Q 1 床直	甕	ナデ	ナデ	摩耗	ナデ	ナデ	—	17.1	24.5	8.6	29	22	10YR6/3鈍黄橙色　整形調整粗雑、体底部
71	カマド	甕	ナデ	ナデ	摩耗	ナデ	ナデ	ナデ	15.5	19.2	6.2	29	22	10YR7/3鈍黄橙色　整形調整粗雑、輪積痕著しい
72	カマド	甕	ナデ	ナデ	摩耗	ナデ	ナデ	撫付け	12.7	16.7	7.0	29	22	10YR7/3鈍黄橙色　整形ハケメ調整粗雑、煤付着
73	Q 4 下位	甕	—	ハケメ	木葉底	—	ハケメ	ナデ	—	—	8.4	29	22	10YR8/4浅黄橙色　焼成良好、薄手、胴径30cm

第29図　第10号住居跡出土遺物（3）

第11号住居跡（４Ｉ住）

調査区南半東端に検出された。遺構の東半分は調査区外となっている。住宅の台所部分にあたり、排水管により撹乱されている。また地山が南東方向に傾斜して落ち込んで行く部分にあたる。

＜**遺構**＞（第30・31図、写真図版14）

平面形　隅丸方形である。

規模　　4.4m×（4.4m）の大きさと推定され、本遺跡では中型の部類に入る。

埋土　　十和田ａ火山灰は認められなかった。撹乱も受けている。

壁　　上部及び中央部が撹乱を受けている。撹乱部分を除いても壁土と埋土の区別は容易でない。深さは30cm程である。

床面　　軟弱な土層を掘り込んで使用している。周溝は検出できなかった。

柱穴　　２個確認している。深さは約40cmである。

カマド　他の遺構と同様に、北壁中央部に位置している。本体燃焼部の両側に地山を掘り込んで石を据え、天井部には石を渡して構築したと考えられる。袖の根元部分は造りだしで、他は礫等を芯にして構築されている。煙道・煙出し部の上半部は撹乱を受けている。

その他　床面に焼土や炭化材が広がっており、焼失住居であることを示している。

＜**遺物**＞（第31図、写真図版23）

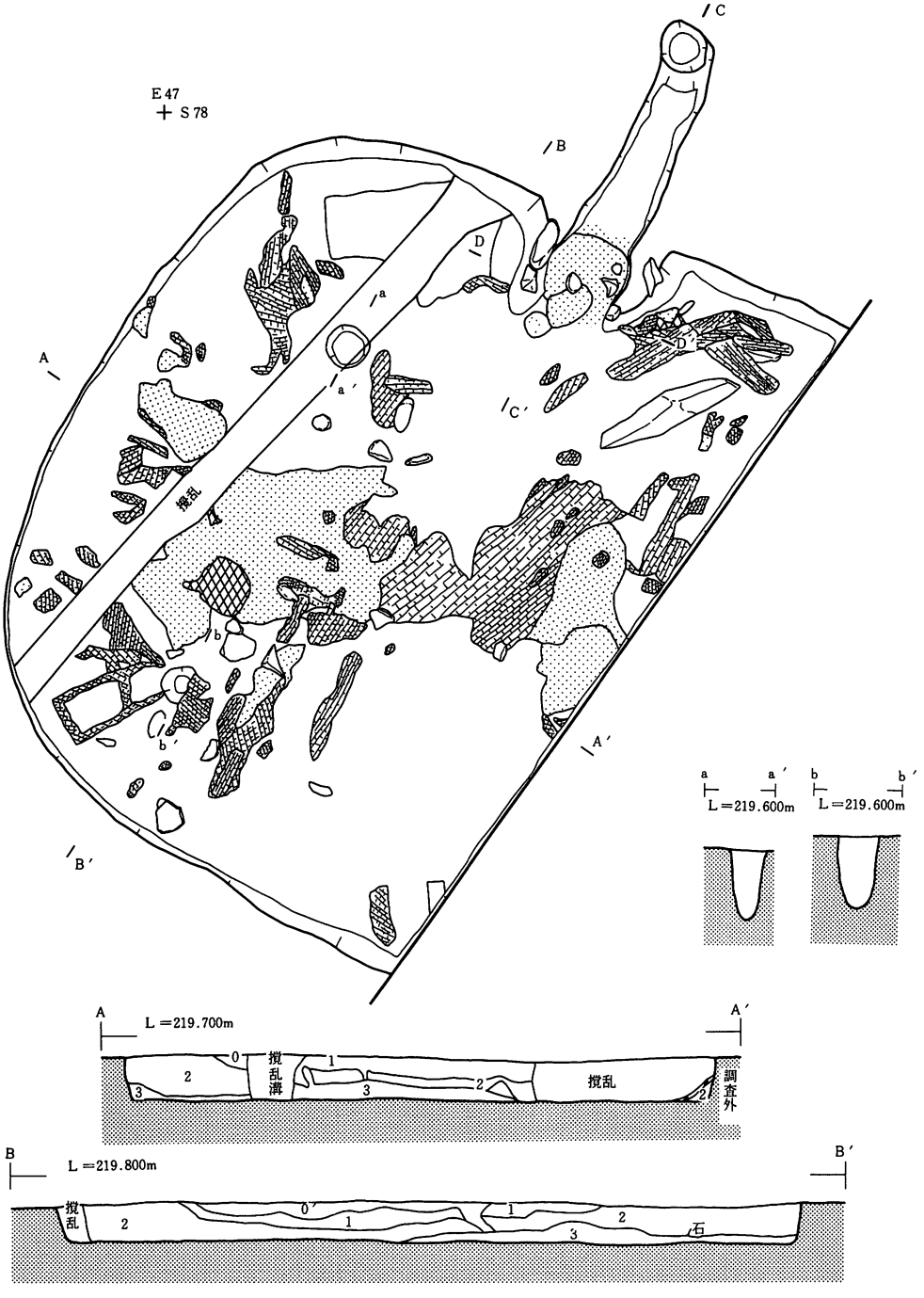
出土遺物は土師器の坏２点である。

土師器

74は内黒丸底の坏である。内外面とも部分的にヘラミガキが認められる。焼成は良好である。75は内黒丸底の坏の破片である。全体的に粗雑なつくりである。

遺構の時期

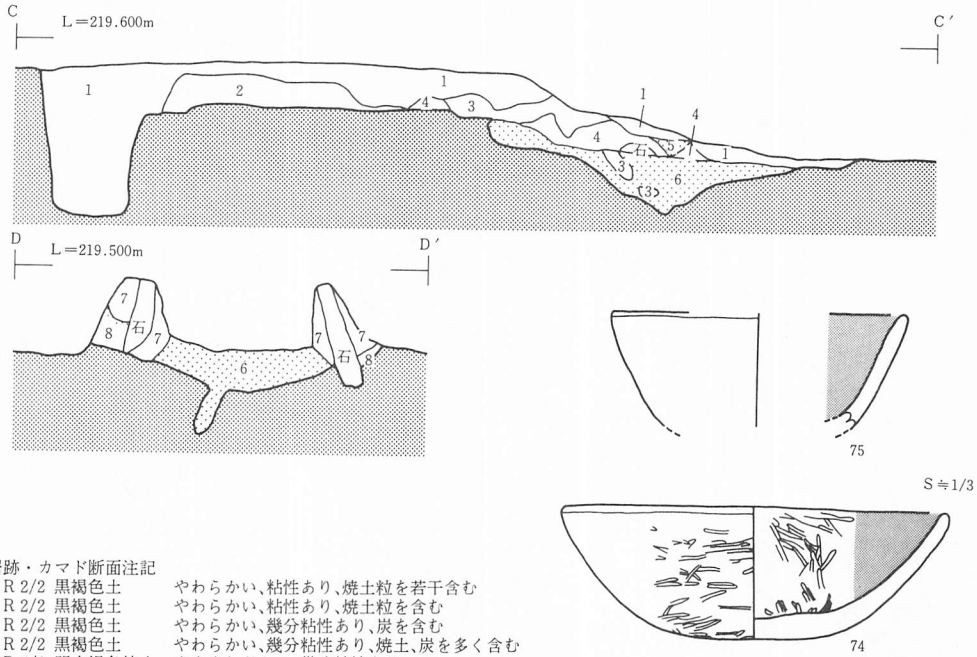
他の住居跡と同時期と考えられる。



第11号住居跡断面土層注記

0′層	10Y R 2/2黒褐色土	かたい、粘性幾分あり、火山灰を中央部に胎はいする。根痕への入り込みが南側で認められる
0層	10Y R 2/1黒褐色土	柔かい、粘性幾分あり(溝による撹乱)掘り上げ土炭化材を多量に含む
1層	10Y R 3/1黒褐色土	柔かい、粘性あり、炭化物、火山灰を含む(撹乱を幾分受けている)
2層	10Y R 2/1黒色土	柔かい、粘性幾分あり、中心部程炭化物を多く含む
3層	10Y R 2/1黒色土	柔かい、粘性幾分あり、炭化物、焼土を含む(2層とは焼土の含有で区分した)

第30図　第11号住居跡



第11号住居跡・カマド断面注記
1層　10Y R 2/2 黒褐色土　やわらかい、粘性あり、焼土粒を若干含む
2層　10Y R 2/2 黒褐色土　やわらかい、粘性あり、焼土粒を含む
3層　10Y R 2/2 黒褐色土　やわらかい、幾分粘性あり、炭を含む
4層　10Y R 2/2 黒褐色土　やわらかい、幾分粘性あり、焼土、炭を多く含む
5層　5Y R 5/6 明赤褐色焼土　ややわらかい、幾分粘性あり
6層　5Y R 4/8 赤褐色焼土　やわらかい、幾分粘性あり、3層をまだらに含む(撹乱を受く？)
7層　10Y R 3/1 黒褐色土　ややかたい、幾分粘性あり、焼土粒、炭を含む
8層　10Y R 4/4 褐色土　ややかたい、粘性少い、砂礫を少量含む

No	地点層位	種類	口縁部	胴　部	底　部	口一底	黒色処理	口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備　　考
74	Q 3 床面	坏	ナデ	ミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	15.4	5.2	(5.0)	31	23	丸底風、調整粗雑、焼成良好
75	Q 3 床面	坏	ナデ	ナデ	ケズリ	ヘラミガキ	あり	(11.8)	(5.0)	(6.0)	31	23	整形調整粗雑、全体的に摩耗

第31図　第11号住居跡・出土遺物

2．土坑（第32図、写真図版15）

2基検出されている。

第1号土坑（4C2P）

調査区北側の4C区に位置する。検出面はIII層上面である。平面形は円形で、断面形は漏斗形に近い。規模は開口部径1.8m、底部径0.82m、深さ1.20mである。埋土は自然堆積で、下部には上部壁の崩壊土が認められる。

遺物は出土していないが、形状などから縄文時代の遺構と推定される。

第2号土坑（4C1P）

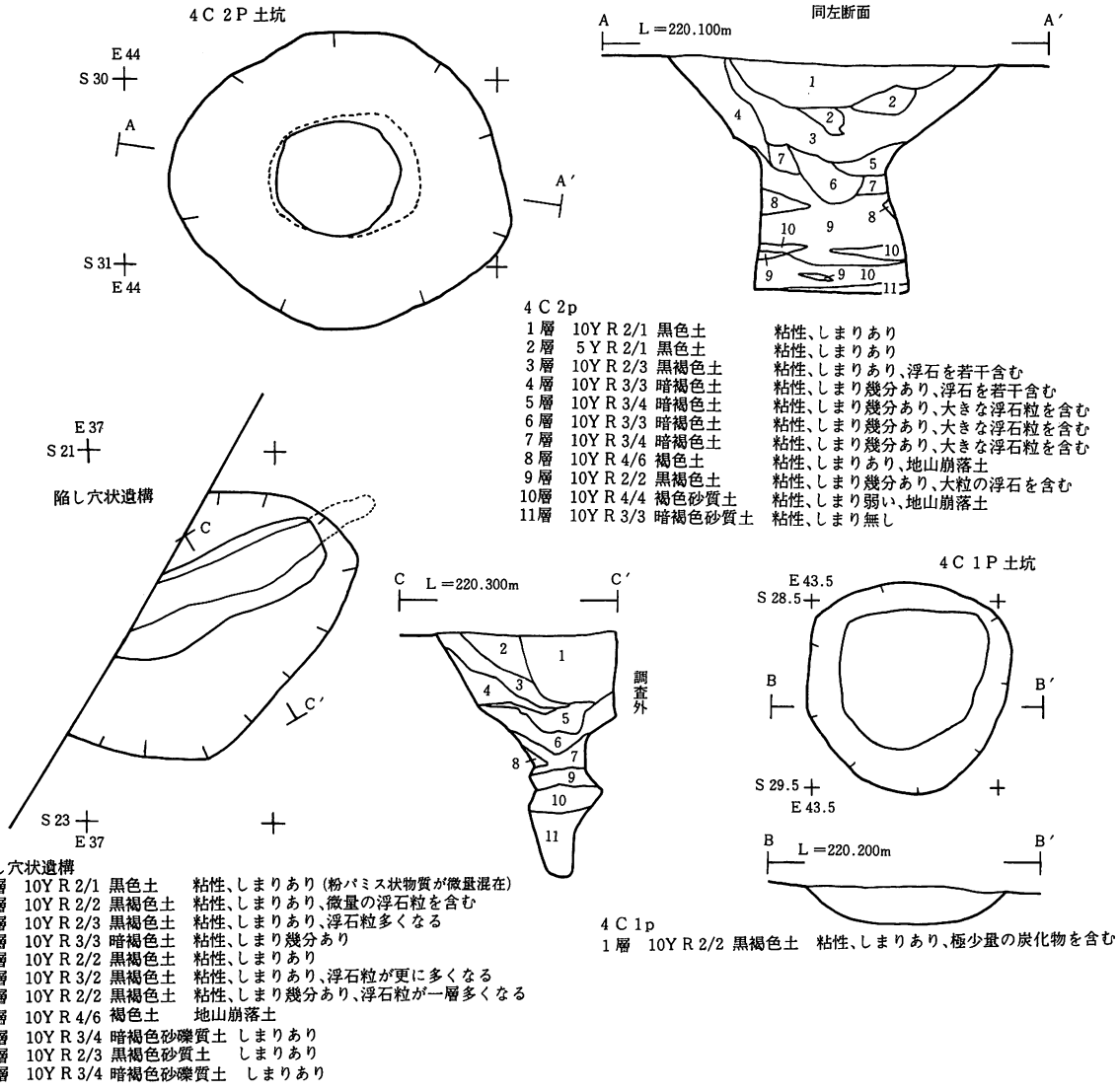
調査区北側の4C区に位置する。検出面はIII層上面である。平面形は円形で、断面形は皿状である。規模は開口部1.1m、底部径は0.30m、深さ0.2mと小規模なものである。埋土は単層である。

遺物は出土していない。

3．陥し穴状遺構（第32図、写真図版15）

調査区北側の３Ｃ区に位置し遺構の西半分以上が調査区外に伸びている。検出面はⅢ層上面である。平面形は開口部が不整円形、底部は不整長円形、断面形はＹ字状を呈する。全体の規模は不明であるが、開口部1.6m×0.9m、底部1.5m×0.2m、深さ1.30mである。長軸方向はＮ—30°—Ｅである。側壁は中央部で大きく崩れて広がっている。長軸方向の壁は底部近い部分において大きく抉り込まれている。埋土は壁の崩落土で、南部浮石が混在している。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代の遺構と考えられる。



第32図　陥し穴状遺構・土坑

4．建物跡（第33図、写真図版14）

調査区中央部で検出できた。北側中央部の一部は基礎工事の際に破壊されている。柱穴列は南側から5列あり、1列目と2列目および3列目と4列目の間隔が1.6m～1.8mの値で狭く、他の柱穴列の間隔は3 m～3.5mとなっている。列内の東西間隔は2.3m内外となっている。南側からの1列目から4列目で建物1棟が考えられる。北東隅の配列は西側と異なり、東側の2列で8基が南北に等間隔で並んでいるのでこの部分を含めて考える必要があるかとも思われるが、この西側が撹乱されているので確定できない。

推定される1棟の東西長は16m、南北四長は6 mの長方形となる。地盤が東側に傾斜しているのでそれぞれの柱穴の深さは50cm～20cmである。この建物内に検出された柱穴以外に上屋を支える何らかの構造を考えなければ建物として存在できないものと思われる。その構造としては根太石と根太柱以外には考えが及ばない。現存し移転した家屋は根太石上の柱で上屋を支えていたが、掘り込み柱穴と併用した例が他にあるのか今後の研究成果を待ちたい。また北側の1列も性格が不明である。根太石併用を考えに入れればこの列を含む南北長10mの建物になる。雪除けまたは地域の施設と考えた方がいいのか今後の検討課題である。

Ⅴ．遺構外の遺物

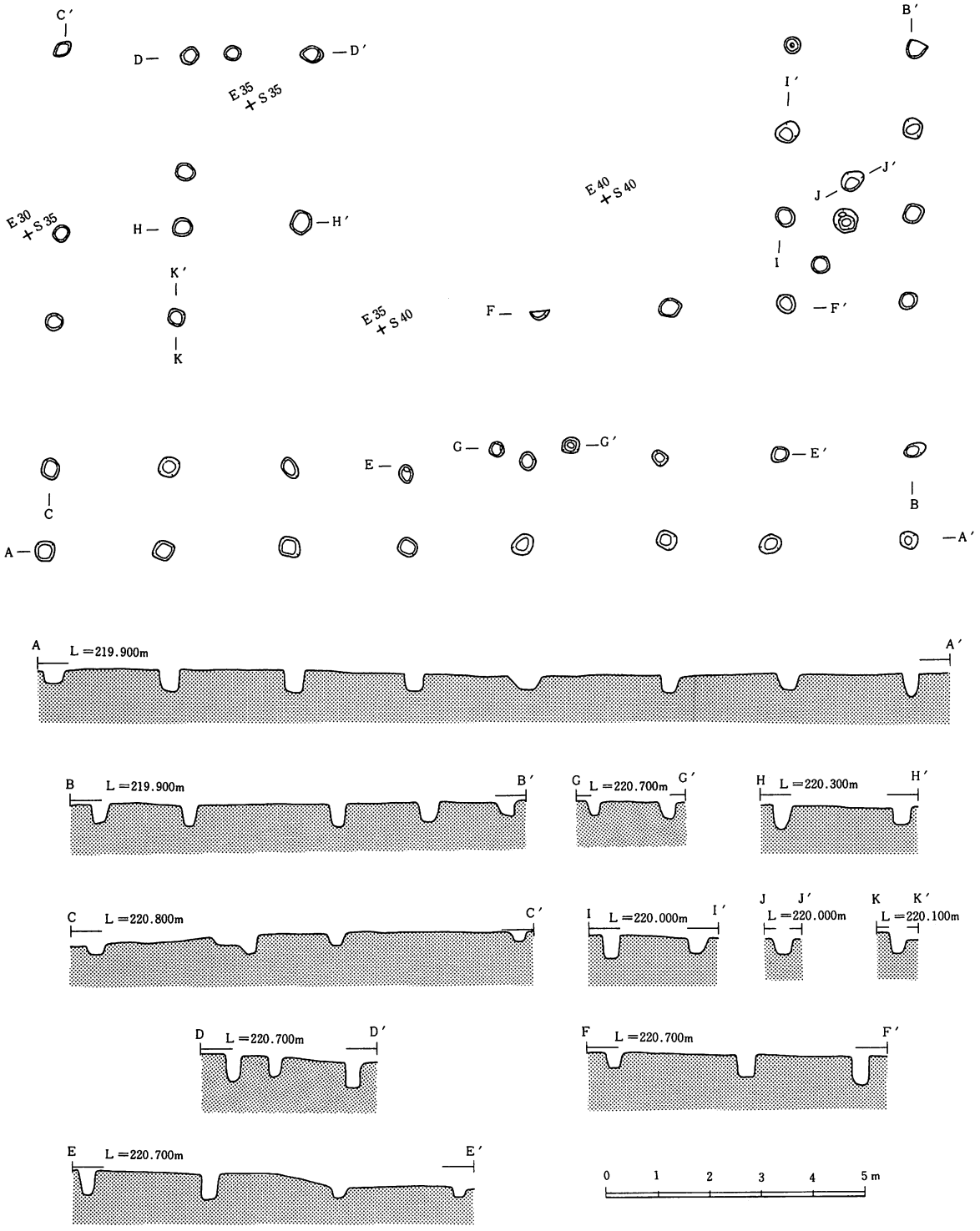
出土遺物は十数点の土師器の砕片と縄文土器数十片・石器・土製品である。

土師器

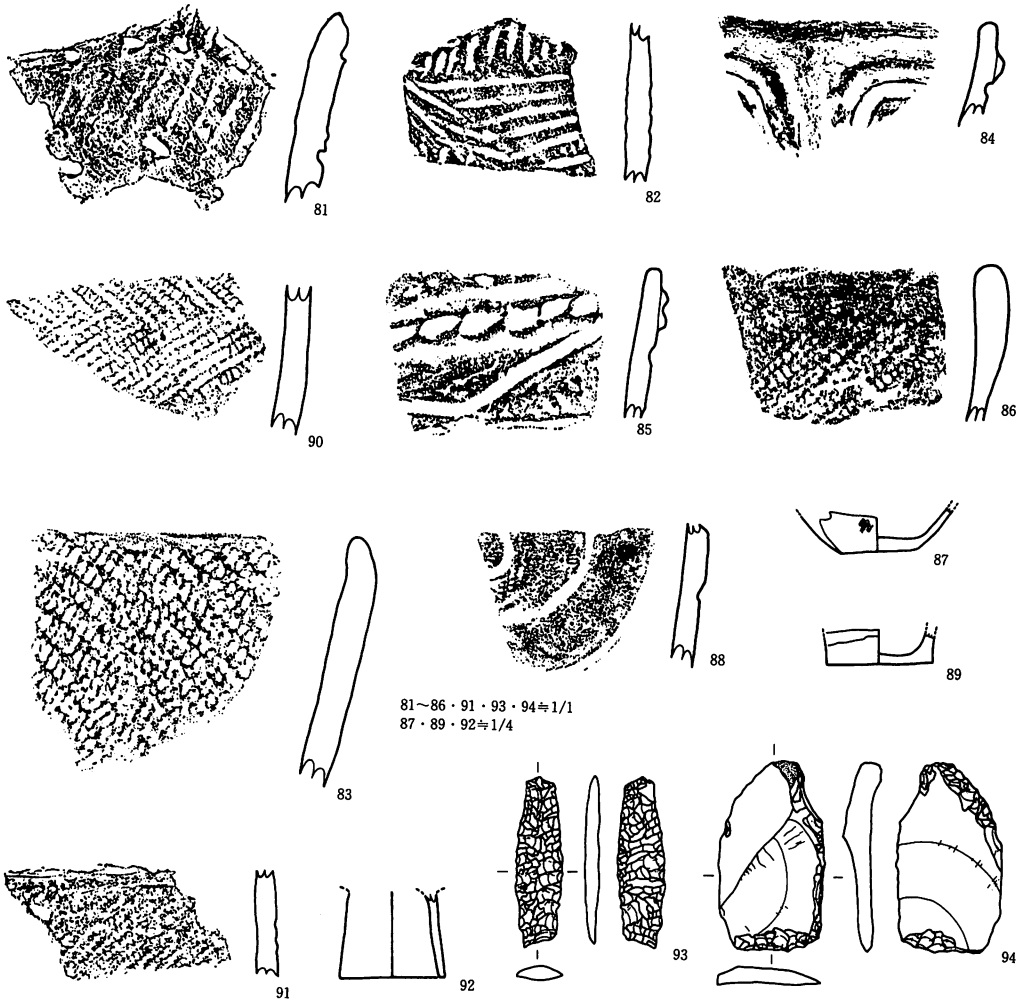
甕の破片が大半である。遺構内の遺物とほぼ同時期のものである。

縄文土器（第34図、写真図版23）

81は3Ｃ区のⅢ層下部において検出された鉢形土器の口縁部破片である。波状口縁部に貝殻腹縁の押圧と竹管様刺突具を用いて文様が施されている。82は4Ｃ区のⅢ層下部において検出された鉢形土器の口縁部破片である。薄手で均質な胎土である。内外に貝殻条痕文が施されている。77・78は薄手の鉢で体部に沈線区画文が施してある。胎土に浮石や雲母を含む。79は鉢の口縁部で折返し部直下から縄文が施されている。80は鉢の底部である。薄手で摩耗している。83は深鉢の口縁部である。口唇部が磨かれ煤が付着している。84は浅鉢の口縁部である。体部まで隆帯が垂下し、隆帯内部を沈線区画してある。85も浅鉢の口縁部である。小波状口縁の隆帯に斜方から刺突している。体部にかけて沈線区画の磨消し縄文である。86は鉢の口縁部である。体部にかけて薄くなる。煤が付着している。87は鉢の底部である。86と似た技法および胎土である。88は浅鉢の体部である。鉤状沈線の区画による磨消縄文である。角閃石を含む。89

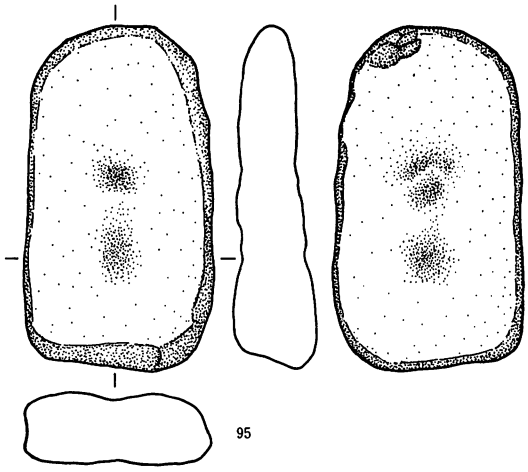

C′
D
D′
E35
S35
B′
I′
E30
S35
H
H′
E40
S40
J′
J
I
K′
K
E35
S40
F
F′
G
G′
E
E′
C
B
A
A′
A
L＝219.900m
A′
B
L＝219.900m
B′
G
L＝220.700m
G′
H
L＝220.300m
H′
C
L＝220.800m
C′
I
L＝220.000m
I′
J
J′
L＝220.000m
K
K′
L＝220.100m
D
L＝220.700m
D′
F
L＝220.700m
F′
E
L＝220.700m
E′
0
1
2
3
4
5m

第33図　建物跡

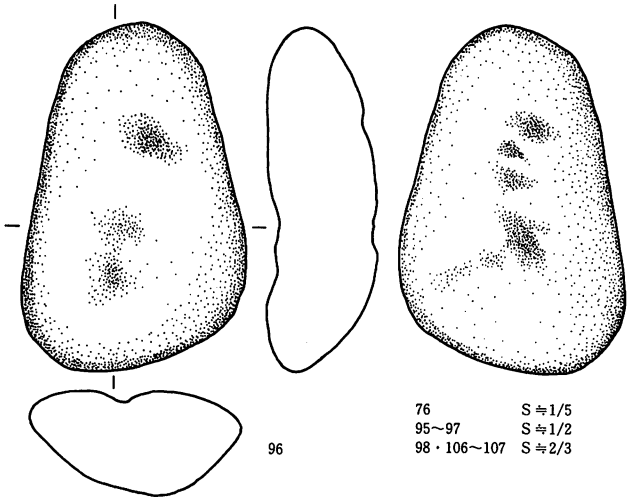


No	出土地点	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	図版	写真図版	備考
81	3C3層下部	深鉢	口縁部	山形、貝殻紋（腹縁刺突）、刺突列	貝殻条痕	繊維含む、硬堅	34	23	10YR5/2灰黄褐色　厚さ8㎜。縄文時代早期（登沢AⅡのd）
82	4C3層下部	深鉢	体部	貝殻条痕文　10YR5/3黄褐色	貝殻条痕	軟質、繊維は少量	34	23	10YR7/3鈍黄橙色（内面）厚さ5㎝。縄文時代早期（ムシリ）
83	4E2a2層	深鉢	口縁部	口唇部磨き煤付着RLR	ナデ	細礫含む	34	23	
84	0G3c2層	浅鉢	口縁部	隆帯垂下内部沈線区画	ナデ	粗砂含む	34	23	
85	2F表面採集	浅鉢	口縁部	小波状口縁、隆帯斜方刺突、磨消し	ナデ	粗砂含む	34	23	
86	4B2層上部	鉢	口縁部	平口、煤付着、摩耗	ナデ	細礫含む	34	23	
87	4B2層	鉢	底部	LR	ナデ	細礫含む	34	23	10YR6/4鈍黄橙色　推定底径7㎝、No86と同一か
88	0G2層下部	浅鉢	体部	鉤状沈線、磨消縄文RL	ナデ	角閃石含む	34	23	
89	0G2層下部	鉢	底部	輪積み痕剝離	ナデ	角閃石含む	34	23	10YR6/4鈍黄橙色　No88と類似胎土
90	4B1層	鉢	体部	羽状文LR	ナデ	粗砂含む	34	23	
91	4K1層	浅鉢	体部	頸部に沈線や細かい縄文	ナデ	粗砂含む	34	23	
92	3J2層	高坏	脚部	無文	ナデ	硬堅	34	23	

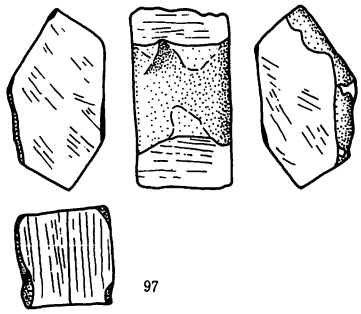
第34図　遺構外の出土遺物（1）



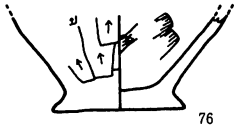
95



96

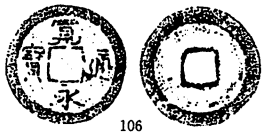


97

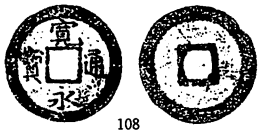


76

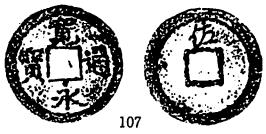
98



106



108



107

76　　S≒1/5
95～97　　S≒1/2
98・106～107　S≒2/3

No	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	産地	図版	写真図版	備考
93	4A　2層下部	石鏃	45	13	4	2.3	粘板岩	北上山地古生界	34	24	
94	4A　2層下部	不定形石器	51	28	9	10.9	粘板岩	北上山地古生界	34	24	
95	4C　4層直上	凹石	102	56	24	217	硬砂岩	北上山地古生界	35	24	
96	4B　2層下部	凹石	103	67	30	232	硬砂岩	北上山地古生界	35	24	
97	4E　3b撹乱	砥石	53	28	28	72	粘板岩	北上山地古生界	35	24	

No	出土地点	器種	外部			内部			口径cm	器高cm	底径cm	図版	写真図版	備考
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部						
76	3F　表採	甕	—	ケズリ	摩耗	—	ハケメ	ナデ	—	—	8.0	35	23	7.5YR6/4鈍橙色　煤付着、体底部

No	出土地点	種類	高さ	幅	厚さ	重さ	材質	図版	写真図版	備考
98	3I　1層	泥人形	21	17	5	1.5	粘土	35	24	布袋様

No	出土地点	銭貨	直径	重さ	図版	写真図版	備考	鋳年代／西暦
106	3I　1層	寛永通寶	25	3.17	35	24	ユ通・貝賓、腐食	元文2年／1738・出羽秋田所鋳銭
107	3I　1層	寛永通寶	24	2.85	35	24	背佐・ユ通、腐食	享保2年／1717・佐渡相川所鋳銭
108	3I　1層	寛永通寶	24	2.95	35	24	マ通・ス貝	不明（元文山城横大路所鋳銭？）

第35図　遺構外の出土遺物（2）

は鉢の底部である。角閃石を含み88と類似の胎土である。90は鉢の体部である。羽状文を施されている。91は4K区の1層で検出された浅鉢の体部である。頸部に沈線や細かい縄文が施されている。92は高坏の脚部である。

以上の土器の時期については次のように考えられる。81の貝殻文の様子から縄文時代早期前葉のものと思われる。蛍沢AII式の中に類似の技法が見られる。82は縄文時代早期後葉のものと思われる。ムシリ式と呼ばれるものに類似の技法が見られる。83以降のものは磨り消し技法や胎土などから縄文時代後期以降のものと考えられる。91も頸部の沈線や細かい縄文原体より後期のものと思われる。92は弥生時代のものと考えられる。

石器（第34・35図、写真図版24）

剝片石器2点と礫石器3点が出土している。

93は石鏃である。先端と基部を欠いている。長さの割に薄く作られており、石槍に近い細身の形態である。94は石匙を作る過程でできたと思われる不定形石器である。削器的な下端部と上部に不完全な摘まみ様の作り出しの跡と思われる部分が認められる。95は楔様の形状の凹石である。両面に不明瞭ながらも2点づつ凹所が認められる。96も凹石である。形態的に安定感はないが、両面にそれぞれ3点づつ凹所が認められる。97は砥石である。8面のうち5面が使用されている。この砥石は住居跡と同時期のものと考えられる。

土製品（第35図、写真図版24）

98は七福神の内の一人である布袋像である。表面は立体的であるが背面は平らである。型取りののち素焼きされたものである。ごく最近のものである。

銭貨（第35図、写真図版24）

遺構外1層から、寛永通寶3枚が密着した状態で出土している。106は腐食しているが、ユ通・貝賓の特徴を持つことから、出羽秋田所鋳銭に類似している。107も腐食しているが、背佐・ユ通などから、佐渡相川所鋳銭に類似している。108はマ通・ス貝の特徴をもつことから山城横大路所鋳銭との類似性を確認するに留める。

VI. まとめ

1．遺構について

検出された遺構は、土坑２基、陥し穴状遺構１基、古代の住居跡11棟、近世から現代にかけての建物跡１棟である。

(1) 土坑

この２基のそれぞれは規模形状とも対象的である。第１号土坑はその規模・形状から用途を特定できないが、類例から構築時期として縄文時代を想定できるであろう。しかし、第２号土坑については掘り込みの浅いこと埋土が単層であること等から所属時期は新しいと考えられよう。

(2) 陥し穴状遺構

調査区域内にはこの１基のみであるが、調査範囲外にも同様な遺構が存在する可能性がある。

(3) 竪穴式住居跡

２年間にわたる調査において合計11棟の住居跡が検出された。その内訳は、ほぼ全容が残存しているもの６棟、一部が調査区域外にかかるもの４棟、一部が破壊されたもの１棟である。これらの特徴について以下の項目についてまとめてみる。

平面形　全容が遺存していた６棟を類例とすれば、おおむね隅丸正方形に集約できる。

規模　推定面積も含むが、３大別すると平均34.6m²２棟、平均15.7m²５棟、平均9.2m²４棟になる。この差が、集落内における階層差を反映するものとも考えられよう。

埋土　埋土の断面から、いずれも自然堆積と考えられる。いずれの場合も十和田ａ火山灰の堆積があったと考えられるが削平されて確認できないものもある。

壁　構築場所における地山面までの深さが一様でなく、地山面までが深い場合は壁の形状を維持するために貼壁を施したと考えられるが、その痕跡などは検出できなかった。

床面　第５号住居跡を除くと貼り床はいずれの住居跡でも検出できなかった。地山をそのまま床面として用いることが多いが、第２・３・４・５・６・11号住居跡の場合は全面ないし南側半分が中掫層を床面としている。周溝らしきものは第２・３号住居跡に見られるが、他の住居跡においては認められなかった。第10号住居跡は主柱穴の内側に土間をもち、壁との間に敷物若しくは板敷きの施設を伴うものと考えられる。

柱穴　基本的には４基をもって住居を構築している。第５・６・９号住居跡においては柱穴は検出できなかった。第10号住居跡は今回の調査において最大の規模で、主柱穴も８基で副柱穴をともなうものである。第２号住居跡においては柱根部が空洞になって検出できた。

柱の材としてはクリが多用され、一部にアオダモ・ケヤキが用いられているとの鑑定結果を得ている。

カマド　第1・4・9号住居跡を除く他の住居のカマド設置場所はいずれの場合も住居跡北壁のほぼ中央部で、住居跡・煙道部の向きともにN—30°—Wと同じ傾向を示す。

煙道部の構造としては第10号住居跡が刳り貫き式であるほかは、第2・3・5・6・7号住居跡は掘り込み式である。しかし、地山が脆弱であるため、刳り貫き式が崩壊したことも考えられる。

燃焼部は大半の遺構で崩壊が激しいが、燃焼部のそばに板状もしくは棒状の石が検出されることから、焚口天井部に石を渡しカマドを構築していたものと考えられる。袖の根元部分は造り出しで、焚口部分に縦に石を据え地山質土で覆っている。

その他　遺跡は丘陵が東方向に舌状に張り出した部分の付け根にあたり、南側は瀬月内川と比高差2～3 mで接している。北側は高低差20m前後である。このため集落は東西方向に拡大するしかない。事実、東側部分の開田工事の際カマド跡とおぼしき焼土および石組みが露出したとの話を聞いている。調査区内に限ってみると前述のように床面となる地盤に土質の差が認められる訳で、このような狭い範囲に地盤の善し悪しを厭わず住居を構築しなければならなかった様子を示していよう。

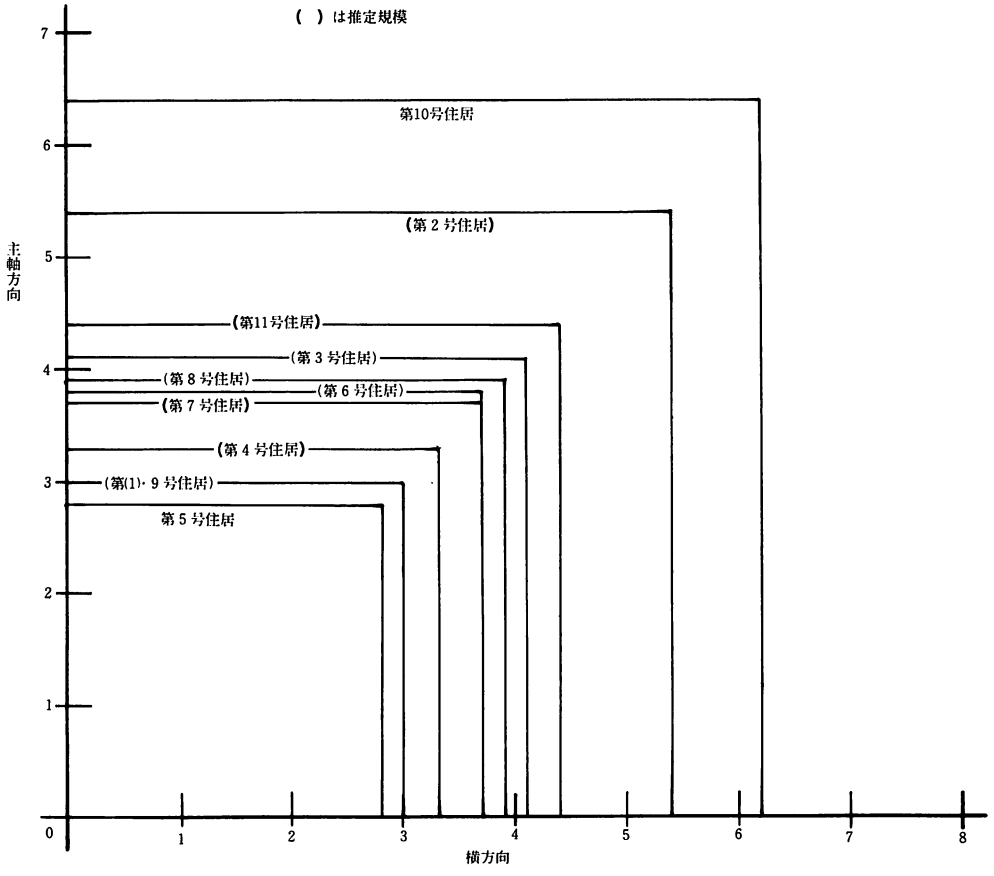
全部の遺構が焼失住居である。残存炭化物は柱材と考えられるものが大半で、第4号住居跡に床材らしきものと第2・3号住居跡にヨシ又はカヤと思われる炭化物が認められる。焼失の原因については不明である。岩手県北地方には、古代の住居跡は焼失住居が多いことが報告されているが、当遺跡もこのような事例に含まれることを示している。

遺物の残存状況には多少の差がある。全掘できた第3・5・6・8・9・10号住居跡のうち第8・9・10号に比較的多くの遺物が残存している。未掘部分のある第1・2・4・7・11号住居跡においては不確定の要素があるものの、第2・4・7号に比較的多くの遺物が残存している。結論的に半数以上の住居に遺物が多く残存している。

住居跡内の炭化物のうち第2号住居跡の柱材を学習院大学に委託して絶対年代測定を行った。その結果を巻末に掲載してあるが、これによると推定年代からみると大分掛け離れた紀元前180年という値が算出されている。測定者の注釈によればこの時代のものは古くでる傾向にあるとのことであるが、第2号住居は南半分を掘り込まれて破壊されているので紛れ込みの可能性もなくはない、しかし床面直上のしかも住居跡の部材を取り上げて資料としているので掛け離れた値の原因としての紛れ込みは消去される。

(4) 建物跡

明瞭な形で柱跡が建物跡として認められるものは1棟のみで、これ以外に南側に2～3基の柱跡らしきものが存在したが、建物跡にはならなかった。南側の移転家屋の部分については第11号住居跡のところでも触れたとおり、根太石を据えて構築しており、特に柱穴は必要としない。



第36図　住居跡規模図

2．出土遺物について

出土した遺物には、土器（縄文土器・弥生土器・土師器）、石器、刀子、砥石、銭貨、土製品があるものの、ここでは出土量も多く、竪穴住居跡の所属時期を考察するために、土師器に限定してその特徴を検討し、他遺跡の類例と比較しながら所属時期を考えることとする。出土した土師器は全てロクロ不使用成形の個体のみである。器種には坏形土器と甕形土器（以下では坏と甕に省略）があり他器種がない特徴があるものの、完形品が少なく破片での出土が多いことを考えると、甑や高坏と言った器種も含まれている可能性も考えられる。

(1) 坏

報告書に21点掲載したが、15点が完形か図上復元の個体である。坏とした中には碗や浅鉢と分類される器形も含めている。特に59・60の２点は鉢とされる器形かも知れない。もし、細分した場合は碗３点と鉢２点となる。これらの器形については第38図、計測値については第37図に集成し示してある。以下ではそれぞれの項目に従って検討していくこととする。

＜器　形＞

大別すると底部形態が丸底の個体７点（４・38～40・50・60・74）の他は平底や平底風であり、４点（52・53・58・75）は底部が残存しないので不明である。底部が丸底の個体の器形には４種類の器形が含まれている。

① 体部と底部の接点の内外面に明瞭な段をもち口縁部は僅かに内湾し外傾する器形であり、４の１点が該当しこの個体以外にはない。

② この器形は全体が緩い半円形に近い形を示し、口縁端部が直立気味に立ち上がり、38・40の２点が該当する。40は内面の底部と体部の接点に軽い段を持つ。

③ 底部は丸底であるが、底部径が小さく体部が直線的に外傾する器形であり、39・50・74の３点が相当する。

④ 底部の一部を欠損しているので断定出来ないが、丸底の底部から腰部で大きく上方に立ち上がる体部は、緩く内湾し僅かに外方へ開く器形を示し、丸底のコップ形に近い器形と言えよう。60の１点である。

次に平底の器形についてみると、丸底の器形と同様４種類の器形に細分することが出来る。

① 平底の底部から緩く内湾する体部が大きく外傾する器形であるが、37・41・43の３点が該当する。

② 51と57の器形であるが、基本的には①の器形と大差がないものの、体部中位付近から僅かに外傾度が強くなり、口縁部は直立気味に立ち上がる器形である。

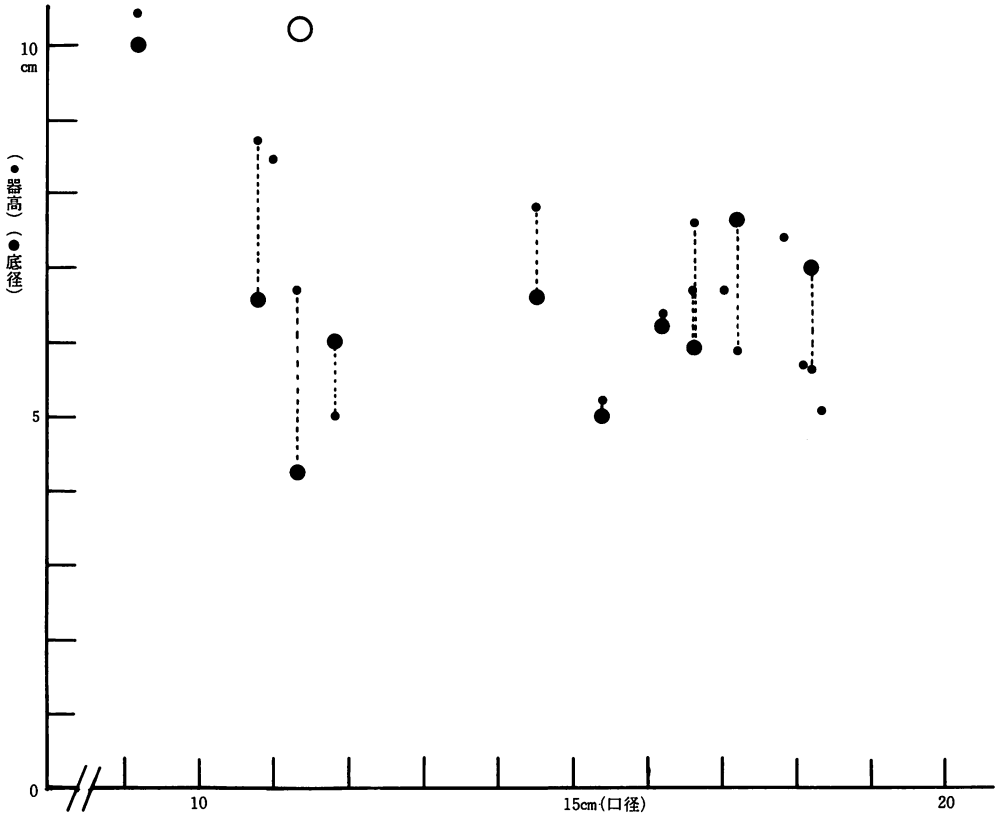
③ 57の１点だけ該当するが、底部から直立気味に立ち上がった体部は、次第に外湾・外傾す

る器形を示す個体である。

④　この器形は丸底の④形の平底形とでも言える器形であり、丸底と平底の違いを除けば大きな違いはない。コップ形の器形である。

以上丸底と平底に大別したが、底部形態以外の特徴にはそれほど大差は見られず、体部形態では共通部分も多い。例えば、丸底②と平底②の口縁部形態が近似するし、丸底③と平底①の体部形態がほぼ同じ形であるし、丸底④と平底④に至っては底部形態を除けばまったく同じ器形と言っても過言ではない。しかし、丸底①の器形はこの１点のみであり、この遺跡としては特異な器形と言えるのかも知れない。破片の出土で全体の不明な４点も口縁部形態を見るとこれまでの器形と違いは無いと言えよう。

このような器形が地域的な影響によるものか、時代的な特徴を示すのかのいずれかに起因する特徴と推定できるが、このことに付いては後述する。



第37図　坏の口径・器高・底径

＜調整技法＞

器面の調整は内面と外面に分けて検討することとする。

先ず最初に外面の調整であるが、最後の調整がヘラミガキの個体とヘラナデの個体を含み前者が主体である。ハケメを残す個体は37・41・50の３点と少なく、他の全ては精粗の違いはあるがヘラミガキ調整を主に部分的にヘラナデ調整されるのが一般的であり、ハケメ調整を残す個体もヘラミガキやヘラナデと併用されており、最初の調整は全てハケメで調整され、その後ヘラナデそしてヘラミガキと調整され仕上げられていく過程を看取することが出来る。また、部位ごとに調整技法を見ると、底部がヘラケズリされる４のほか、ハケメとヘラナデを併用する37・42・50・60以外は精粗の差はあるもののヘラミガキを主とした調整が見られる。体部もほぼ同様であるが、ヘラミガキ以外のハケメやヘラナデが見られるのは37・41・42・43・50・60の６点である。口縁部はヨコナデされる37・50を除くと全てヘラナデである。

内面の調整はヘラミガキされる個体が多く、特に内面黒色処理（以下、内黒処理と省略）される個体は全て底部から口縁部に向かう放射状のヘラミガキ調整が施される。また、内黒処理されない41～43・59・60の５点はヘラナデ調整される43と59、粗雑なヘラミガキの41、口縁部がヨコナデでその他の部分はヘラミガキされる42、ヘラナデとヘラミガキが併用される60などとバラツキが見られる。このように内黒処理の有無によって調整技法に違いの見られることは、使われ方に差のある可能性と器種が異なる可能性も考慮しなければならない。

＜他遺跡出土の類例資料＞

当遺跡出土の坏としては１点と特異な存在である第２号住居跡出土４の資料は、他の個体と比較しても内外ともに比較的丁寧なヘラミガキ調整が施され、二戸市堀野遺跡出土の皿形土器や同市上田面遺跡の坏ＡＩＩａ類、同市長瀬Ｃ・Ｄ遺跡№17遺物、軽米町叺屋敷Ｉａ遺跡126～128遺物、同町駒板遺跡のＩＩＧ46住居跡出土の中に類例を求めることが出来る。また、比較的調整が粗雑で底部が丸底となる前記の個体以外の形態は二戸市上田面遺跡Ｃ11住居跡３・４・５遺物を始めとするＢⅣａ類、軽米町駒板遺跡ＩＩＩ44-1・ⅢＡ・Ｇ45・ⅣＤ34の各住居跡出土の坏に類例が見られる。

底部が平底をなす器形は、調整までみれば二戸市上田面遺跡Ａ32住居跡ＢⅨ類、形態だけに限定すれば久慈市平沢Ｉ遺跡ＧＩＩ－１住居跡46遺物に類例がある。

(2) 甕

報告書に記載した56点の内16点が完形や図上で完形に復元出来た個体であるが、その他は一部だけを残す個体であるため全体的なことは不明である。ここでは所謂鍔形の口縁部を持つ一般的な器形の個体と、口縁部が直立する前者の器形と異なる鉢形や甑形に近い器形の個体を含

めて甕と分類したが、その器形や調整方法については第39・40図に集成し掲載した。集成図のなかに掲載された個体の器形や調整方法を観察すると、種々な特徴を備えた個体が含まれていることが分かり、以下では項目毎にそれらの特徴について記述することとする。

＜大きさ＞

器高は最大40cmから最小14cmまでみられるが、細分すると最大の40cm前後に10・11・29・61の4点が入り、次いで25cm以上30cm前後に21・23・24・26・44・45・54・62の8点が該当し、さらに15cm以上22cm前後に8・14・30・46・47・55・70～72の9点が相当する。これで見る限りは大型の個体は少なく中型や小型の30cm前後より小さい個体が主体を占めていることが分かる。しかし、小型の個体を検討すると口縁部が直立したり（70～72）直線的に外傾する（30・55）など甕というよりは鉢に近い器形の個体が多いことから見ると、当遺跡出土の甕の大きさは中型の個体が主であると言うことができよう。

口縁部径は最大が24cm超から最小12cmまで見られるが、15cm～19cmの範囲に大部分が分布する。口縁部径を底径で割った値は1.8～3.0の範囲に入るが、2.0と2.5の値に集中し、両者とも器高の平均はほぼ25cm位であり、2.0に近く器高の大なる個体と2.5に近く器高の小なる個体が鉢形に近い器形となる。

胴部最大径の位置が、頸部にある14・30・46・55・70～72の7点と、胴部の中・下位にある他の個体に大別できるが、その中でも31・32・63・73のように胴部が大きく膨らむ壺形に近い球胴形の器形も含まれている。

＜器　形＞

器形を観察すると口縁部の外反程度、胴部最大径の位置、底部の状態などに色々な形があり、その特徴によって分類すると次のようになる。

① 頸部が僅かに窄んで口縁部が大きく外反するが口縁端部が直立気味をなし、胴部は頸部や頸部直下に最大径をもつほとんど脹らみのない所謂長胴形となる器形を示す個体で、10・11・24・54・61が該当し、器高の項で触れた当遺跡出土の甕の中ではもっとも器高の高い個体がほぼ該当し、さらに中型の一部に見られる。

② 頸部が大きく窄み口縁部が強く外反することは前者と同じであるが、口縁端部が直線的に外傾する個体と直立気味になる個体の両者がある。胴部は前者に比較すると大きく脹らみ最大径を肩部や中位に持つ特徴があり、21・26・44の3点が該当する。器高の分類と対比させると、器高25cm位の中型の一部がこの器形をなしている。

③ 全体的な器形は①の器形に近いが、頸部から口縁部の器形にやや違いのある器形である。①と違う部分は、頸部の窄まりがほとんどないか僅かの窄みで、口縁部の外反が小さいことである。胴部の脹らみは①のようにほとんどない器形と、②のように中位に最大径を持つ二

種類の器形があり、8・14・23・29・45・46・62の7点が相当する。器高との比較では大型と中型の他に小型の個体も多く該当する。

④ 頸部がまったく窄まない器形であるが、口縁部が直線的に外傾する個体、やや外反する個体、直立気味で軽く内湾する個体の三種類の器形を含むが、胴部最大径が頸部にある共通点を持ち、30・55・70〜72の5点が相当する。器高との比較では小型に限定され、器種が甕ではなく鉢の可能性がある。

⑤ 胴部最大径が中位にあり、一般的に球胴形の甕といわれる器形であるが、31・63・73の3点が該当するものの、いずれも完形ではないため全体的なことは不明である。

器形では以上のように分類することができるものの、これらが単独で出土した例はなく、いずれの住居跡もこれらの何種類かが共伴して出土する場合が多い。

＜底部形態＞

ここで言う底部形態とは、平面的な底面形状ではなく、側面から見た立体的な形状についてである。

胴部下位から窄まって底部に接続するが、もっとも窄まった位置が体部下位と底部の接続部にあるか、底面にあるか、もしくは体部下位と底面が同じと言う違いが見られる。前者の典型が26・44・55・61等であり、底面部が周辺に大きく突出し当遺跡出土の甕としてはもっとも多い底部形態である。中者は少なく8・14・71等がその典型であるし、後者は21・23・54が該当するがもっとも少ない。

このように底部形態に差のあることは事実であるが、何に起因するのかは必ずしも明らかでない。器形や器高などによって底部形態の違いに影響を及ぼしているのか、時期差を示すものかは今後の検討課題としたい。

＜調整技法＞

器面調整を観察すると、個体差がほとんど無くヘラナデ、ヨコナデ、ヘラミガキによる調整がみられる。しかし、詳細に観察すると個体や部位によって若干の差が観察されることから、部位毎に調整を観察すると以下のようになる。

口縁部の調整は、内外面ともヨコナデとする個体（12・14・30・44・45)、内面がヨコナデで外面をヘラミガキする個体（8・10・11・61・62)、内外面ともヘラナデをする個体（23・24・26・70〜72)、内面がヘラナデで外面をヨコナデにする個体（46)、内外面ともヘラミガキの個体（21)、内面がヘラナデで外面がヘラミガキの個体（29）等種々の調整がみられ、詳細に観察すると個体差が比較的大きいことが分かる。

胴部の調整は口縁部よりも個体差が小さい。まず、内面に限定して観察すると、15・21・46・62には僅かにハケメが残存しており、その他の個体は全てヘラナデによる調整であり、最終的

には単位は定かでないがヘラミガキが混在している。外面の調整は一部にハケメを残す個体（21・24)、ヘラナデの個体（23・45・70〜72)、ヘラミガキする個体（8・11・14・26・29・30・46）などがあるものの、厳密に観察すると全ての個体に全ての調整痕が部分的に残存しており、実測図上に表現された調整技法はその主体をなす技法ということになる。少なくともいずれの調整痕も部分的にしか観察されないことは、仕上がりまでには何段階かの手順を経ていることを示すものであろう。おそらく、その手順は最初に余分な土をかきとった際のハケメが付着し、次いで箆で撫でて平らにした時のヘラナデの跡がつき、最後に箆で磨いた際のヘラミガキが残るからであり、その精粗が残存した調整痕の残存量に影響を及ぼしていると理解できよう。

＜他遺跡出土の類例資料＞

以上のような特徴を持つ類例は、県北部の同時期の遺跡に多くの例が報告されている。以下ではその様相について記し、次項の遺跡の時期を考える一助にしたい。

11と61の器形①のように頸部の窄みが大きく長胴形の器形は軽米町駒板遺跡などに多くの例が見られるし、底部の周囲が突出する器形は同遺跡II G46住居跡№3、二戸市上田面遺跡C02住居跡№2を含むA II d類がある。器形②の類例は多くの遺跡で出土例があり、野田村古館山遺跡第7号住居跡出土遺物・二戸市上田面遺跡C03住居跡№3 s、同遺跡B40住居跡№5のE III類、軽米町駒板遺跡II I 44-1住居跡№5と同遺跡IV D34住居跡№6やIV E37住居跡の№5及びII G41住居跡№4遺物などがその例と言えよう。

(3) 所属時期（まとめにかえて）

以上前項で各器種毎にその特徴を分析し他遺跡の出土例を示したが、本項ではそれらを参考にして遺物の所属時期の検討をし、さらに一歩進んで集落の時期について考えることとする。

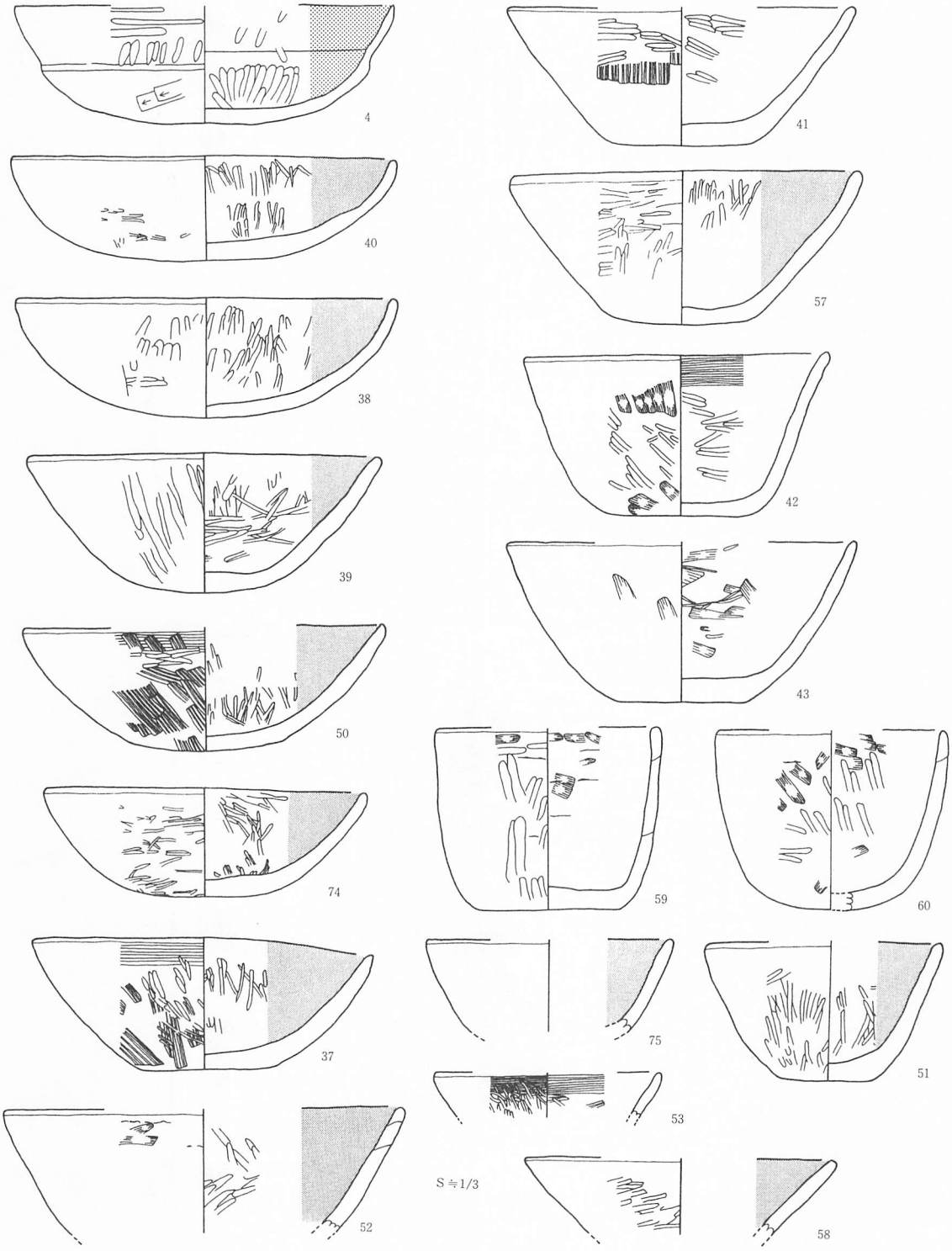
当遺跡出土の土師器類は全てロクロ不使用成形の個体だけであるが、このような成形の土師器を出土した県北部の遺跡に二戸市上田面遺跡、同市長瀬遺跡群、同市堀野遺跡、軽米町駒板遺跡、同町叺屋敷I a遺跡、久慈市平沢I遺跡、野田村古館山遺跡等があり、以下ではその類例と比較し、位置づけを示すことにしたい。

県北部でも調査例の多い二戸地域で土師器の編年作業が進んでおり、堀野遺跡―上田面遺跡―長瀬遺跡群―中曾根遺跡―福田遺跡の順に新しくなり、実年代では7世紀後半―8世紀前半―8世紀後半―8世紀末葉が想定され、第I〜IV期に細分されている(関　1983)。このような編年観は各器種の器形変化を基にしているが、坏の場合は大型の有段丸底から小型化し、底部は平底風から平底になる。甕は胴部中位に胴部最大径を持ち底部が突出する器形から、胴部が

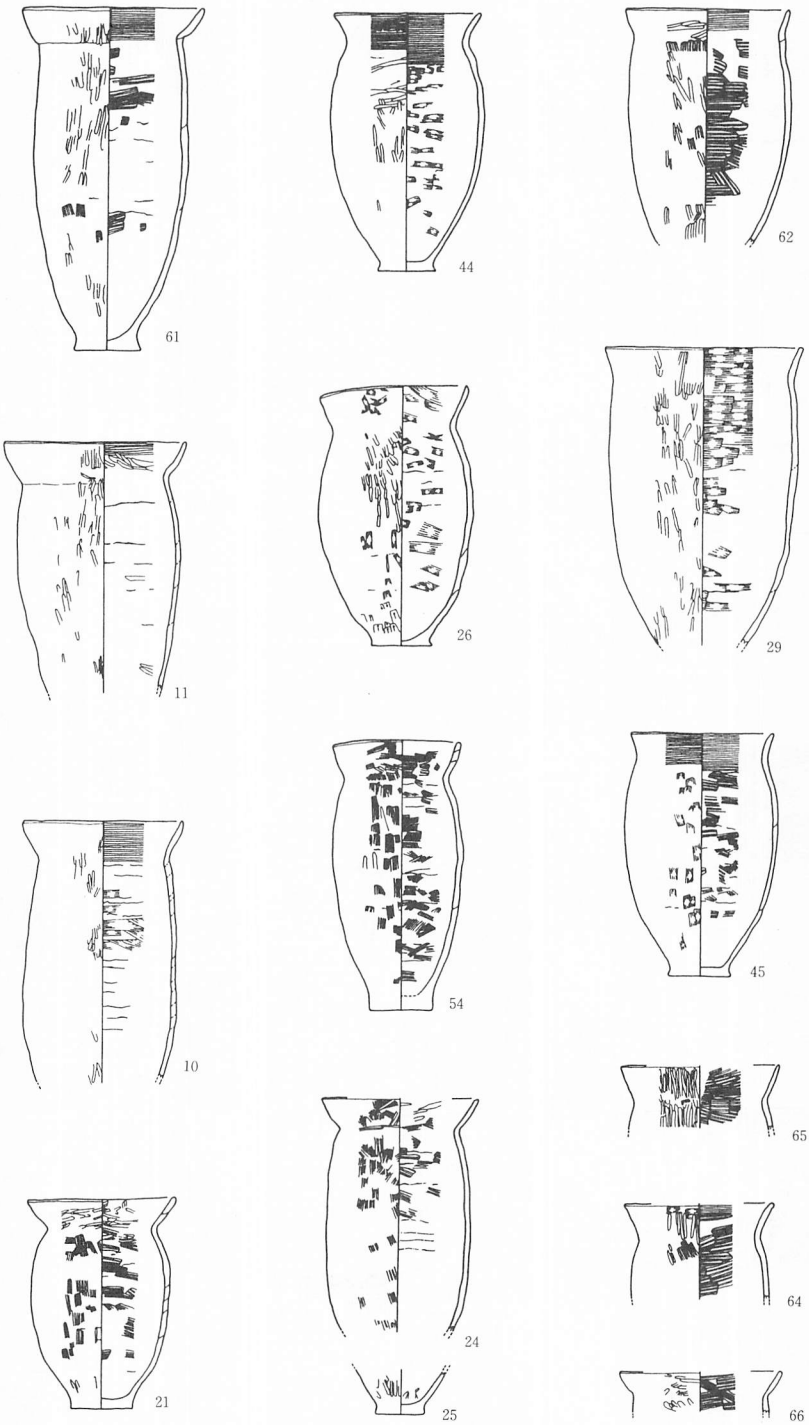
細くなって長胴形になり底部の突出が無くなる。

当遺跡出土土師器の特徴と近似した土師器の出土遺跡では、軽米町駒板遺跡は若干古い要素を窺えるとしながらも二戸市長瀬遺跡群に対比させ、軽米町叺屋敷Ⅰａ遺跡の場合は坏の特徴から奈良時代初頭に位置づけている。また、久慈市平沢Ⅰ遺跡では古墳時代から奈良時代とし、野田村古館山遺跡の場合は8・54・55類似の器形を8世紀中葉としている。この地域で最古段階の土師器群とされる二戸市堀野遺跡と上田面遺跡第Ⅰ期の土師器群は、7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられ、これらを総合すると当遺跡出土の土師器群は7世紀後半から8世紀末葉の時間幅に該当することは明らかであろう。そうした中で当遺跡の土師器群ともっとも近似した類例を探すと軽米町駒板遺跡の土師器群と言えようが、一部は二戸市長瀬遺跡群の土師器群にも酷似しており、時期的に近い可能性も考えられる。当遺跡の土師器群は先の第Ⅰ期より後出することもまた事実であろうから、それらを総合すると8世紀代それも中期を中心とした時期の土師器群と理解することは大過無いと言えよう。しかし、既述のように2遺跡例に近似することは、2時期にまたがる土師器群であることを示す可能性もある。

以上他遺跡の類例と対比し当遺跡出土の土師器群を二戸市長瀬遺跡群と軽米町駒板遺跡出土の例に近いと判断し、8世紀中頃を中心とする時期と推定し、さらに2時期に細分される可能性も触れたが、集落もこの時期に相当すると考えている。しかし、当遺跡では検出された住居跡も少数であり、遺跡全体を把握していないことにも留意する必要がある。遺物も同様に、量的に少ないばかりではなく器種も高坏・鉢・甑といった器種の出土がないことは、地域的な状況か時期的な特徴かが定かでないため、今後当地域での調査例が増加した段階に改めて検討することにしたい。



第38図　出土土師器・坏集成図



第39図　出土土師器・甕集成図（1）

第40図　出土土師器・甕集成図（2）

参考文献

相原康二他（1983）：「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」

青森県　（1984）：『売場遺跡』３次・４次発掘調査報告書　青森県教育委員会

青森県　（1988）：『表館Ⅰ遺跡』青森県教育委員会

青森市　（1979）：『蛍沢遺跡』発掘調査団

甘粕健他　（1977）：「地方史マニュアル６」考古資料の見方《遺物編》柏書房

岩崎卓也他（1984）：「考古学調査研究ハンドブック」『２　室内編』雄山閣

岩手県　（1971）：「一戸」北上山系開発地域土地分類基本調査

宇部則保　（1988）：『田面木遺跡』青森県八戸市埋蔵文化財調査報告書第28集　八戸市教育委員会

宇部則保他（1989）：『田面木平(1)遺跡』青森県八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集　八戸市教育委員会

馬目順一　（1986）：「東北地方の弥生土器」『弥生文化の研究』３　佐原眞他雄山閣

遠藤勝博　（1981）：『二戸バイパス関連遺跡(2)』岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集

小笠原善範（1987）：『田面木遺跡』青森県八戸市埋蔵文化財調査報告書第22集　八戸市教育委員会

加藤晋平他（1980）：『図録石器の基礎知識Ⅰ』柏書房

加藤晋平他（1983）：「７道具と技術」『縄文文化の研究』雄山閣

斎藤邦雄　（1987）：『古館山』昭和45年三日市場遺跡調査報告書（遺物編）野田村教育委員会

佐原　眞他（1985）：「５・６道具と技術Ⅰ・Ⅱ」『弥生文化の研究』雄山閣

小林達雄他（1989）：「縄文土器の編年」『縄文土器大観Ⅰ』講談社

小平忠孝他（1983）：『叺屋敷Ⅰａ遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第61集

草間俊一　（1965）：『堀野遺跡』岩手県福岡町（現二戸市）教育委員会

嶋　千秋他（1981）：『江刺家遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第70集

白鳥文雄　（1981）：「銅屋(3)遺跡」『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第71集　青森県教育委員会

鈴木恵治　（1986）：『駒板遺跡』㈶岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第98集

鈴木道之助（1981）：『図録石器の基礎知識Ⅱ』柏書房

関　　豊　（1981）：『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会

関　　豊　（1982）：『馬渕川上流域を中心とする岩手県北部の古代土器の様相』岩手考古学会資料

関　　豊　（1982）：『堀野遺跡緊急発掘調査報告書』二戸市教育委員会

関　　豊　（1983）：『駒焼場遺跡緊急発掘調査報告書』二戸市教育委員会

高田和徳　（1979）：『一戸バイパス関係遺跡Ⅰ』岩手県一戸町文化財調査報告書第２集　一戸町教育委員会

高田和徳　（1979）：『一戸バイパス関係遺跡Ⅱ』岩手県一戸町文化財調査報告書第３集　一戸町教育委員会

高田和徳　（1979）：『一戸バイパス関係遺跡Ⅲ』岩手県一戸町文化財調査報告書第４集　一戸町教育委員会

高橋信雄　（1982）：『岩手の土器―古代―』岩手県立博物館

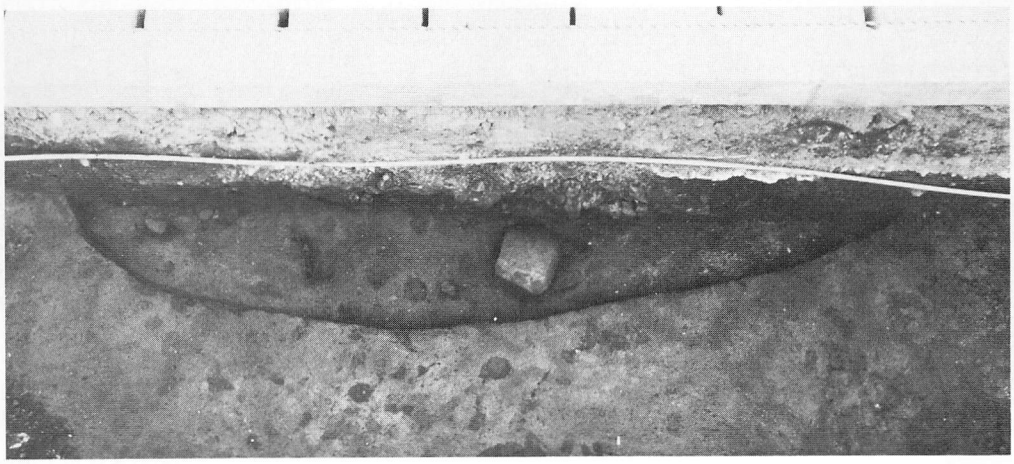
高橋與右衛門（1983）：『上里遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集

丹羽　茂　（1989）：「中期大木式土器様式」『縄文土器大観Ⅰ』講談社

藤村敏男他（1979）：「遺物について」『卯遠坂遺跡』東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書Ⅰ　岩手県教育委

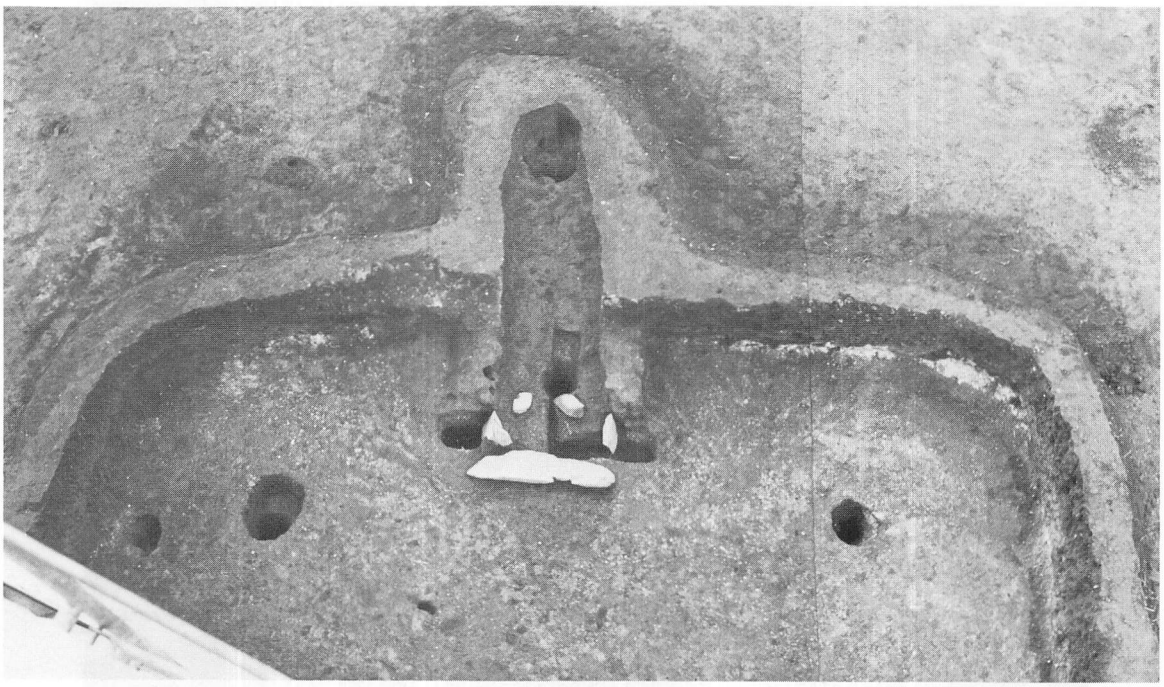
員会
本沢慎輔他（1981）：『二戸バイパス関連遺跡(1)』岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集
宮城県　（1978）：『上深沢遺跡』東北縦貫自動車道関係遺跡報告書Ⅰ　宮城県教育委員会
目黒吉明　（1982）：「住居の炉」『縄文文化の研究』８雄山閣
森　浩一他（1989）：「２木と土と石の文化旧石器～縄文後期」『図説日本の古代』中央公論社

遺跡全景（昨年度調査区は埋戻されている）

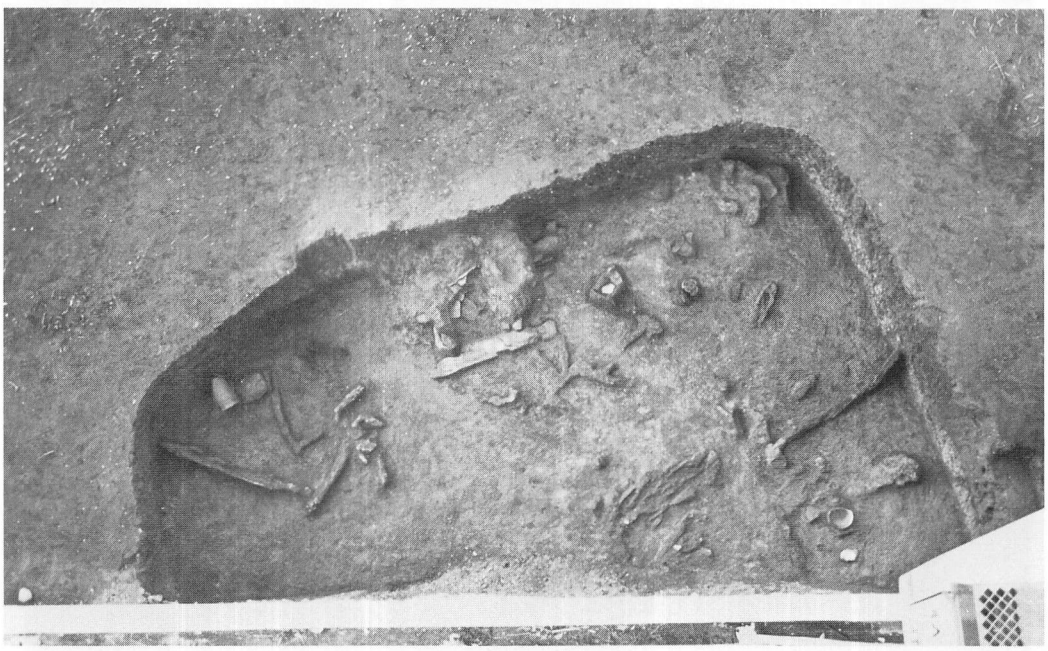


第１号住居跡

写真図版１　遺跡全景・第１号住居跡

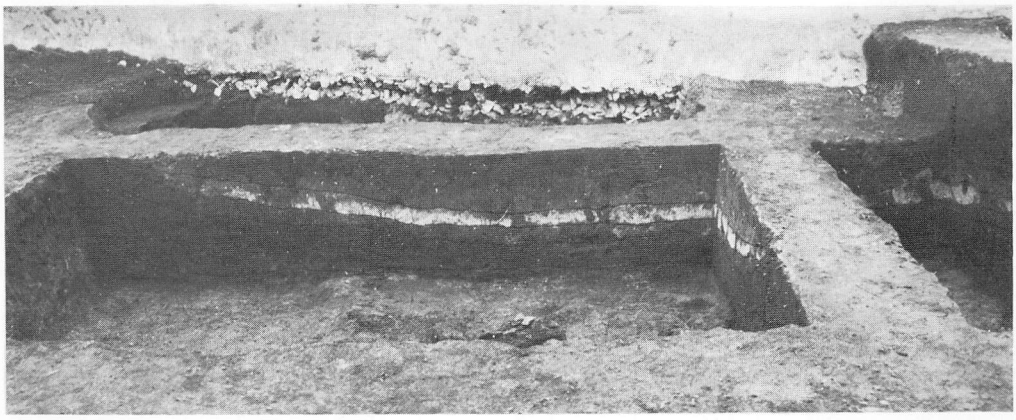


第２号住居跡（北半部）

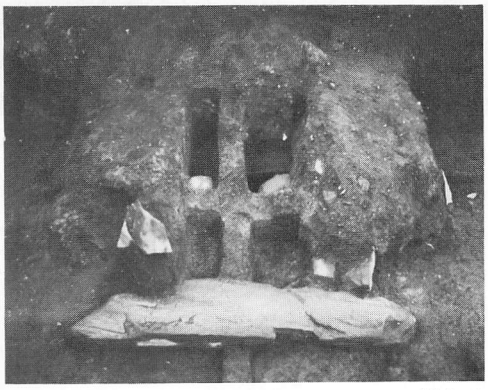


炭化材および出土遺物

写真図版２　第２号住居跡

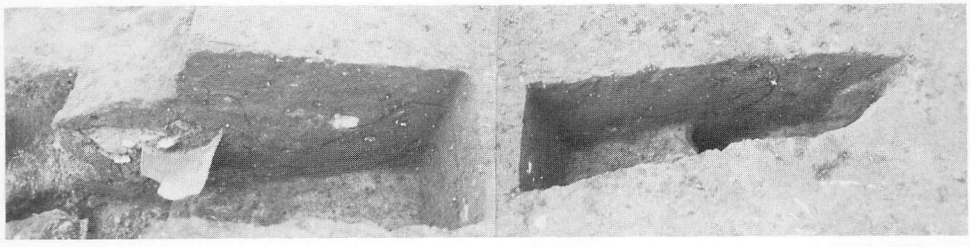


住居跡埋土（東西断面）



カマド（横断面）

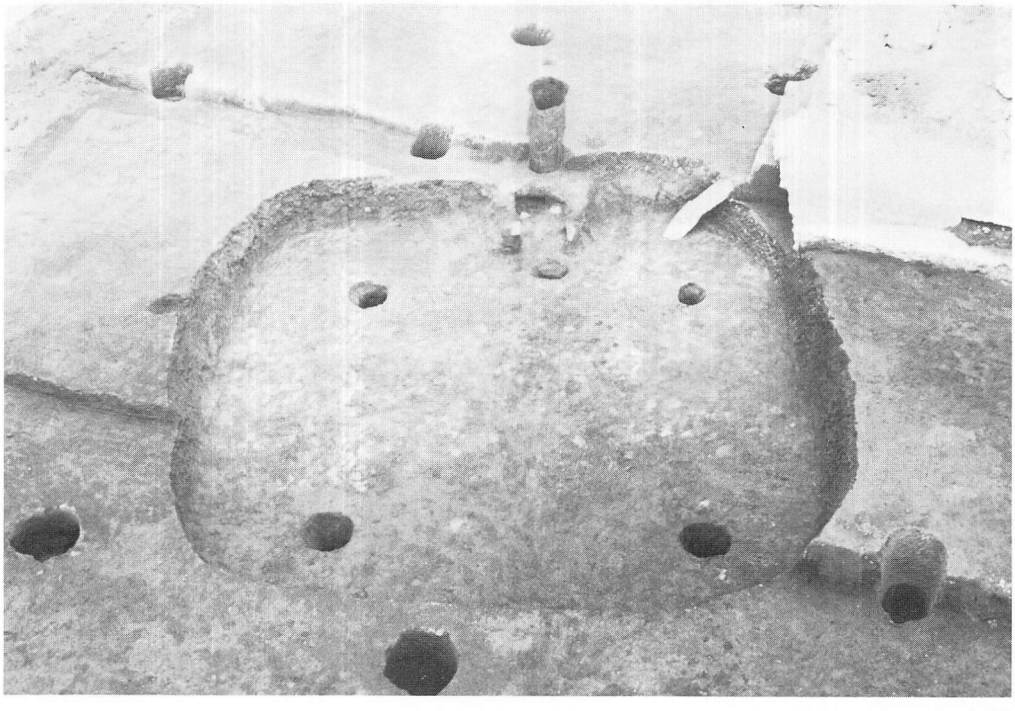
カマド（完掘）



煙道部（縦断面）

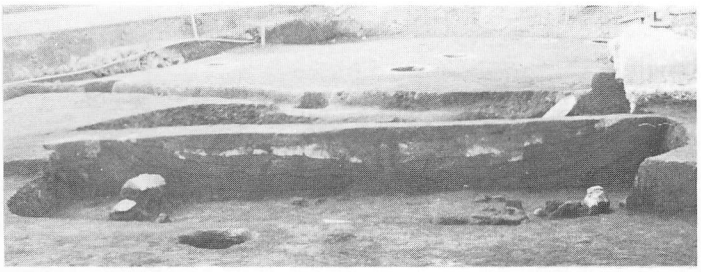
写真図版３　第２号住居跡埋土・カマド

炭化材等出土状況



全景

写真図版 4　第 3 号住居跡



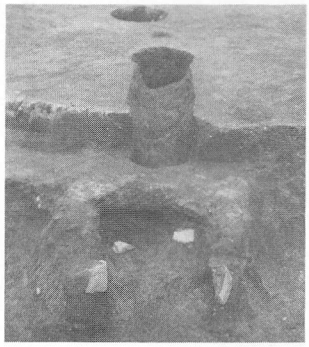
東西埋土断面

カマド検出状況

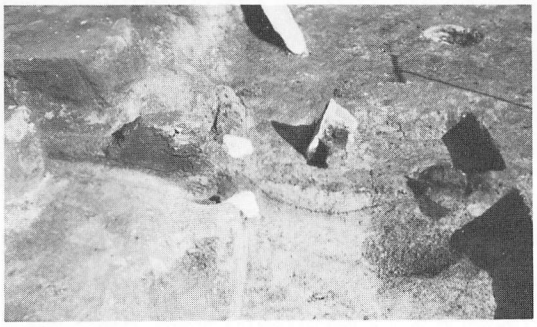
南北埋土断面

カマド断割

カマド縦断面



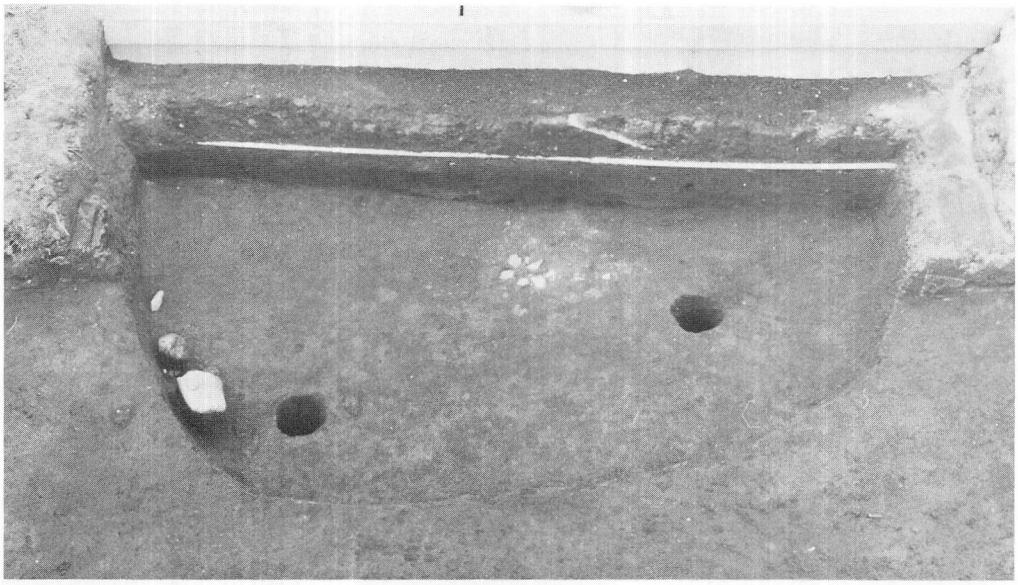
完掘状況



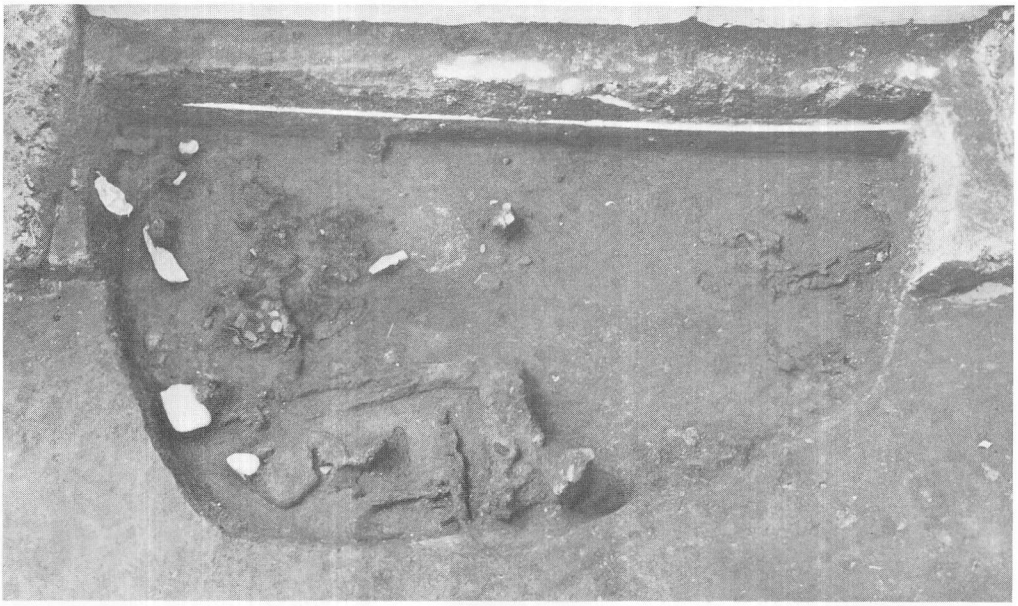
最終断割

カマド袖断面

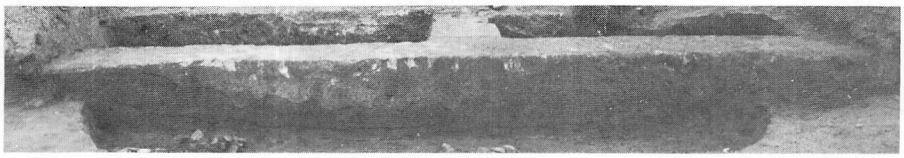
写真図版５　第３号住居跡



全景

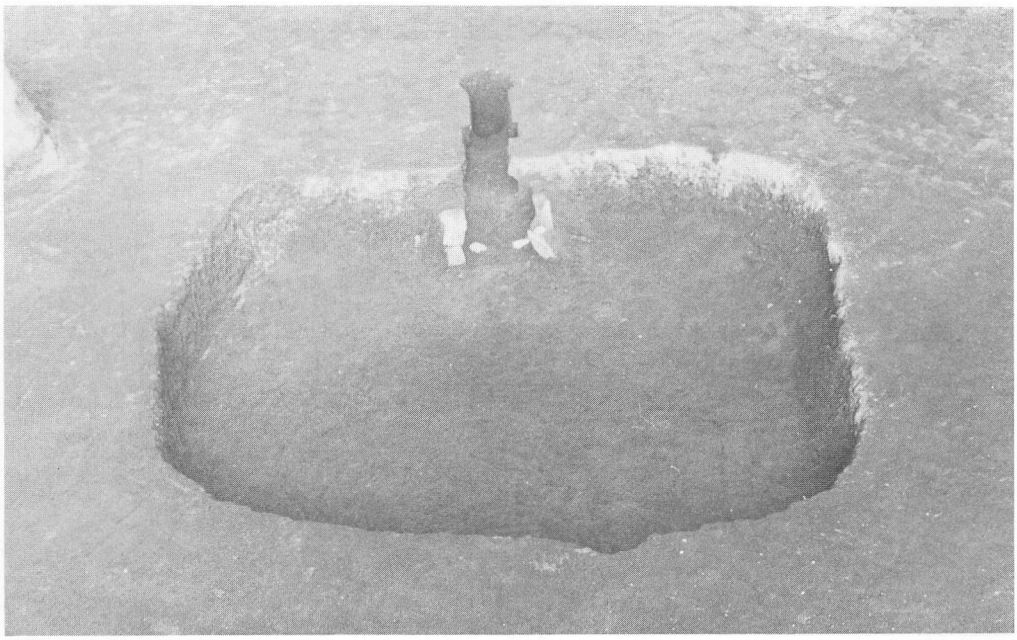


炭化材等出土状況

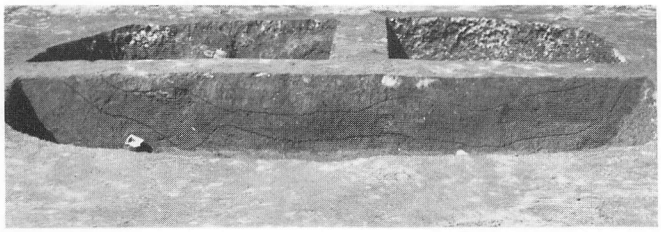


南北埋土断面

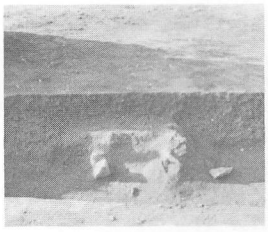
写真図版 6　第 4 号住居跡



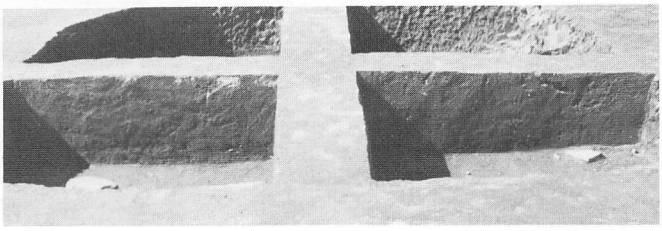
全景



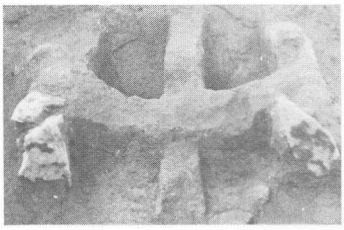
東西埋土断面



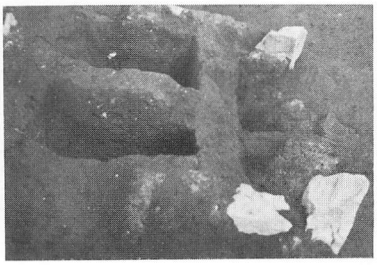
検出状況



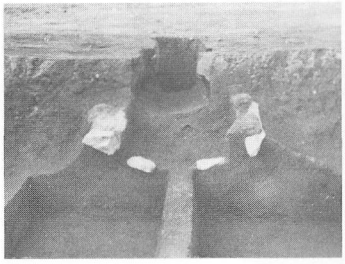
南北埋土断面



カマド横断面

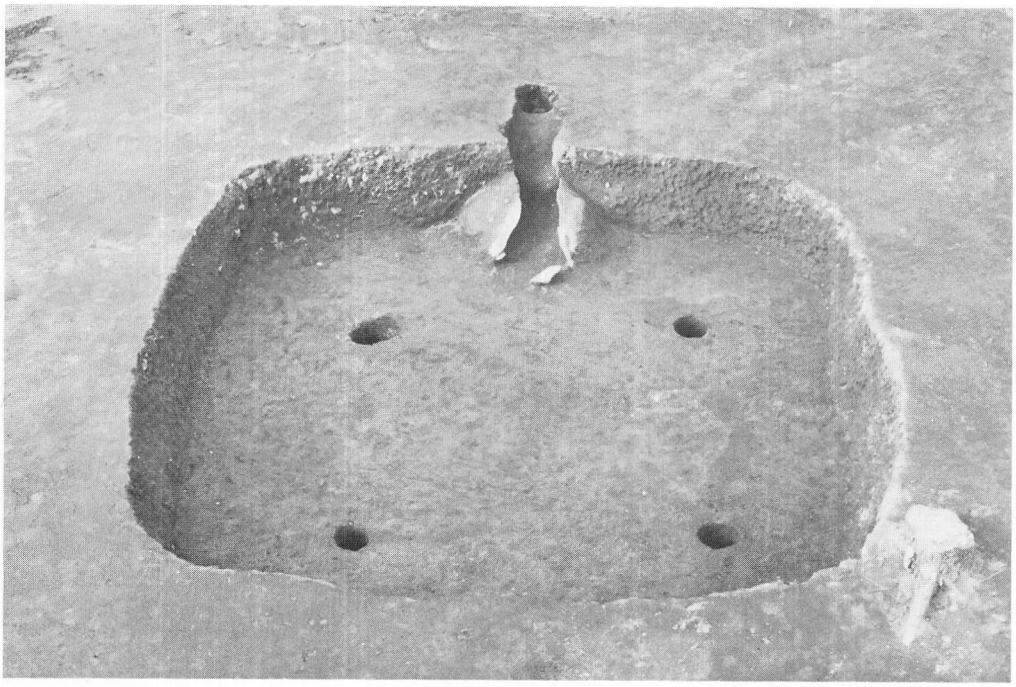


カマド燃焼部縦断面

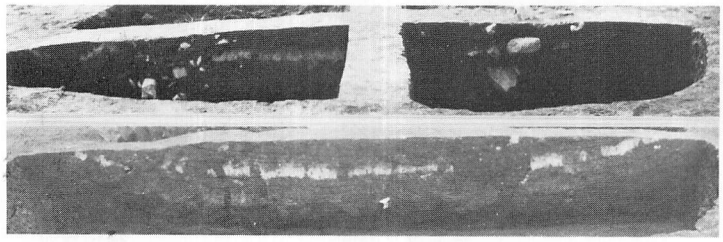


カマド最終断割

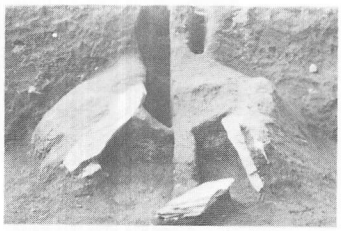
写真図版７　第５号住居跡



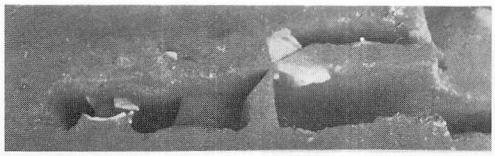
全景

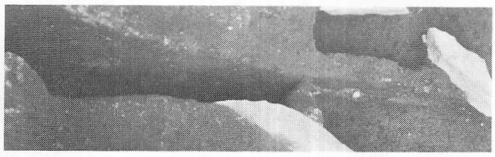


埋土断面（上は南北・下は東西）

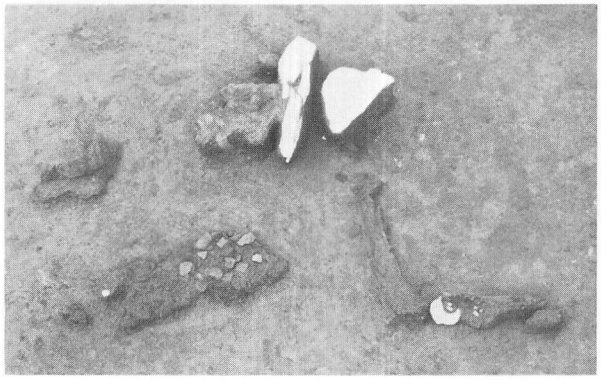


燃焼部精査

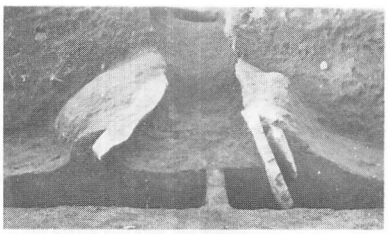




カマド縦断割面

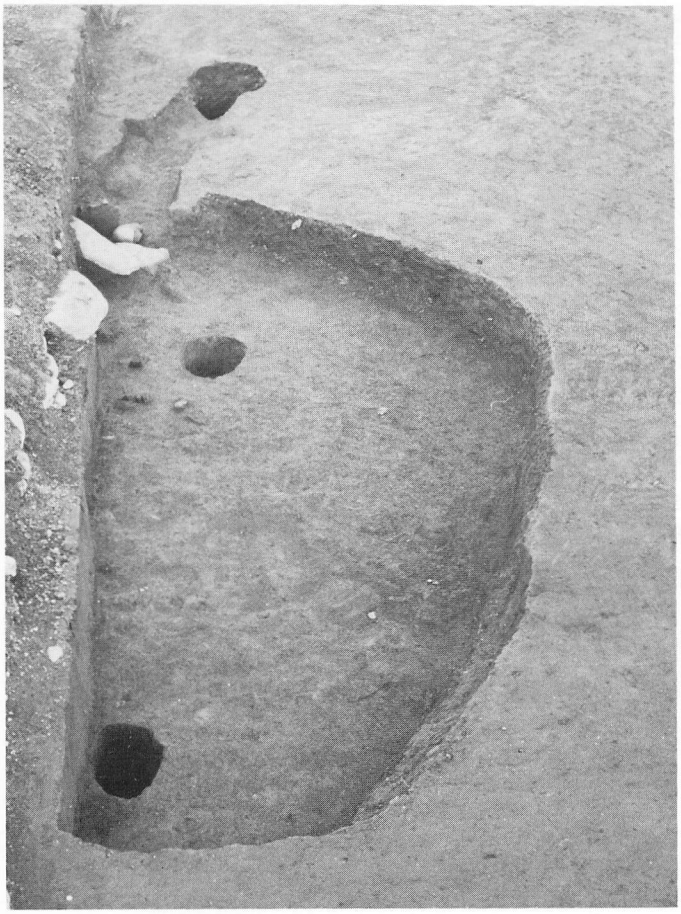


遺物出土状況



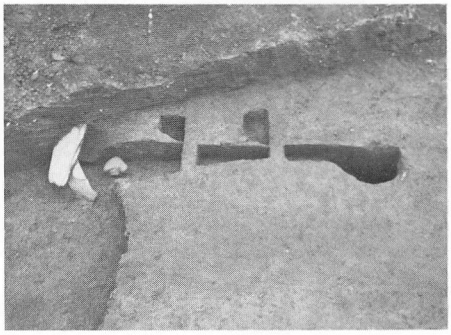
最終袖断割

写真図版８　第６号住居跡

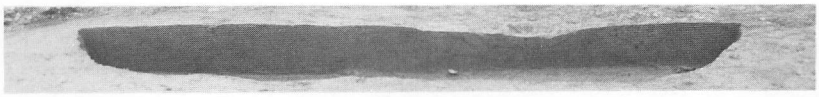


全景

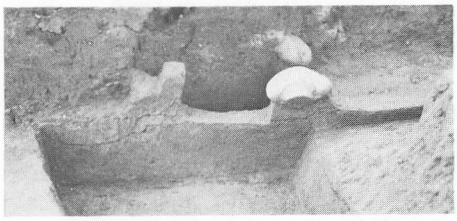
煙道部横断面



煙道部縦断面



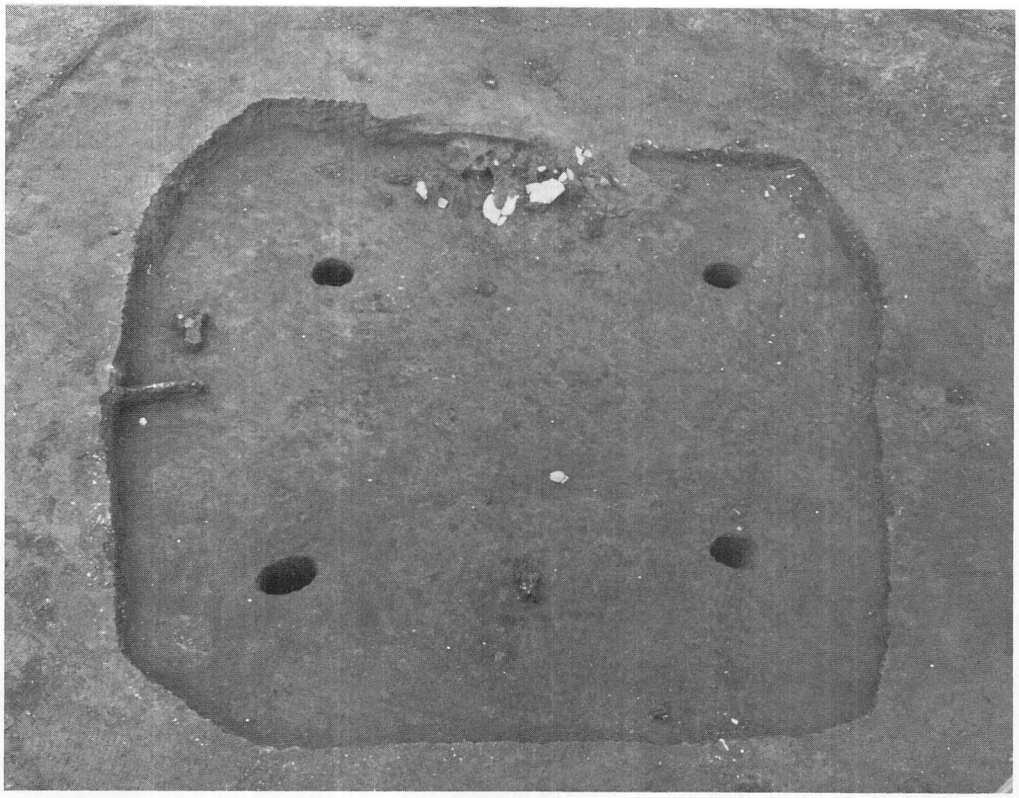
埋土南北断面



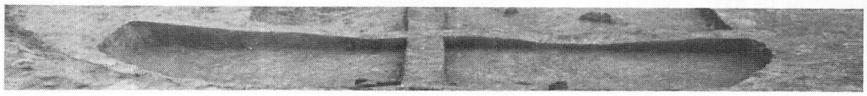
燃焼部最終断割

遺物出土状況

写真図版 9　第 7 号住居跡

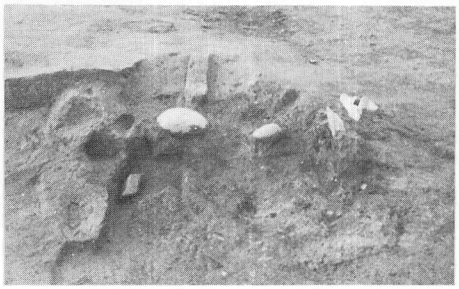


全景

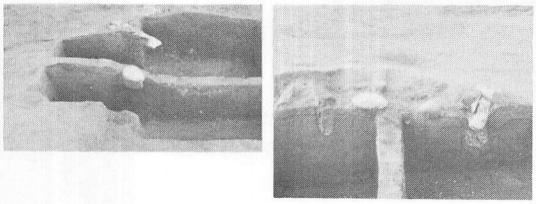


埋土南北断面

カマド付近の遺物出土状況

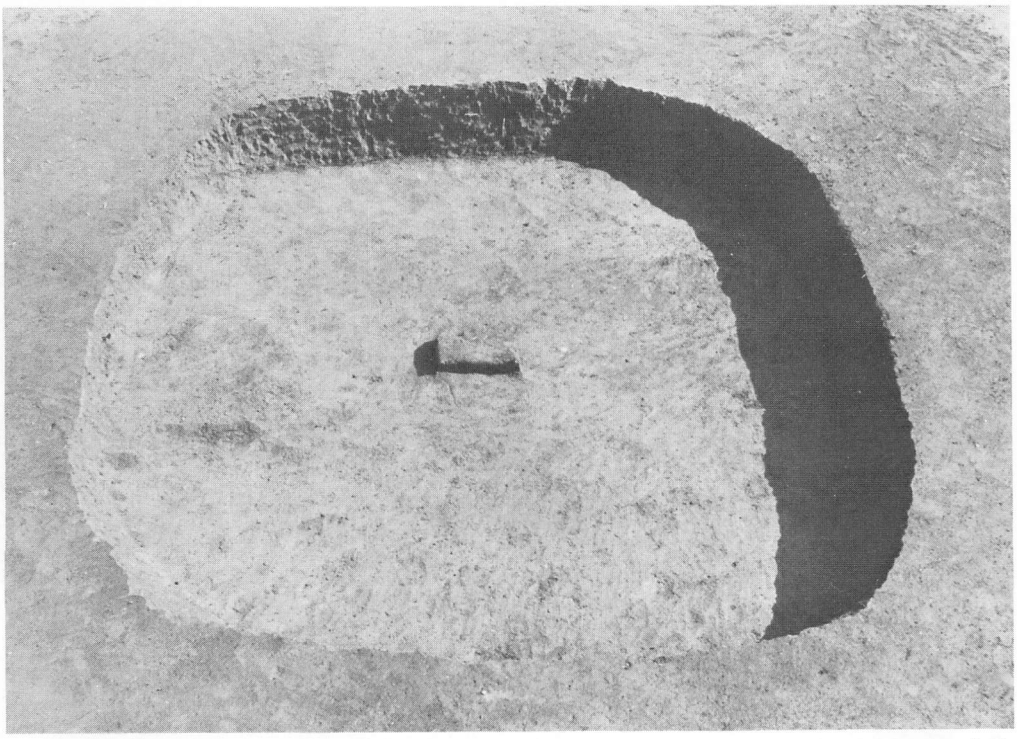


カマド精査

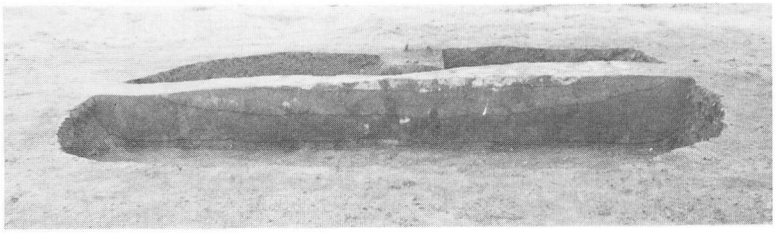


カマド最終断割

写真図版10　第８号住居跡

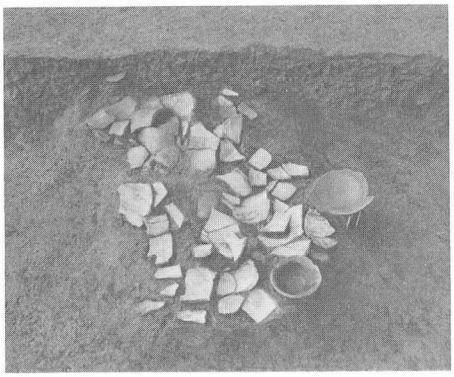


全景

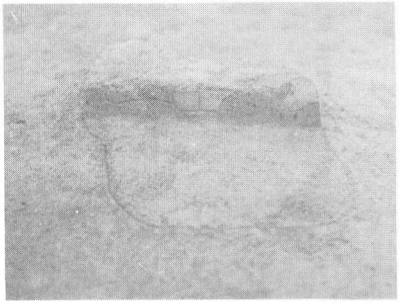


埋土東西断面

床面焼土

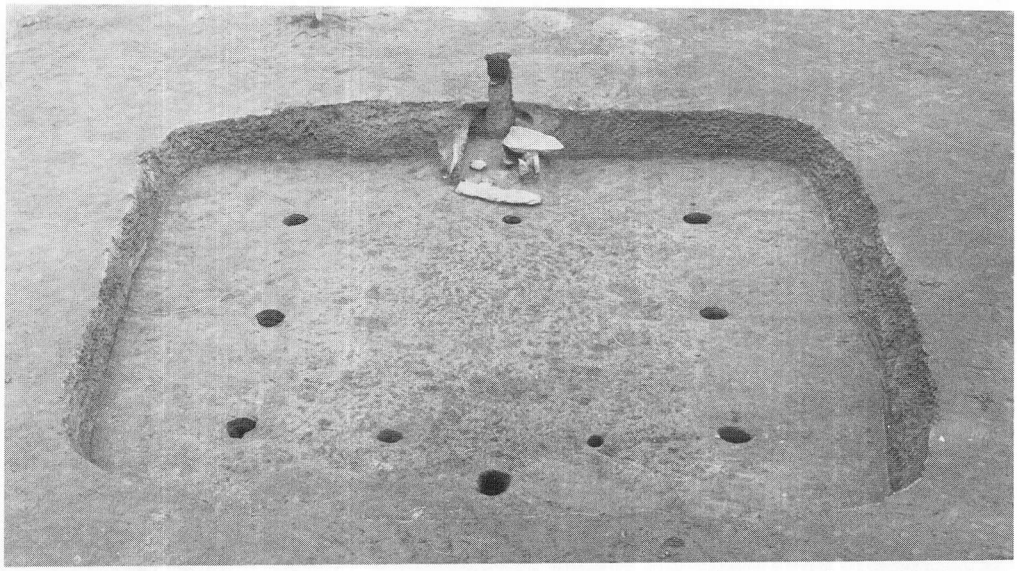


遺物出土状況

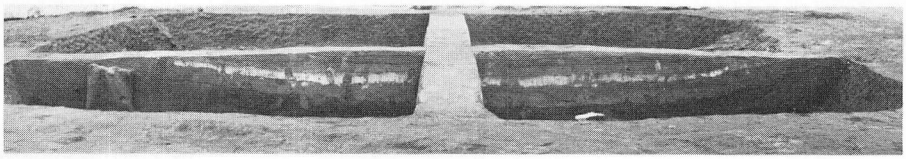


焼土断面

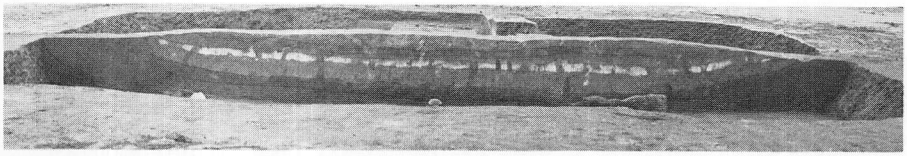
写真図版11　第9号住居跡



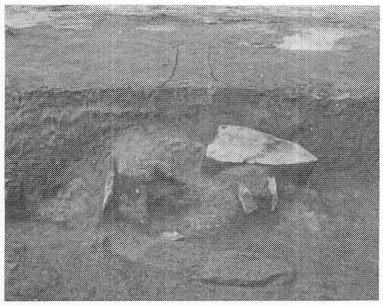
全景（床面の土間部分が識別出来る）



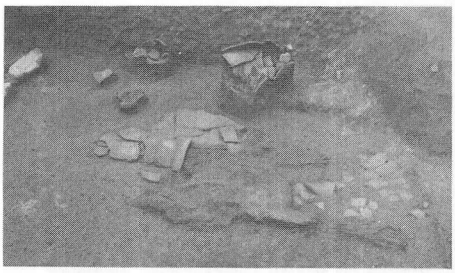
埋土南北断面



埋土東西断面

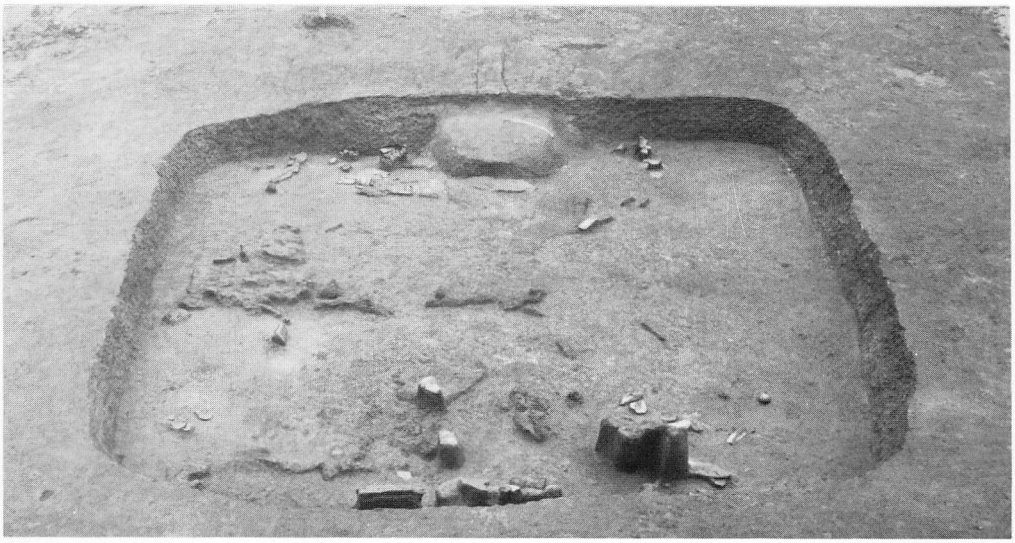


カマド精査状況



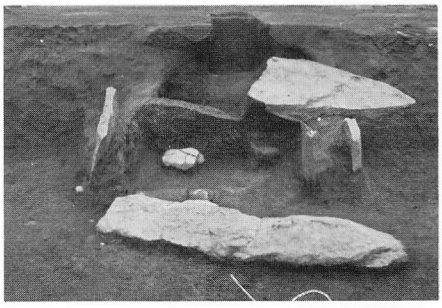
カマド左側の遺物出土状況

写真図版12　第10号住居跡

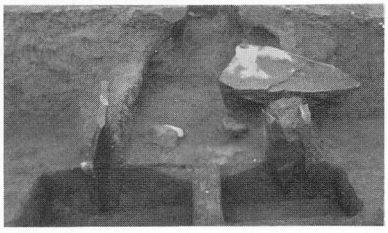


炭化材等の出土状況

カマド縦断面

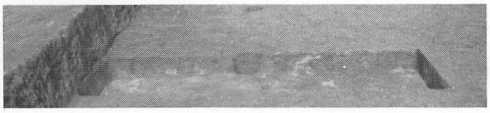


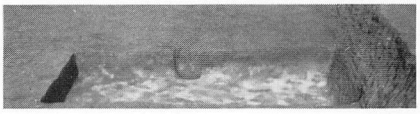
カマド横断面



最終横断割

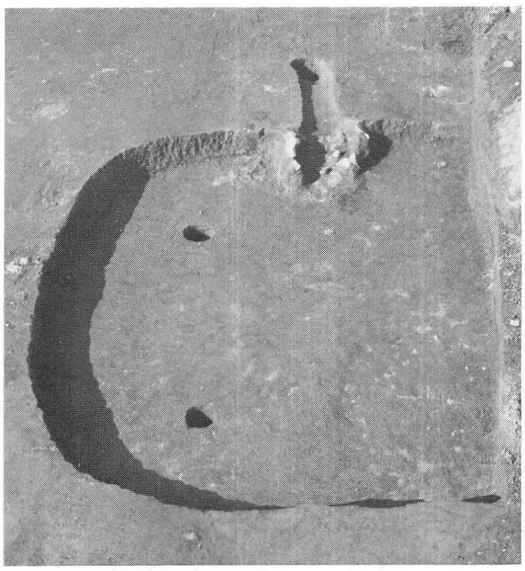
最終縦断割





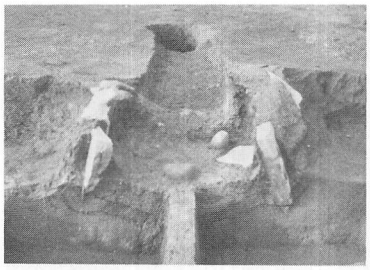
床面壁際までの土層観察（土間部分は薄い節囲で締っている）

写真図版13　第10号住居跡

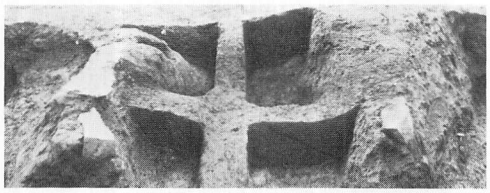


全景

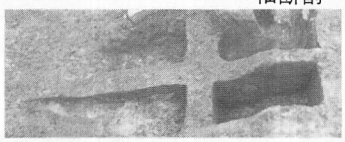
炭化材等出土状況



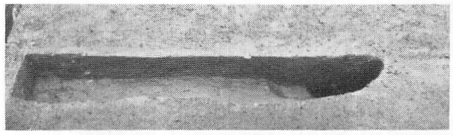
袖断割



カマド埋土横断面

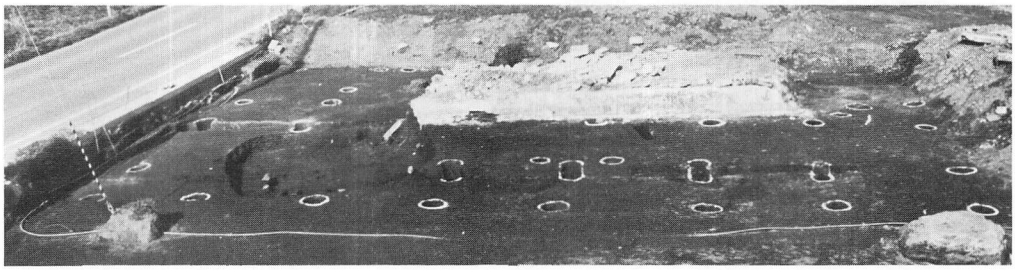


カマド縦断面



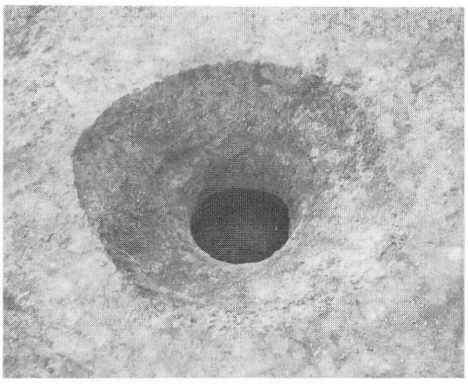
煙道部縦断面

住居跡埋土南北断面

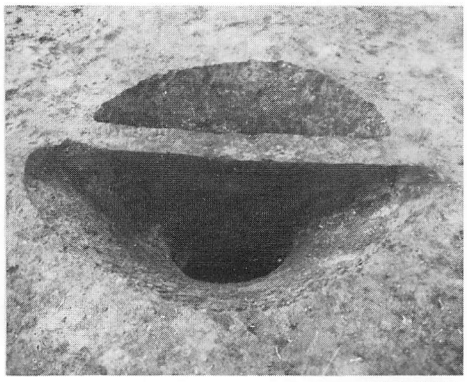


近世の建物跡

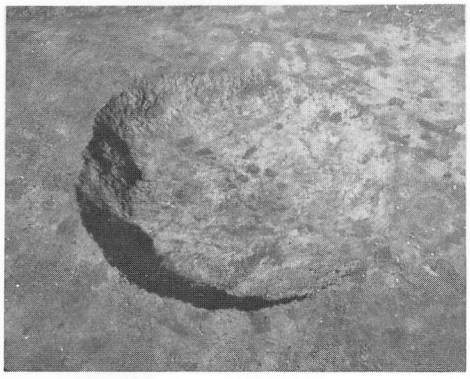
写真図版14　第11号住居跡ほか



第１号土坑

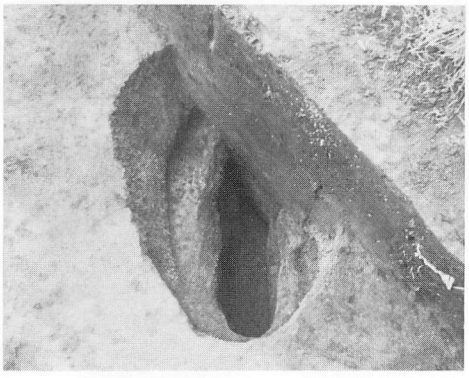


同左断面

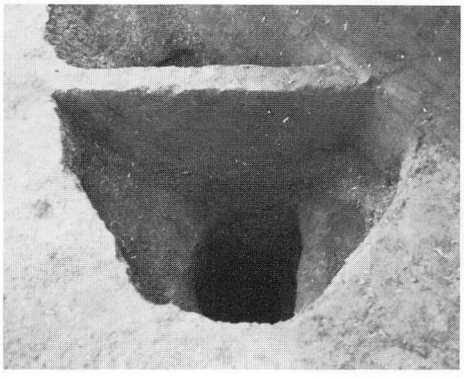


第２号土坑

同左断面

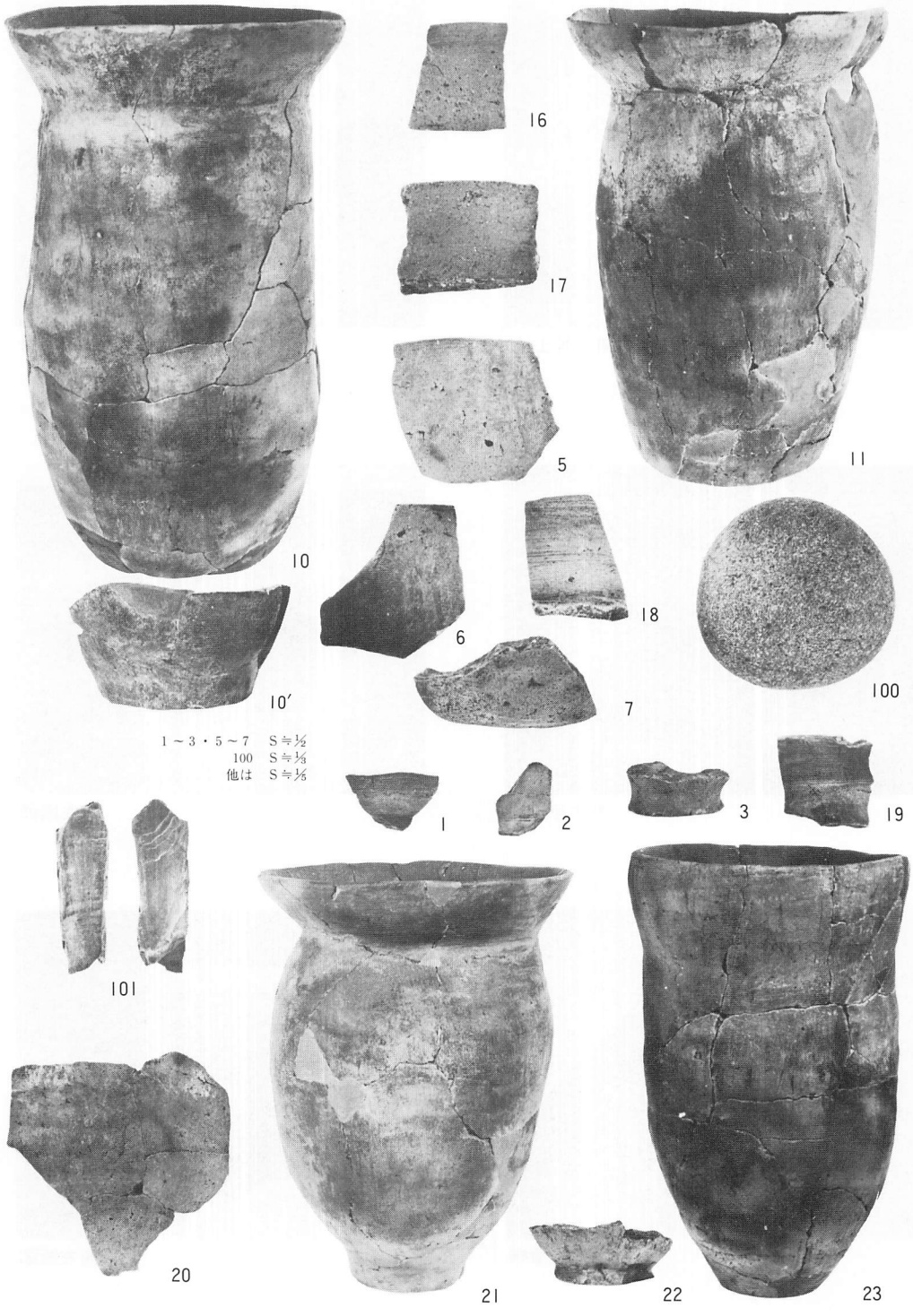


陥し穴状遺構

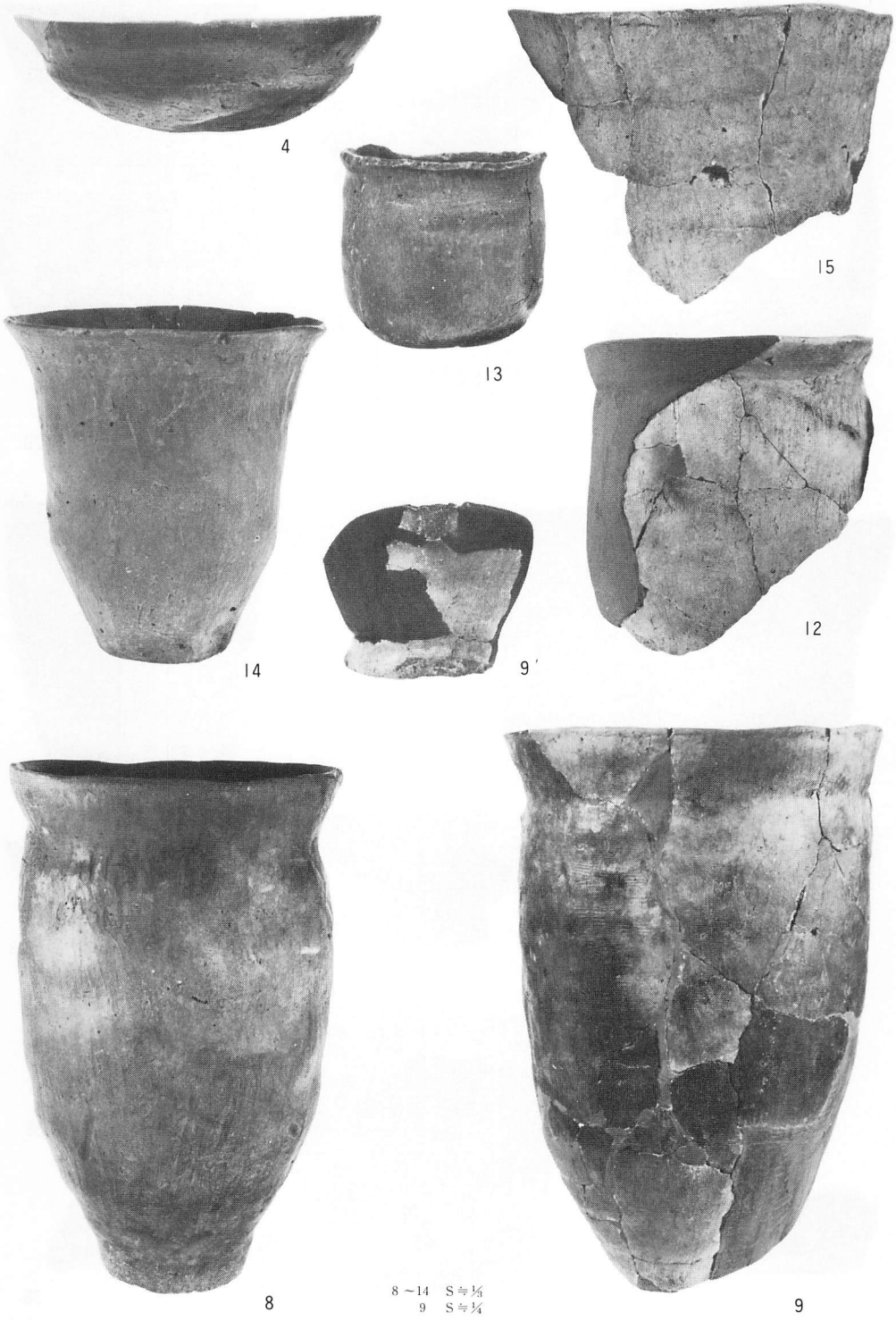


同左断面

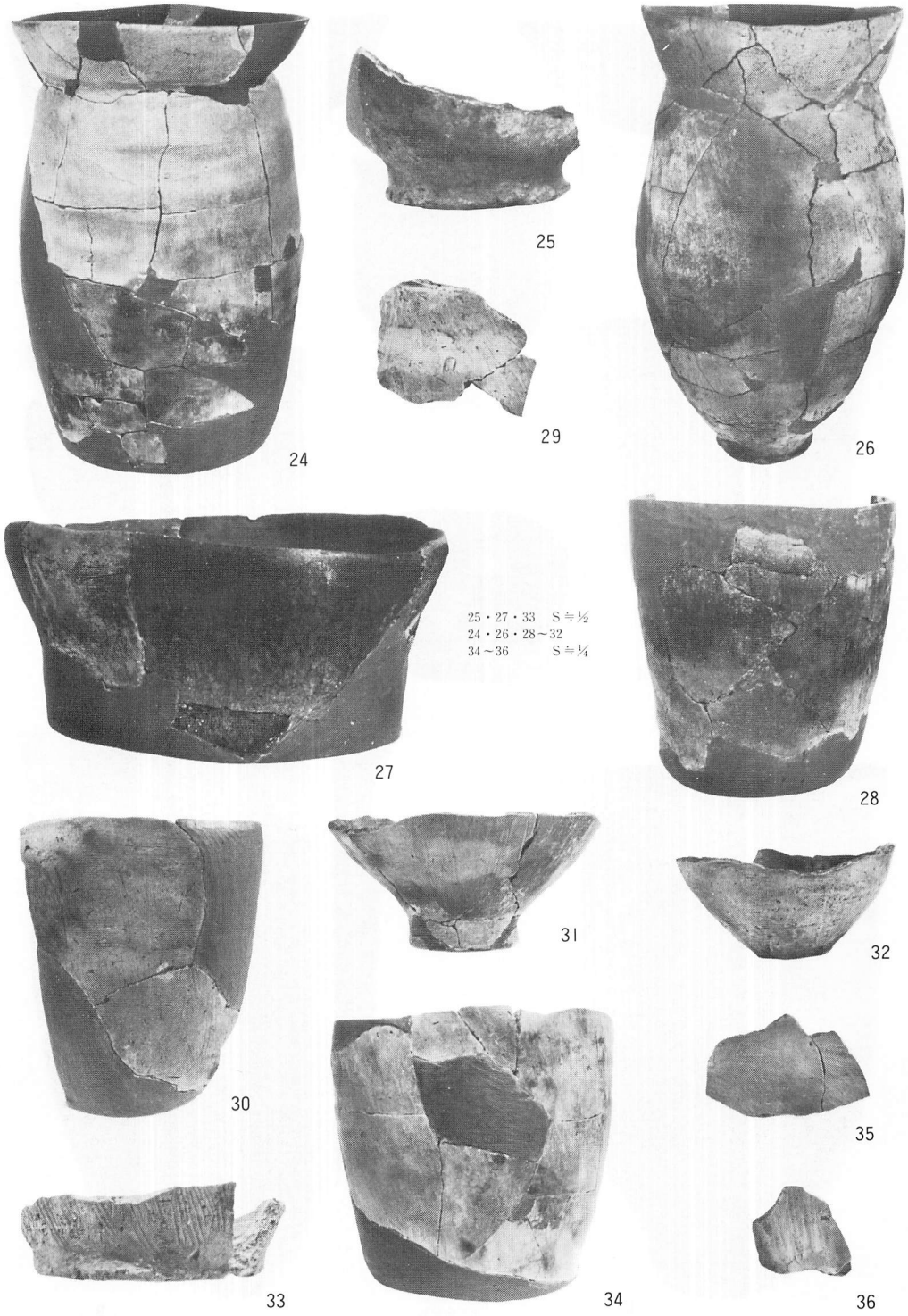
写真図版15　土坑・陥し穴状遺構



写真図版16　第1～5号住居跡・出土遺物

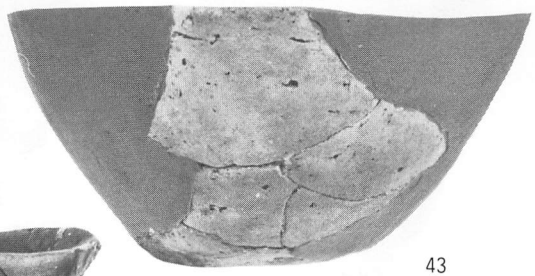


写真図版17　第２号住居跡出土遺物



写真図版18　第５～７住居跡出土遺物

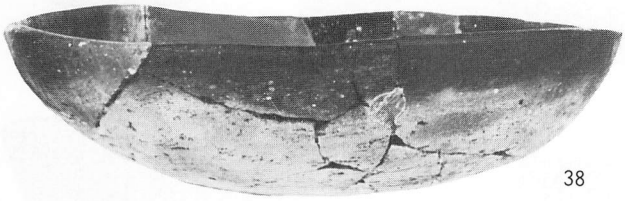
37



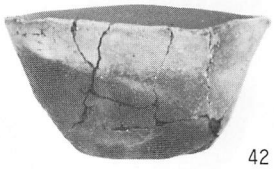
43

39

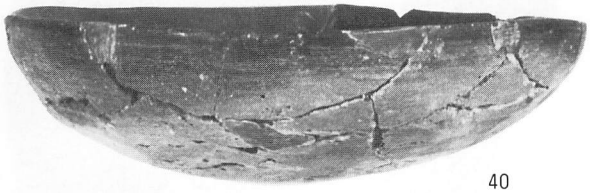
99　刀子（S＝½）



38

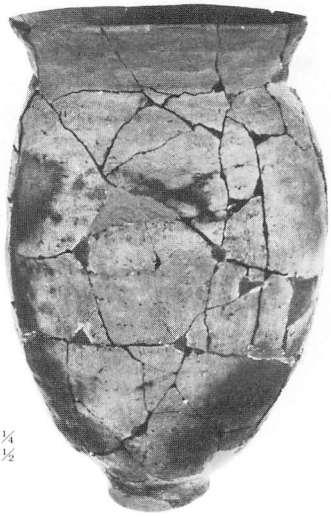


42



40

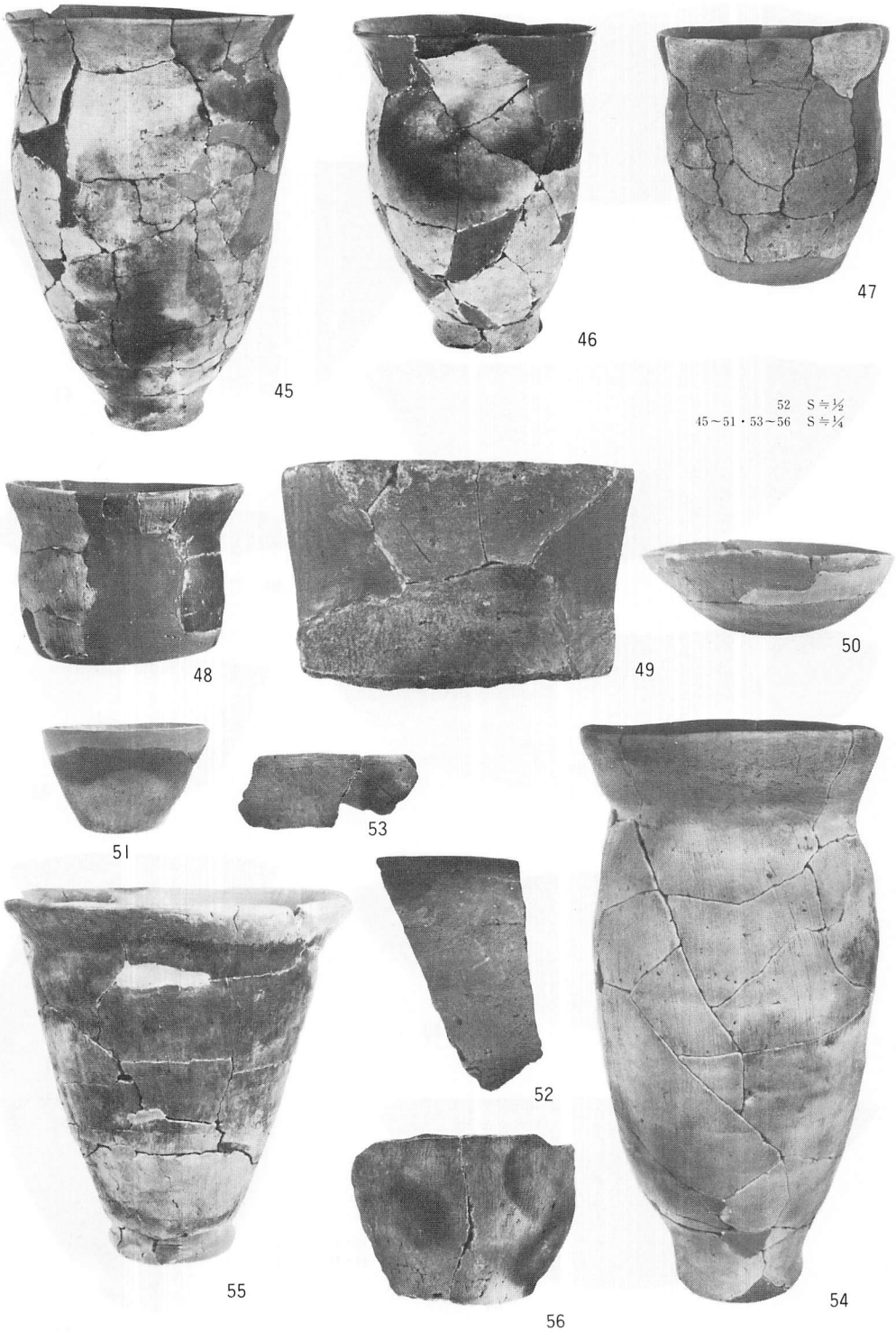
41



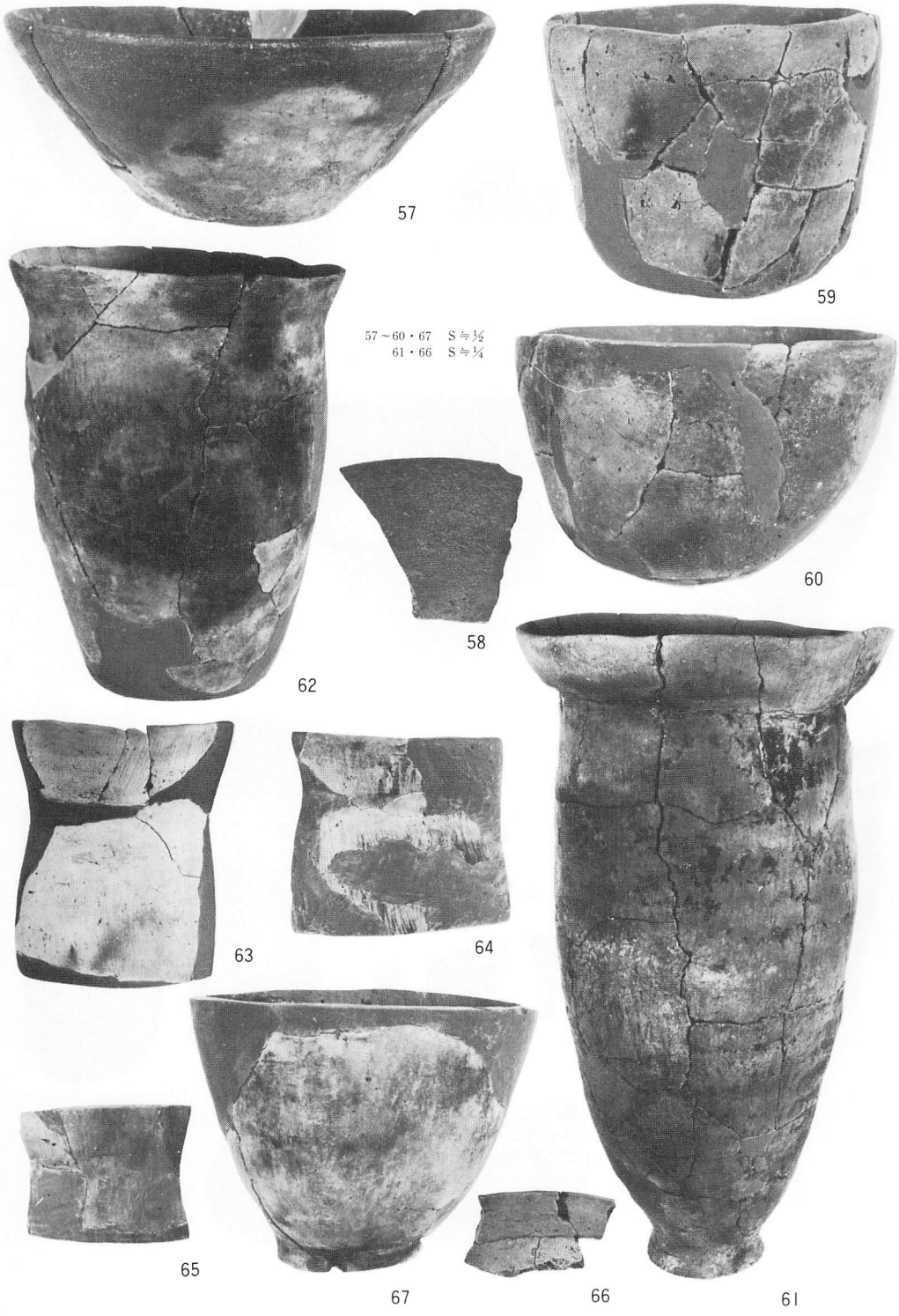
44

42・44　S≒¼
37～41・43　S≒½

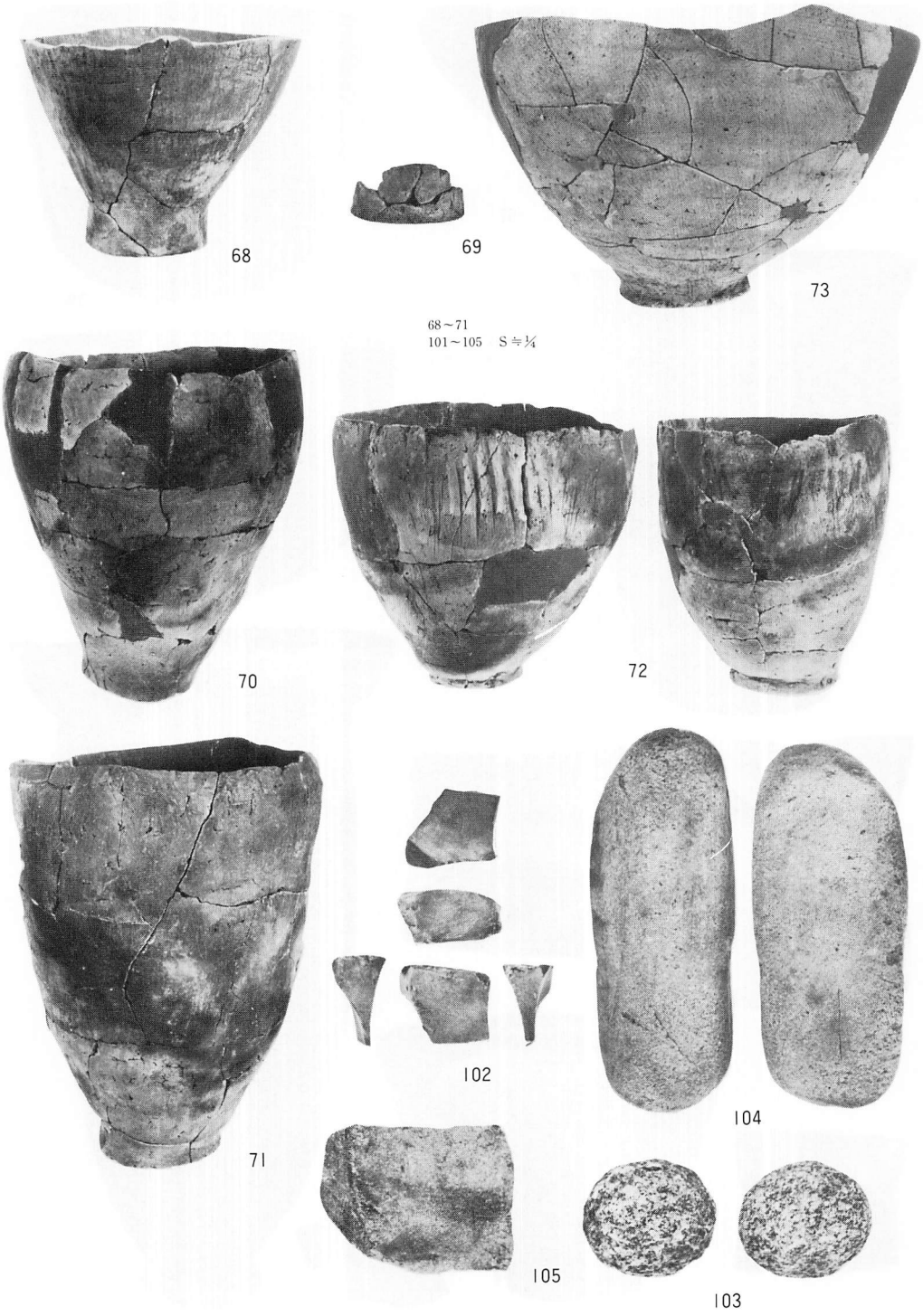
写真図版19　第8号住居跡出土遺物



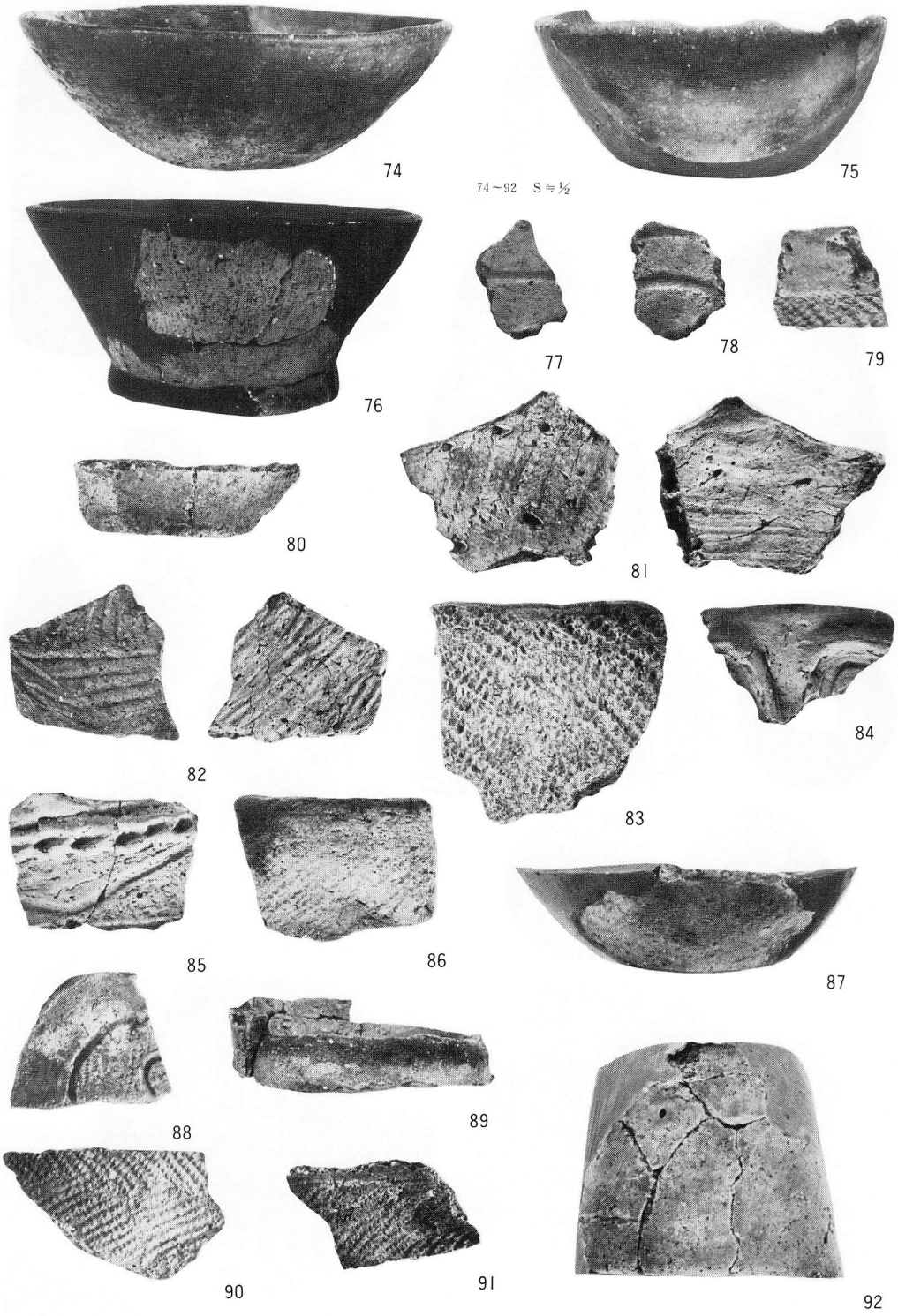
写真図版20　第８・９号住居跡出土遺物



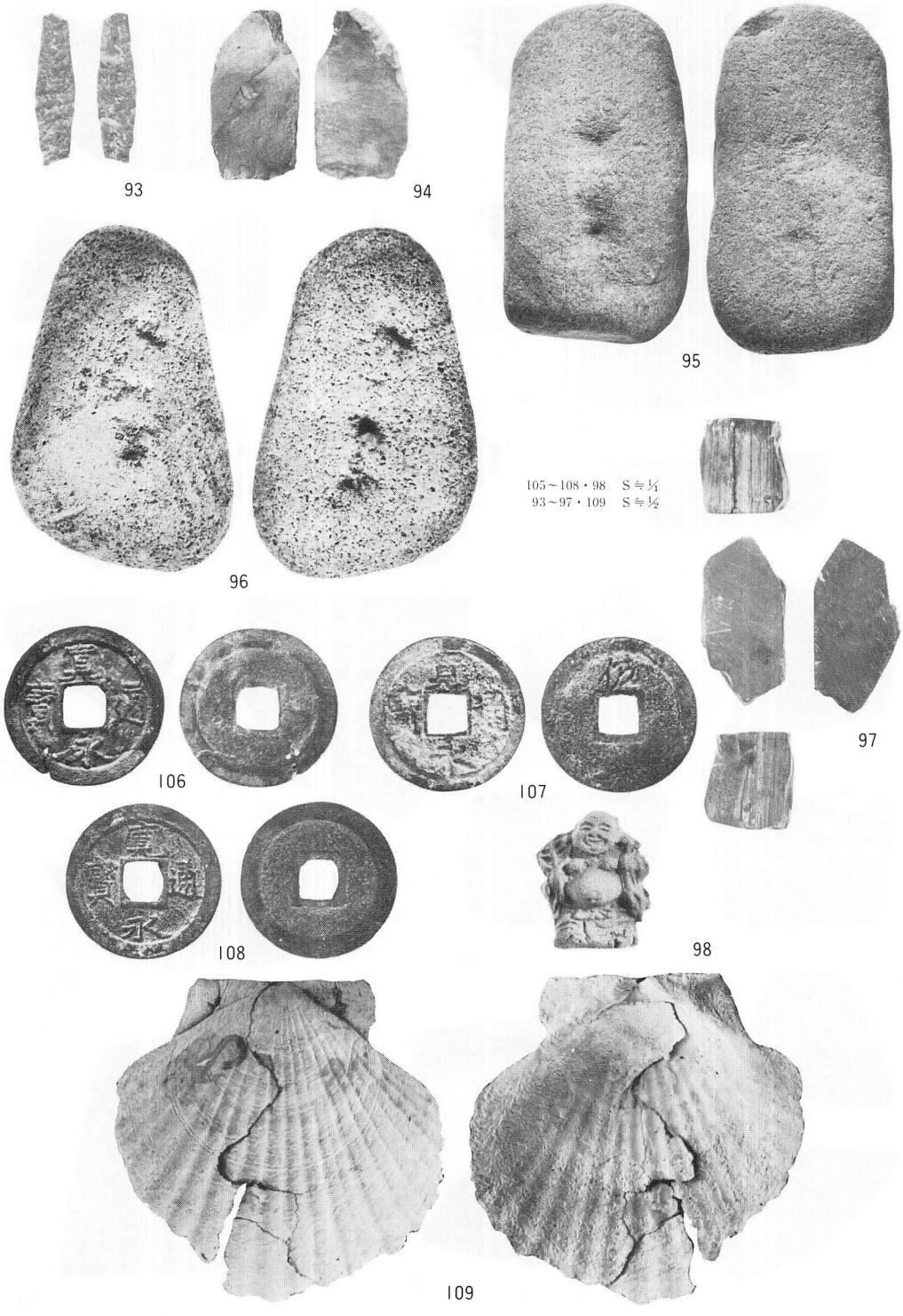
写真図版21　第10号住居跡出土遺物



写真図版22　第８・10号住居跡出土遺物



写真図版23　第11号住居跡・遺構外出土遺物



写真図版24　第８号住居跡・遺構外出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原 喜一
副所長	高橋 敬明

〔管理課〕

管理課長(兼)	高橋 敬明
課長補佐	森岡 陽一
主事	佐藤 理

〔調査課〕

調査課長	村上 康昭
課長補佐	鈴木 恵治
〃	三浦 謙一
主任文化財専門調査員	高橋 與右衛門
〃	工藤 利幸
〃	中川 重紀
〃	藤村 敏男
〃	高橋 義介
〃	高橋 正之
〃	渡辺 洋一
〃	佐々木 清文
文化財専門調査員	斎藤 實
〃	佐瀬 隆
〃	千葉 孝雄
〃	斎藤 博司
〃	東海林 隆幹
〃	佐々木 弘
〃	川村 均
〃	鈴木 貞行
〃	伊東 格
〃	斎藤 邦雄
〃	神 敏明
〃	佐々木 信一
〃	小原 眞一
〃	酒井 宗孝

〔資料課〕

資料課長	村松 義夫
文化財専門調査員	高橋 一浩
嘱託	根橋 文一
〃	吉田 十次
運転技士兼事務員	佐藤 春男
文化財専門調査員	松本 建速
〃	笹平 克子
〃	花坂 政博
〃	佐々木 努
〃	金子 昭彦
〃	濱田 宏
〃	羽柴 直人
〃	星 雅之
〃	高木 晃
〃	鎌田 勉
期限付専門職員	鎌田 精造
〃	阿部 勝則
〃	千葉 悟
〃	熊谷 博由
〃	新倉 信一郎
〃	山口 博英
〃	小山内 透
〃	柳田 磨
〃	田中 元明
〃	菅原 敬悦
〃	工藤 剛司
〃	高橋 英樹
〃	溜 浩二郎
〃	佐藤 修一

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第189集

丸木橋遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成５年３月25日
発行　平成５年３月31日
発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　盛岡市下飯岡11－185
電　話（0196）38－9001～2
印　刷　株式会社　杜陵印刷
〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22－50
電　話（0196）41－8000㈹

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993